

2024 明海大学  
「大学と地域連携の未来」シンポジウム  
実施報告書

2024年3月

主催：明海大学 教職課程センター・地域学校教育センター  
後援：千葉県教育委員会、東京都教育委員会、足立区教育委員会、浦安市教育委員会、  
時事通信出版局、日本教育新聞社、(財)きょういく創造育成財団



## 目次

---

1. 巻頭言・感謝の辞.....	2
2. 当日のプログラム.....	3
3. 参加状況.....	4
4. 開会式	
4-1. 開会挨拶：明海大学副学長 高野 敬三 .....	5
4-2. 足立区長 挨拶：近藤 やよい.....	6
4-3. 浦安市教育委員会 教育長 挨拶：鈴木 忠吉 .....	6
5. 基調講演	
「子供を取り巻くつながりが生み出すウェルビーイング」 露口 健司（愛媛大学大学院 教育学研究科 教授） .....	7
6. 学生発表（大学生による日本語指導支援） .....	2 0
7. 学生発表（留学生等による児童・生徒との交流） .....	2 4
8. 学生発表（大学生による学習支援） .....	3 0
9. パネルディスカッション	
大学と地域の連携によるウェルビーイング推進の可能性.....	4 2
10. 閉会式	
閉会挨拶：明海大学副学長 高野 敬三.....	5 6
11. アンケート .....	5 7
◆ その他の事業報告	
12. 日本語指導教員研修（足立区/都立飛鳥高校/都立田柄高校/都立南葛飾高校） ....	6 6
13. 2023 年度 英語授業改革セミナー.....	6 8
14. 2023 年度教職課程・地域学校教育センター（METTS）の歩み.....	7 0
15. 2023 年度 METTS NEWSLETTER 第1号から第10号.....	7 2
16. 文部科学省委託 令和5年度明海大学との連携による専門人材育成・確保事業 — MEIKAI-JOE プラス 2023 小学校外国語科等講座 —.....	7 5
17. 日本語指導（パネル発表） .....	7 6
18. 2023 年度 METTS 事業参加学生一覧.....	7 9

## 1. 巻頭言・感謝の辞

明海大学 学長 中 篤 裕

2024年2月4日に開催いたしました「大学と地域連携の未来」シンポジウムに際し、ご参加いただいた来賓の皆様、学校の先生方や教育委員会関係者、地元地域の皆様にも厚く御礼を申し上げます。また開会にあたりまして、本学と連携協定を結ぶ東京都足立区近藤やよい区長様ならびに浦安市教育委員会鈴木忠吉教育長様より、ご多忙の中、ビデオメッセージを賜りましたことに心より感謝申し上げます。

2016年に地域学校教育センターを開設して以来、シンポジウムも今回で8回目を数えるに至りました。この間には、新型コロナウイルスの世界的流行により、それまで当たり前に行われていた行事やイベントはもとより、日常のあらゆる場面で対応を余儀なくされたところです。しかしながら、本シンポジウムにつきましては、対面とオンラインのハイブリッド形式を取りながらも途切れることなく開催してまいることができました。これもひとえに関係の皆様のご理解ならびにご協力、そしてご参加各位の熱意に支えられたからこそ、と感慨を深くしております。

本学では、創立以来、社会性・合理性・創造性を身に付けた国際未来社会で活躍する人材を育成するとともに、人類共存の理念に基づき広く社会の発展に貢献する人材の育成を目的としています。変化するグローバル社会の中、決して時代に翻弄されることなく自己実現を図り、世の中の発展に寄与できる有為な人材を育成することが、大学教育に課せられた重要な使命です。そうしたことから、大学と地域の未来の可能性について関係のある皆様方とともに研鑽を続けている本シンポジウムには、大きな役割があるものと確信しております。昨年度は、キーワードとして、アフターコロナを見据えながら地域連携の可能性を「DX（デジタルトランスフォーメーション）」の観点から取り上げました。

今年度は、国連が掲げるSDGsの一つでもある「ウェルビーイング（well-being）」をテーマとしました。幸福であること、或いはその状態を意味するウェルビーイングは、国や地域を超えたグローバルレベルで持続可能な社会を形成するための原動力として重要です。とりわけ、将来、教職を目指す学生たちにとっては、ややもすると「ブラック」と言われがちな学校現場について、働き方や生き方、やりがいといった面から考えるきっかけともなりました。

基調講演では、愛媛大学大学院教授 露口健司先生に「子供を取り巻くつながりが生み出すウェルビーイング」をテーマにご講演いただきました。続く3つのグループからなる学生の発表では、連携する学校や地域におけるボランティア活動等を中心に、そのやりがいや苦勞、成果に関する実践について報告させていただきました。さらにパネルディスカッションでは、露口先生にもパネリストとしてご参加いただきながら、教育委員会と学校、そして学生の立場から、ウェルビーイングについて多面的な議論を展開することができました。ご登壇いただきました露口健司先生、足立区教育委員会学力定着推進課統括指導主事三輪政継様、東京都立飛鳥高等学校校長堀江敏彦様に改めて感謝の意を表したいと存じます。

今回、会場そしてオンラインで参加の皆様からいただいたご意見やご感想をもとに、明海大学では今後とも一層、地域に根ざした大学として小中学校、高等学校等の支援を行っていく所存ですので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

2024年2月4日

## 2. 当日のプログラム

### 1 シンポジウムタイトル：

2024 明海大学「大学と地域連携の未来」シンポジウム  
大学と地域の連携によるウェルビーイング推進の可能性

### 2 開催日時、会場（※対面とオンラインのハイブリッド開催）：

【開催日時】2024年2月4日（日）12：30～16：40（受付開始：12：00）

【会場】2206 大講義室

### 3 タイムスケジュール

時間	内容
12:30	<b>【開会式】</b> 司会：清宮 咲歩（明海大学外国語学部日本語学科4年） 橋口 和希（明海大学外国語学部日本語学科4年） <b>【副学長挨拶】</b> 高野 敬三（明海大学 副学長） <b>【足立区長 挨拶】</b> ※ビデオメッセージ 近藤 やよい <b>【浦安市教育委員会 教育長 挨拶】</b> ※ビデオメッセージ 鈴木 忠吉
12:40	<b>【基調講演】</b> 「子供を取り巻くつながりが生み出すウェルビーイング」 露口 健司 愛媛大学大学院 教育学研究科 教授
13:40	休憩
学生発表	
13:50	<b>【グループA】</b> 大学生による日本語指導支援 浦野 遥風（大学院応用言語学研究科1年） ヴ バオ ゴック（外国語学部日本語学科4年） <b>【グループB】</b> 留学生等による児童・生徒との交流 上原 二葉／吉田 未来／伊藤 千鶴（外国語学部英米語学科4年） 宿 愛敏（経済学部経済学科3年） 劉 優義（経済学部経済学科1年） 竹内 楓（外国語学部日本語学科3年） 橋本 義晴（外国語学部日本語学科2年） <b>【グループC】</b> 大学生による学習支援 川元 麻衣／児島 晴香（外国語学部英米語学科4年） 池内 夏美／布施 名菜／小川 翔太郎（外国語学部英米語学科3年） 芳野 友介／霜方 柚奈／齋藤 亜怜／花澤 真彩（外国語学部英米語学科2年） 吉野 青空（外国語学部日本語学科3年） 瓜田 謙心／早乙女 愛菜（外国語学部日本語学科2年）
15:25	休憩

<b>時間</b>	<b>内容</b>
<b>15:30</b>	<b>【パネルディスカッション】</b> 大学と地域の連携によるウェルビーイング推進の可能性
	パネリスト 露口 健司 (愛媛大学大学院教育学研究科 教授) 三輪 政継 (東京都足立区教育委員会 統括指導主事) 堀江 敏彦 (東京都立飛鳥高等学校 校長) 高木 由紀 (明海大学外国語学部英米語学科 3年) 宿 愛敏 (明海大学経済学部経済学科 3年)
	コーディネーター 山本 聖志 (明海大学地域学校教育センター 教授)
	司会 橋口 和希 (明海大学外国語学部日本語学科 4年)
<b>16:35</b>	<b>【閉会式】</b> <b>【閉会挨拶】</b> 高野 敬三 (明海大学 副学長)

### 3. 参加状況

教員 (小学校・中学校・高等学校・大学等)	40
教育委員会	28
学生・大学院生	126
地域住民	7
マスコミ	1
その他	7
<b>計</b>	<b>209</b>

## 4. 開会式

### 4-1. 開会挨拶：明海大学副学長 高野 敬三

ただ今ご紹介にあずかりました明海大学副学長の高野と申します。

挨拶に先立ちまして、このたびの能登半島地震で被害に遭われた皆様にお見舞いを申し上げますとともに、犠牲となられた方々のご冥福を心からお祈り申し上げたいと思います。

副学長とのことですが、私はこのシンポジウムを主宰する地域学校教育センターのセンター長も兼ねておりまして、主催者としての挨拶ということになります。

さて、ご来場の皆様、そして Zoom で参加の皆様、本日は 2024 明海大学「大学と地域連携の未来」シンポジウムにご参加をいただき、誠にありがとうございます。

回を重ね、今回で8回目となりますが、このシンポジウムは、本学の学生が、地域の皆様のお世話になりながら、様々な活動をさせていただいており、その集大成として活動の成果を発表させていただく場であるとともに、一つのテーマを定め、基調講演やパネルディスカッションを通じて考察を深めることによって、大学と地域の連携による教育的な成果をさらに向上させる機会とすることを目指すものです。今回は「大学と地域の連携によるウェルビーイング推進の可能性」をテーマとしました。

本日の基調講演では、「子供を取り巻くつながりが生み出すウェルビーイング」を演題として、愛媛大学大学院教授露口健司先生にお話をさせていただきます。先生は教育行政学、教育経済学がご専門で、ウェルビーイングを主な研究課題の一つとされ、早くからウェルビーイングの重要性を説かれています。講演概要によると「ウェルビーイングとは何か」というところからお話しいただけるようですので、私たちはもちろんのこと、本日参加している教職を目指す学生にとっても大変貴重な示唆になることと思っております。

パネルディスカッションでは、ご多用な中にもか



かわらず、教育連携をしていただいている東京都立飛鳥高等学校の堀江敏彦校長先生、足立区教育委員会学力定着推進課の三輪政継統括指導主事にご参加をいただけるとのこと、どうぞよろしくお願いいたします。

また、本シンポジウム開催に当たって、東京都足立区長近藤やよい様、千葉県浦安市教育委員会教育長鈴木忠吉様よりビデオでご挨拶をお寄せいただいております。ありがとうございます。

このシンポジウムが、次の新たな時代における地域、小中高等学校、そして大学との連携を一層推進し、それぞれがウィンウィンの関係を結ぶ中で、正に「ウェルビーイング」を実現し、更なる大きな発展を遂げていく、一つのきっかけとなることを心から期待しております。

最後に、いつも本学の教育、学生の活動にご理解とご協力、そして多大なるご支援をいただいている地域の皆様に改めて御礼を申し上げ、私の挨拶とさせていただきます。

本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

## 4-2. 足立区長 挨拶：近藤 やよい ※ビデオメッセージ

足立区長の近藤やよいです。

本日はシンポジウムのご盛会、誠におめでとうございます。明海大学の皆様には大学を挙げて足立区の子どもたちの英語力の向上に取り組んでいただいておりますことを改めて心から御礼を申し上げます。

今日は学生の皆さん方の発表もあると聞いています。発表を機にさらに内容がブラッシュアップされて充実の教育カリキュラムになることを大いに期待しています。国際社会に羽ばたくためにも、英語はなくてはならない力となります。ぜひこれからも学生の皆様をはじめ、明海大学のご協力を心からお願いを申し上げます。

本日のシンポジウムが実りあるものになりますことを心からご祈念申し上げて一言ご挨拶といたします。今日は会場に伺えずに大変失礼しました。



## 4-3. 浦安市教育委員会 教育長 挨拶：鈴木 忠吉 ※ビデオメッセージ

皆さん、こんにちは。浦安市教育委員会教育長の鈴木忠吉です。

はじめに、貴大学には本市教育行政の推進にあたり、多大なるご理解、ご配慮を賜っておりますことに、この場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございます。

さて、浦安市と明海大学は広く市民、児童及び生徒のための教育活動の振興に寄与することを目的に、平成29年3月、教育委員会と明海大学との連携に関する協定を締結しております。しかし、それ以前から明海大学の学生さんによるボランティア活動や地域国際交流、インターンシップの受け入れなどを行ってきたところであり、この協定の締結により、本市と明海大学の連携が一層促進されていると感じているところです。

具体的な取り組みとしましては、教員の英語指導力向上のための研修、放課後の市内中学生の学習支援を行う青少年自立支援未来塾、小学校高学年の知的好奇心や広い視野を持つことを目的とした「うらやすこどもクエスト」など、これらの事業は、子どもたちの学びの充実につながっています。

新型コロナウイルス感染症の流行により、教育現場におきましては活動が制限されていましたが、昨年5月の5類への移行を契機に各種のイベント事業も実施し、本市の活動も活気が戻ってきたところでございます。

本市も新たな取り組みといたしまして、令和6

年度からは、学校と地域の組織的、継続的な連携体制の確立のため、市立小中学校に浦安市コミュニティースクールを一斉導入し、学校と地域が一体となって子どもたちを育む地域とともにある学校づくりを進めていく予定です。子どもたちの成長にとっては、学校と地域の連携がますます重要になりますので、このシンポジウムを通じて、改めて学校と地域の連携のあり方を考えてみたいと思います。社会に開かれた教育課程の実現に向け、明海大学をはじめとする地域のさまざまな方のお力をお借りしながら、新しい時代を切り開き、しなやかに生きる子どもたちを育てていきたいと考えております。

本日のシンポジウム開催にあたり、関係者の皆様のご尽力に改めて敬意を表しますとともに、今後とも明海大学と浦安市教育委員会の相互協力、そして明海大学がますますご発展されますことを心からご祈念いたしまして、ご挨拶とさせていただきます。本日は誠におめでとうございます。





## 5. 基調講演

### ◆「子供を取り巻くつながりが生み出すウェルビーイング」

露口 健司（愛媛大学大学院 教育学研究科 教授）



皆さんこんにちは、愛媛大学大学院の露口でございます。先ほど紹介いただきましたが、つながりとか、信頼とか、ウェルビーイングとか、その辺りを中心に、この10年ほど、様々な研究を積み重ねてきております。ウェルビーイングは、翻訳すれば、いわゆる「幸福」とか「幸せ」ですよね。これには2000年の歴史がある。哲学的に「幸せとは何か」とか「幸福とは何か」とかですね。

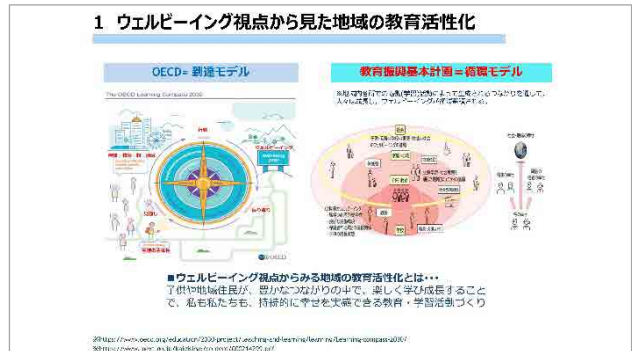
そこで、ウェルビーイングという言葉を使っているのには、やはりこの幸福論の2000年の蓄積の話をし始めると、收拾がつかないだろうということがあります。今、政策用語として出ていますのでね。さらには、法律、「幸福」という言葉は憲法にも入っています。「幸福追求権」、これは勉強しましたよね。宗教的な要素もあつたりします。哲学的、法律的、宗教的にも、いろいろな人がちょっと触っている言葉になるので、「幸福」というのは政策用語としては扱いにくいわけです。

そこで、OECDも言っているし、今、世界中で使われているしということで、「ウェルビーイング」というカタカナでスタートしているという背景があると私は思っています。「幸福」をど真ん中で扱うはやっぱりちょっと難しい。特に教育に入れていく時とか、いろいろ配慮も必要です。

今日の話の前半については、教職員支援機構のYouTubeに動画をアップしております、「露口健司」「NITS」で検索すると、動画が流れますので、またもう一回聞き直したいという方は、そちらをご覧ください。後半の「教師のウェルビーイング」のところは、先ほど紹介いただきました私の出版物を見たらえれば、理解できるようになっておりますので。前半はビデオで、後半は

出版物で対応可能になっております。

### 1. ウェルビーイング視点から見た 地域の教育活性化



それでは、一番大事なポイントからいきますね。欧米対日本、先ほどの副学長の紹介にもありましたが、やはり日本らしさというか、日本の文脈で考える必要があると思います。OECDは、「到達モデル」と言ひまして、小高い山の上に教育のゴールがある、それがウェルビーイングだと言うんですね。2018年に出てきました。6年前ですね。この時にSDGsが出てきていますので、SDGsというのは、それを達成することでウェルビーイングを実現するという建て付けになっていますので、構造は似た感じです。ウェルビーイングを目指す。子供たちが自分で主体的にいろいろな能力をつけながら山を登っていく、そして幸せに到達する。それを麓で仲間とか、親とか、教師とか、地域の方々が応援する。麓で「頑張れ」ってこの山登りを応援するみたいなメタファーになっているわけですね。ウェルビーイングに到達していく、それを支える。皆さん、どうですか。これは日本的な文脈でそのまま使えそうですか。ちょっと難しいですよ。例えば、私が思ったのは、やっぱり子供たちと一緒に登らないのかということです。OECDのモデルでは一人で行くのですけれども、やはり日本的なモデルだと、友達と一緒にとか、先生も一緒に登ったりしないのかという伴走型と言ひます。幸せのその先の語りをもっとしないかなということで、幸せがゴールではなくて、幸せな状態において、その先に更にすることがいろいろあるのではないのかということです。山の向こうに何がある

というところに、私などはちょっと気持ちが行くのです。皆さん方もよく OECD の到達モデルを見てみてください。これは日本ではそのままは難しいんじゃないですか。そこで「教育振興基本計画」です。これは政策レポートなのですが、なかなかよくできているなと思ったりします。幸せは循環していくというモデルです。この地域の中を循環していく。こちらの大学で言いますと、浦安市を循環していく、もうちょっと広げて足立区を含めて幸せが循環していく、東京都でとなるとちょっと大き過ぎますかね。幸せは人にどんどん伝わりながら循環していく。バトンパスのように、どんどんゼロ、ゼロ、ゼロでパスしていくのではなくて、ためていくのです。もらった人は幸せがたまる、それで、次の人に「はい、どうぞ」とすると、もらった人がまたたまっていくという、蓄積という要素がこの循環の中に入っています。大事な要素は回転と蓄積です。循環させながら蓄積もセットで回していくのです。そして、そのスタート地点にあるのが教師のウェルビーイングです。言われてみればそうじゃないですか。地域の中で、幸せのリレーをしようと思った時に、先生がへたっている、もうオーバーワークで調子が悪くて授業にならないとか、休みがちとかいう状況で子どもたちは幸せですかという話ですよ。まず先生のウェルビーイングから考えていかなければなりません。先生が調子悪いと周りがサポートしないといけないサポートする周りもちょっと調子悪くなります。しっかりサポートしてゼロスタートみたいな話になりますので、教師のウェルビーイングが起点になっているのです。ありがたい話なわけです。先生方が、地域のウェルビーイング循環のスタートというわけです。ということは、これは後半に話しますが、この「教育振興基本計画」の中でも、教師のウェルビーイングをどう高めるかという問題は非常に重要ですね。今よりも良くなることは、ほぼ確実ですので、これから教職を目指す方々は楽しみにしておいてください。

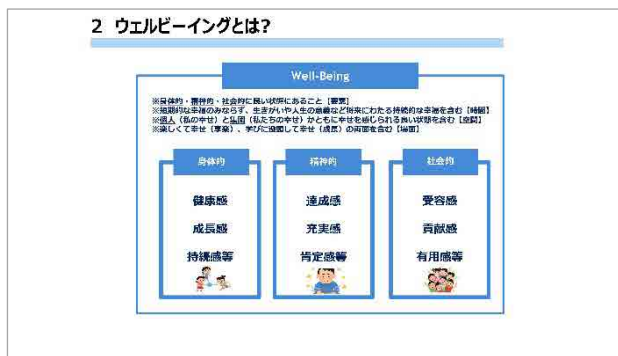
図の右の方に地球儀にみたいなものがあるのですが、これも大事なポイントで、自分の幸せだけではなくて、周りの人の幸せ、これは協調的幸福感とか言ったりしますが、自分だけではない、自分だけが幸せになるのではなくて、周りの人たちも一緒に幸せになるという幸福哲学をベースに

しています。あるいは、今の自分と未来の自分、今、幸せかもわからないけれど、ちょっと遊び過ぎだな、未来は地獄かもということもありますし、今はちょっと大変、いろいろ勉強しないといけない、だけどきっと自分には希望あふれる未来が待っているとかなですね。このウェルビーイングというのは、現在、未来で違うし、自分と他人でも違ったりして、時間軸、空間軸と言いますが、時間を超えて、空間を超えて考えていくテーマという設計になっております。なかなか壮大なのです。対欧米というような建て付けになっております。

皆さん方どうですか。地域にいろいろボランティアに行くと、こんな感じになっていないですか。

子供や地域住民が豊かなつながりの中で、楽しく学び成長することで、私も私たちも、持続的に幸せを実感できる教育・学習活動をつくっていきましょうよ、ですね。これは学校もそうですし、家庭教育、社会教育含めてですね。教育業界というのは、こんなところを目指していったらどうでしょうか。皆さん方が実践されている、まさにそのものだと思いますね。楽しくやっているはずですよ。楽しくなかったらいけないと思いますのでね。

## 2. ウェルビーイングとは？



「ウェルビーイングとは？」とあるんですけど、今、言った話の復習になってしまいますので、大事なところ2点だけいきますね。1つ目はですね、一番上に書いてあります。「教育振興基本計画」でこうやって書いてくれているんですよ。ウェルビーイングとは「身体的・精神的・社会的に良い状態にあること」、以上ですね。WHO から来ていますので、健康重視モデルではあるのですが、ありがたいですよ。ウェルビーイングって何？」このことなんですよ。これもう教員採用試験とか苦しむ必要はない。これを書いたらいいわけですね。ラッキーですね。もうこれが出てくるまでは、

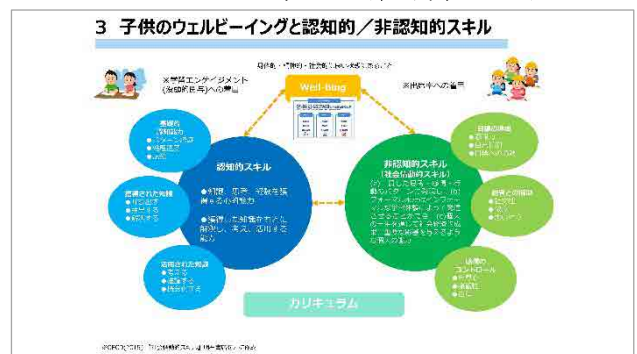
結構、「何だろう？」みたいな話をしていたんですけど、政策用語として出てくると、後は教育機関としては楽です。他の研究者とかはまだ悩んでいますけれど、教育機関はやっぱり中央の政策に沿ってやっていくところがありますので。身体・精神・社会というのは、樺沢先生とって、精神科医学の方でウェルビーイングの本をたくさん出しているのですが、その方の主張とすごく一致しています。樺沢先生は、まず身体的な傾向、これがベースだと言っています。健康がウェルビーイングの1階、2階はつながりです。社会的とありますけれど、受容感、貢献感というのはつながりのことです。健康があって、つながりがあって、一番上に精神的な達成、充実があります。健康、つながり、達成という、この3層構造モデルというのを主張しております。非常にわかりやすく、私もすんとくるんですけど、いろいろ仕事でうまくいくとか、目標を達成できても、人間関係が壊れたとか、家族を壊したとか。健康が調子悪くなったというのでは困るわけです。健康、つながり、達成みたいなモデルを提示されます。非常に親和性が高いと思います。身体、精神、社会的、やはりWHOが元にあるので健康にウエイトを置いたモデルだと思います。本当に重要な定義の話です。

次に、2番目、3番目は先ほど言いました、時間軸、空間軸の話です。一番下を見てください。これは学校特有かも分からないですね。では、子供たちのウェルビーイング、幸せをどうやって高めたらいいかという時に、楽しくて幸せだけでよいのかということです。給食の時間とか、確かに楽しい、休み時間とか楽しい、だったら授業中ももっと面白おかしくやろうみたいな話があるかも知れませんが、それだけでは不十分です。享乐的な幸福だけではいけなくて、学びに没頭して幸せということです。次のスライドでも強調しますが、学びに没頭して幸せ、こういう成長的な幸福感というのを意識しておかないと、間違っただ学校運営になってしまいます。これがウェルビーイングか、享楽だと言って、休み時間どんどん長くして、早く帰してあげようとか、ゆっくり始めてとか、そんな考え方もあるかも知れませんが、やはり学びへの没頭ですよ。『わかった』『できた』の積み重ね、その経験をいかに学校の中で多くしていくかです。皆さん方が関わって

る学校はどうですか。子供たち、何かに没頭していますか。何かに集中していますか。それをサポートできていますかね。そうであれば、時々おしゃべりなどもして、享乐的にも幸せ、成長的にも幸せを提供できているのではないですかね。享楽と成長が大事です。成長だけではしんどいですね。

ガリガリガリガリやらないといけなくなりますので、享楽も成長も両面が要るんですね。これが4つ目です。

### 3. 子供のウェルビーイングと 認知的／非認知的スキル



このウェルビーイングとスキル面というのはやはりすごく関連していて、矢印を見たらわかるんですけど、双方向なんですよね。認知的スキルは基本的にテストで測れる学力とっていただき。テストで測れる、定着させるべき基礎学力ですね。認知的スキル、学力が高まって幸せというラインはありますよね。学力が高まっていることができるようになったら幸せを実感できますよね。

一方、幸せな状態にあるから勉強に集中できるとか、勉強を頑張れるとかいうこともあります。

何か家のことでトラブっているとか、友達とトラブっているとか、先生が嫌いだとか、幸せな状態でないと勉強に集中できないですよ。やはり幸せな状態に置き、パフォーマンスを上げる、これは日本でも民間企業では各社が導入していますよね。チーフウェルビーイングオフィサーとって、従業員のウェルビーイング向上のための執行役員がいるんです。従業員のウェルビーイングを上げて、生産性の向上、付加価値向上、パフォーマンス向上、そういう施策を持った企業がどんどん増えてきています。大手民間企業のホームページを見たら、「ウェルビーイング」とか「幸せ」とか普通に書いてあります。大手各社がこぞって従業員のウェルビーイング向上を謳っています。今、教員

もこのモードですね。教員のウェルビーイングを上げて、生産性、パフォーマンスが上げようとしています。子供についてもそうです。双方向です。

両方にあるのですが、その結節点にあるのが、「学習エンゲイジメント」、先ほど言いましたが、やはり学びへの没頭ですよ。勉強が面白いとか、集中してあってあっという間に45分、50分がたったというような、この世界観をつくり出せるかどうかです。学びへの没頭、「学習者エンゲイジメント」とか、「学習エンゲイジメント」とか、いろいろな表現があるのですが、これからどんどんこの言葉が出てくると思います。主体的・対話的な学びというものもあって、グループワークをさせるでしょう。ただ話しているだけとか、関係ないことを話したりとかではなくて、対話への没頭です。

探究的な学習、これもただ調べただけとかではなくて、探究活動への没頭ですね。いろいろな場面での没頭の要素がありまして、それらを高めるためにどう支援していくかです。こうしたところが、また次のテーマになってくると思いますが、ウェルビーイングという観点からいくと、この子供のエンゲイジメントというのもセットで重要なフレーズになってきます。もう2年、3年したら、どんどん出てくると思います。そして、学習指導要領などに落とし込まれる可能性もゼロではありません。「没頭的関与」とか、どんな翻訳になるかまだわからないですけど、未来を見据えて、皆さん方が教員をやる頃には「没頭的関与」とか言っているかも分からないですね。

一方、右側が非認知的スキルです。これは埼玉県が有名ですかね。非認知的スキルを50問ぐらいの尺度をつくって、毎年やっていますけれど、視覚化を図っていつています。非認知といたら認知以外の全部みたいな話なので、社会情動的スキルと絞り込みをしております。これはOECD 2015年の文です。右側に9つほど社会情動的スキルの要素が挙がっているのですが、非認知的スキルはみんな知っていますよね、今の子供たちに必要な社会的なスキルで、将来の所得を認知的スキルにより決めるとか、将来成功する確率が高いのは非認知的スキルの高い子の方だとか、とても重要な要素なのです。一番上からいきますと、非認知的スキル、社会情動的スキルのスタート地点、

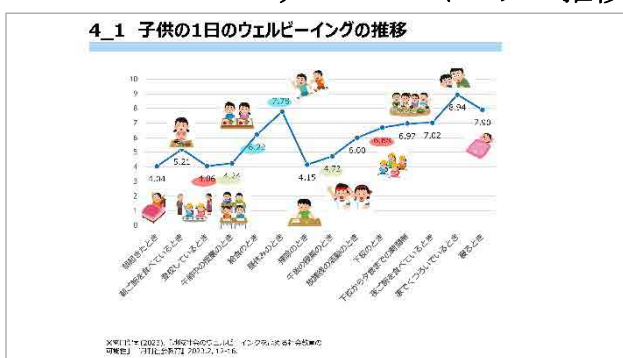
1番バッターは「忍耐力」からいくわけですね。我慢する力、ここからですね。グリットなんていうのもちょっと流行りましたよね。いかに忍耐できるか。そして自己抑制、自分で自分をコントロールとかですね。さらに3つ目は目標への情熱、目標を持ってやり遂げるとかです。皆さん方が部活動でやってきたような要素が、1、2、3番と並んでいます。これが非常に重要なわけですね。忍耐、自己抑制、目標への情熱、体育的行事とか、特別活動の中でも、たくさんやってきたと思うんですけど、世界から見たら、日本のやっているこの教育の1番、2番、3番、とても重要で、すごいなあと称賛されているわけですね。ところが、一方、今の日本ではこの1番、2番、3番が弱まっているような感じもするんです。もう1回思い出さないといけないですね。世界が評価している1、2、3番ですね。この3つでランナーをためていかなければなりません。真ん中に行きますと、今度は他者との協働ですね。社交性、敬意、思いやりです。人とのつながりとか、協調、協働ですよ。

これが2つ目に並んでいます。これを身に付けようと思ったら、子供たち同士で関わるような活動を仕組んでいかないといけないですね。最後は感情のコントロールで、自尊心、楽観性、自信ですね、この3要素です。やはりこれから生きていく中で、自信を持ってないと厳しいですよ。自尊心、楽観性も大事です。うまくいくという希望を持ち続ける、スキルになるのですかね。いろいろな概念が輻輳するところではあるのですが、この9つが、非認知的スキル、社会情動的スキルとして重要であるということです。そして、これらに基づいて子供にアンケートをして視覚化するという方法もあれば、米国の教育経済学者ジャクソンらのグループは、アンケートは大変だと、とある一指標で子供の社会情動的スキルが視覚化できないだろうかと、彼らは出席率という指標を編み出しました。右に並んでる9つの要素をよく見てください。毎日元気に学校にやって来る子供たちは1番から9番まで揃っていないですか。忍耐、自己抑制、ちょっと嫌だなんていう時も来るし、夜、ゲームを頑張りたいけれど、いやいや、こまめとか自分でコントロールできますし、目標を持っている、他人とも仲良く協調して、自信もあってですね。もう10年以上前の研究ではあるのです

けれど、結構この出席率で代替がきくということです。どうですか、皆さん、この右側の9つを高めようとすると、学校など、どこかで集団行動をしなければなりません。集団行動ですね。都市部の場合だったら選択肢はいろいろあります。私たちのように愛媛県とかだと選択肢が学校しか基本ないので、学校で友達とこういった非認知的能力を高めるような活動に従事していかないと、ちょっと未来が心配になるということですよね。不登校に関しても、今、パネルデータ、パネル調査がたくさん出ていて、10年、20年前に不登校だった子供たちのリスク的な要素が、どんどん視覚化されていていきます。10年、20年前と今とは違うということもあるのですが、ただその辺りを織り込んで指導に当たっていかないといけないというところはあるわけですよね。これは親の話とも関連するのですけれど、7、8年前に愛媛県で保護者に学校を信頼する時ってどんな時という調査をしました。堂々第1位は、子供が「行ってきます」と言って元気に学校行っている時、これですね。逆に考えてみてください。子供が「行きたくない」と言っている時って、学校に対する不信感を抱いている時と言い換えられるわけですよね。不登校対策ではこの辺りも念頭に置かないといけないと思います。いろいろな原因が、新しいのがいっぱい出てきますので、その総合的な分析をして提案、提言をしていかなければなりません。

#### 4-1. 子供の1日の

#### ウェルビーイングの推移

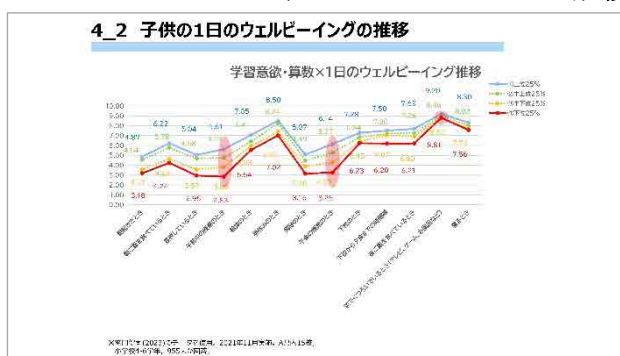


このグラフは、2021年の11月だからコロナ真っ只中なのですが、小学校4～6年の子供たち約1,000人、15校の1日の幸せのリズムです。愛媛県などいろいろな地域から取りました。朝起きてから寝るまでの各イベントについて幸せの度合いは0から10で言うとどれぐらいと帰りの会で調

査をしました。皆さん方も、朝起きた時、私は何点からかなとぜひまた線を引いてみてください。いくつかポイントがあるんですけど、やはり先ほど言いました、享樂的幸福の給食、昼休みはガツと上がるわけですよね。頑張らないといけないのが授業中ですね。午前が4.24、午後は4.73、午後の方は技能系とか、体を動かす授業も多いですね。まずいと思ったのが、登校中が4.06で、帰る段になると6.68という点です。今から行く先は地獄ですか。帰る先は幸せな家庭ですね。先生方には激震が走っています。完全に、学校へ来る方が「イヤだ」「しんどい」と言うわけで、早くお家に帰りたいというわけですね。これは、「無理しないで来ないでいいよ」と言ったら来ないよなという話になります。あともう一つ、これを地域の方にも見せたら、地域の方にも「あっ出番がある」ということになります。皆さんに「しましょ」と言うわけじゃないのですけれど、登校時とかに子供たちをエンパワーメントするような活動ですね。地域のお年寄りなどが一番いいかも分かりませんが、横断歩道とか通学路とかで「頑張ってください」と言って、パワーを与えます。それが「きつい」という子供もいるかも分かりませんが、その辺は、地域で子供たちと学校と一緒に考えてもらえたらと思います。何かこの登校中に仕掛けができないでしょうか。行く先が幸せだったら、こんな4.06ということはないですから、まずは先生なんですからね。大体どの学校でやっても似たようなスコアだと思います。

#### 4-2. 子供の1日の

#### ウェルビーイングの推移



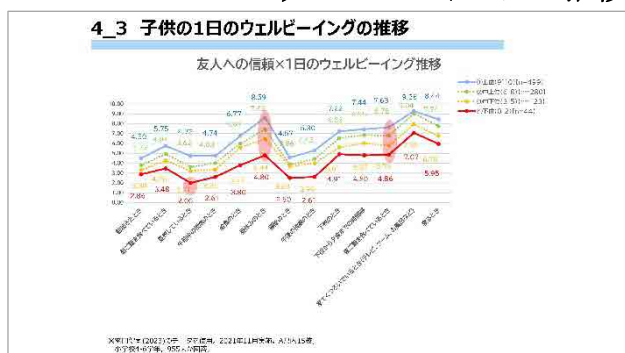
そこで、これに飽き足らず少し深掘りしました。算数なんですけれど、青のラインは、学習意欲上位25%の子の1日ですね。結構、高いところで動くんですね。そして、赤が下位25%で、「算数イヤ

だな」と思っている子の1日です。起きたところから大分差があるのですが、大きく開くのが、やっぱり授業中ですね。「算数嫌いだな」という子供たちは授業中の幸せが2.83、0から10で2.83といったら大概ですよ。私でも「しんどいな、今日は」と思う時は大体3ですので、それよりも更という経験を午前も午後もしているわけです。この勉強嫌いかどうかという子も、寝る前になったら関係なしです。ちょっと最後にゲームとか、お楽しみのことをしていたらイーブンになります。学校にいる時、勉強中に差が開きやすい、これは当たり前と言ったら当たり前ですが、ただどうですか、クラスの子供たちの学習意欲が高かったら、1日の幸せのリズムは相当高いですよ。

やはり基礎学力とか、そして学ぶ意欲は上がっておかないということです。子供のウェルビーイングと学力というのは密接につながっています。

### 4-3. 子供の1日の

#### ウェルビーイングの推移

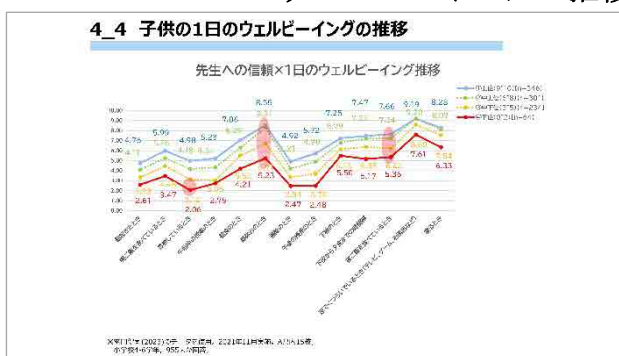


こちらが友人への信頼とウェルビーイングの関係です。先ほどと聞き方が若干違います。友達への信頼を0から10として子供に聞きました。0、1、2と答えた超低めの子供たちは、赤の軌跡をたどります。友達と関係ができていないと、登校中などは2です。今から学校へ行こうという時に2ですよ。これはたまらないですよ。そして、授業中2.6とかです。友達がいなくて休み時間も上がりきりません。休み時間でも4.8で5までいきません。そして午後も下がります。家庭にもちょっと引きずっているのですけれど、学校よりはスコアは高いということです。友達がいる、いない、やはり対人関係、人間関係をしっかりつくってあげないといけないですよ。数年前に私は世界中の子供のウェルビーイングの調査研究をまとめたことがあって、なんてことはない、子供

の幸せはもう対人関係です。親、友達、先生、地域住民、この順番です。親からです、親との人間関係、次は友達です、友達との人間関係、そして教師です、教師との人間関係、最後は地域の方ですね。これはセーフティネットっぽくなくなってはきますけれどね。それらの人間関係とか信頼関係というのが、子供の幸せを決定的なものにする、もう世界中、どこでも一緒ですね、つながりだというオチになるわけなのです。

### 4-4. 子供の1日の

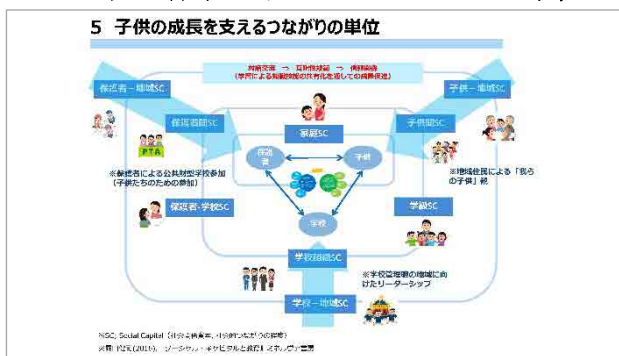
#### ウェルビーイングの推移



先生との信頼も似た感じでした。登校している時は2.06で、午前の授業は2.75、休み時間も上がりきりません。そして、お家にも持ち込んでしまうというところがあったりします。先生と信頼関係がないと、やはり1日のこのリズムってなかなか上がりにくいですね。先生との信頼関係のある子は、高いところで推移しますので結構幸せです。

先ほど言いました、やはり、つながりとウェルビーイング、この接点は信頼と言い換えてもいいでしょうか。つながりとか信頼、そしてウェルビーイング、非常に関連性が強いということがわかってきます。

### 5. 子供の成長を支えるつながりの単位



そして最後に、私は、ソーシャル・キャピタルとか、つながりの研究をこの10年間やってきて、全

然売れていないんですけど、出版物を3冊出しました。つながり、ソーシャル・キャピタル研究の中で分かったことをまとめています。その売れていない3冊の内容をギュッと1ページでいきます。

真ん中は、認知、非認知、ウェルビーイング、先ほどやったやつですね。この認知、非認知、ウェルビーイングというのはやはり家庭での親子のつながりです。SCはソーシャル・キャピタル、社会関係資本、わかりやすく言うとながりのことです。つながりは、自分とか社会の資本であるという考え方ですね。この10年間、東日本大震災以降、すごくブレイクした概念です。では、まず家庭で、次に右の方へ行きましょう。子供間、これは子供同士のつながりですね。先ほど子供の信頼でちょっとやりましたけれど、子供のつながりです。学級SCは教師と子供たちで、先生と子供たちのつながりが豊かでないと、認知、非認知、ウェルビーイングは上がりません。「先生、嫌い」と言っている中では上がりませんでしたよね。子供同士もそうですね。そして、右上、皆さん方はここです。

子供と地域ですね。これもエビデンスはたくさんあります。地域の方々とのつながりがあると、学力まではなかなか行きにくいのですが、学習意欲とか、幸福感とか、自己有用感とか、自己肯定感とか、そういった認知的なプラスというのがたくさんあります。サードプレイスの研究というのがたくさんあって、家庭、学校の次の第3の居場所の中での研究が多いんです。子供たちのウェルビーイングだったり、非認知的スキルの一部だったり、皆さん方も上げていると思いますよ。学習支援をしていたら、認知的スキルも上がっているでしょうからね。地域の方々が子供たちの認知、非認知、ウェルビーイングを上げることができている。もしよかったら、自分たちのボランティアでどれだけ子供たちのプラスになっているか、調査研究でもしてみてください。今、そうした研究はたくさん出てきております。小学校の場合だと学童だとか、放課後子供教室とか、あるいはスポーツ少年団とか子供食堂とかですね。こういったサードプレイスの効果の研究というのが、今、ちょっとブームになってきています。やはりサードプレイスは大事なんですよ。セーフティネットですね。つながりのセーフティネットです。家庭でもうまくいかない、学校でもという子に第3の居

場所ですね。だいたい社会・経済的背景的に厳しい子供たちが、このサードプレイスを求めてやってくるわけです。そこでの支援は重要ですよ。

下に行きましょう。学校組織、先生同士のつながりがうまくできていないと、認知、非認知、ウェルビーイングが上がりにくいんですよ。先生がバラバラな学校というのは、これは何が起きるかといったら、やる先生はやる、やらない先生はそのままという指導力の格差です。これが何につながるかというと、子供の意欲格差ですね。先生の指導力が高いところは、子供たちの意欲も高くなり、学力も上がっていきます。逆のパターンだと、どんどんどんどん子供たちも下がって行きます。先生方が好き勝手バラバラな学校は、指導力格差が生まれやすくなります。先生の同士が信頼ベースで、授業研究など、学び合い、支え合い、高め合うような組織だと、若い先生もベテランも中堅もみんな伸びていきますから、指導力の底上げができるわけです。この組織のつながりがないと厳しいです。あとは学校と地域です。今、先生方も地域との連携ということで足を運んだりしています。またこの辺は後で紹介します。社会に開かれた教育課程ということで、先生方と地域の大人たちが協力して、地域学習をどんどん取り入れていったりしています。もう皆さんやっている、今、この地域連携を学習にどんどん入れ込んでいっています。

先生と地域の人とのつながりということも重要です。教師側から地域とのつながりを積極的に考えてみてください。もう今のうちからこういう経験がたくさんできていたら、アドバンテージはすごいと思います。次に保護者と先生ですね。これも言うに及ばずなんですけれど、親と先生とのつながりだったりとか、あとは親同士のつながり、これは中学、高校ではそこまで意識はできていないと思いますが、もちろん中学校でも大事なんですけど、小学校では大事です。親同士のつながりがあると、保護者が地域にも出ていきますし、学校にも来てくれるんですよ。一番後ろに挙げている『学校組織の信頼』という本があります。2012年、もう10年以上前ですけど、まとめました。

250ページぐらいの本で保護者3万人ぐらいからマーケティングの手法で調査したんですよ。250ページ書いた結論が、保護者の孤立は百害あって一利なし、子供にも、親にも、学校にも、保護者の

孤立状態はプラスをほとんど生み出さないということです。ここにいる皆さん方が教員になった時に、ちょっと念頭に置いておいてみてください。

保護者の孤立、親に仲間がない状態というのは、子供にとっても、本人にとっても、そして先生にとってもいいこと全くないですよ。今どうですか、終わりそうですけれど、このコロナ禍で親同士がつながる行事とかがどんどんなくなってきておりますので、保護者の孤立状況というのが進んでいると思います。今、愛媛県で起きていることは、家庭訪問を復活させる地域がいっぱい出てきています。一時はやめ気味で、チラシだけ入れてきましたとか、電話だけとかでやっていましたけれど、今はもう家庭訪問が復活しています。背景は親とのつながりを最初にガチっとつくっておくことです。保護者との信頼関係をガチっと先につくっておくと、後が楽なんですよ。保護者の顔も名前もわからないまま進めていくのはすごく不安だし、信頼関係ができていないと、6月、7月とかに突然の一撃があります。だから4月の段階で信頼をガチっとつくっておく。信頼はやっぱり資本なんですよ。この信頼の持つ効率化の力というのがあります。信頼関係があると仕事がスムーズです。これは皆さん方の友達関係でないですか。信頼関係があるとスムーズに進みますよね。ないと対立の調整とか根回しとか大変ですよ。いろいろな負荷的な行動が必要になります。信頼関係があると、後が楽、だから信頼関係が持つ効率化の力をもっと使わないといけなわけです。業務改善といってバスバス切り過ぎると、逆に危なくて、大動脈を切ってしまう学校も結構あります。切り過ぎて、それを切っちゃダメでしょうという学校があります。信頼の持つ効率化の力は、親同士もそうですよね。親同士の信頼があるとそこから助け合い、支え合いが生まれてきたりします。

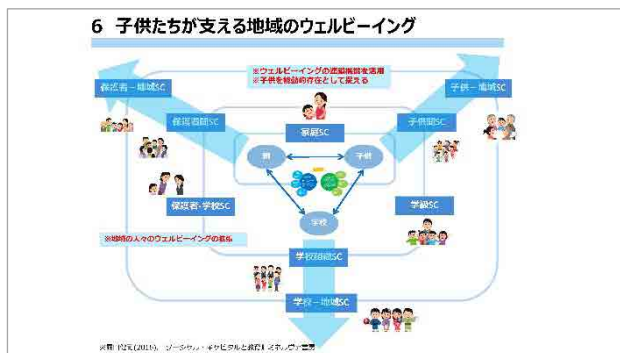
教師と親も同じです。信頼の持つつながりの力でですね。校区の中のこういったいろいろなつながり、信頼関係を使って、子供の認知、非認知、ウェルビーイングを高めていきましょう。いきなりじゃなくて、そこにはいろいろな単位のつながりが必要になるということです。9つぐらいあるので、皆さん方も一応考えてみてください。

保護者と関わっている人もいるかも分からないし、先生と関わっている人もいるのでしょうか、ど

の辺に自分があるかなということです。

## 6. 子供たちが支える

### 地域のウェルビーイング



そして、今はこっちですね。子どもたちが大人たちを幸せにしていくということです。子どもたちは、大人に幸せにされる受動的な存在として描かれがちなのですが、いやいや、今は、子供たちが地域で学ぶ、それに関わる保護者、地域の方々が幸せをお裾分けしてもらっているのです。そうでしょう。子供たちにいろいろ調べて提案をもらって、これをやってみようかとか、子供たちの存在、学びが、地域の大人を、そして先生を元気にすることもあるでしょう。皆さんもないですか。子供たちにちょっと元気をもらったとか、まさにその世界です。幸せにされる受動的な存在ではなくて、人を幸せにする能動的な存在として描いていく必要があるかなということです。今やっているエージェンシーなんてまさにそうですよね。子供たちが主体的に学び、動き、地域を変えていく、大人たちに変化を求めていく、そういう世界観をちょっとウェルビーイング観点でまとめています。幸せにされる存在というだけではなしにということです。

## 7. 地域のウェルビーイング総量の向上へ

7 地域のウェルビーイング総量の向上へ		
※子供たちと関わることで、下記の意識・行動が促され、地域の人のウェルビーイングが向上する!!		
観点	項目例	児童生徒 保護者 教員 地域住民
関わり	地域の人の関わりをどうしている。	
地域参加	地域のボランティア活動に参加している。	
魅力	地域のよいところについて人々と会話する。	
社会関係	地域の人の暮らしや価値観を感じる。	
多様性	地域には多様な価値観がある。	
結束	地域の人は対立を乗り越えている。	
災害意識	地域の人の防災意識を高めるようにしている。	
安全	口中と地域を1人で多くの安全な場所がある。	
関与	地域の中で自分の意見や考えを述べていくことができる。	
配慮	地域の人が必要とすれば、支援を提供している。	
貢献	災害等が起きたとしても、すぐに回復できる。	

そして、これは、当てはまりにくいかわかりませんが、地域の中で幸せな人が抱く実感なんです



けれど、子供から、保護者から、先生から、地域住民から、多くの方々がこういう要素を充足できると、その地域のウェルビーイング水準はとても高いね、ウェルビーイングが循環しているよね、たまっているよね、ということが言える、こういうモデルですね。自分がどの観点か当てはまるかを選んでみてください。「地域の人々の役に立とうとしている」住民としてですね。「地域のボランティア活動に参加している」「地域のよいところについて人々と会話している」「地域の人々に親しみを感じている」「地域には明るい未来がある」「地域の人々は対立を乗り越えている」「地域の人々の名前を覚えるようにしている」「日中に地域を1人で歩くのは安全」「地域の中で自分の意見を安心して述べるができる」「地域の人々が必要とすれば、支援を提供している」「災害が発生したとしても、すぐに回復できる」ですね。こういった意識や行動、態度を持っている人が多い地域って、やっぱり多くの方々が幸せを実感しながら生活できているのかなと思います。逆を考えてみてください。

逆を考えてみたら、もう殺伐コミュニティしかないですよ。皆さん方が、住民がより良く生きるための観点です。この左側にあるものがウェルビーイングの構成要素になります。今のこのコミュニティ・ウェルビーイングとかいうフレーズで、世界的にまたこういった研究が蓄積されてきております。子供もそうだし、保護者もそうだし、先生も、地域住民も、こういった観点から動けるようになると、その地域の幸せの総量が、循環して、たまって、トータルの量がプラスになるかなということですね。

## 8. ウェルビーイングの循環を促進する リーダーシップ実践例

**8 ウェルビーイングの循環を促進するリーダーシップ実践例**

- 感謝の気持ちを表す（ありがとう言った私が幸せに）
- 楽観的になる（計画は悲観的に、行動は楽観的に）
- 他者と比較しない（隣の芝生の青さを喜ぶ）
- 親切に接する（親切に接した私が幸せに）
- 人間関係を育てる（対話の時間、スキミング）
- ストレスの抵抗力を持つ（ストレスは人生において必要不可欠）
- 人を許す（憎悪の感情を取り除き、寛大と慈愛の感情を取り込む）
- 熱中できる活動を増やす（夫職としての職業観、集中・没頭（フロー）経験）
- 喜びを深く味わう（楽しかった思い出話）
- 目標達成に全力を尽くす（幸福は目標を追い求めることから生まれる。達成から生まれるものではない。）
- 運動する（仲間との協働スポーツが望ましい）
- 笑う、笑顔で過ごす（幸せだから笑うのではなく、笑っているから幸せ）

※子供・保護者・教職員・地域住民のウェルビーイングの増進としての  
コミュニティ・ウェルビーイングの循環 -幸せだから笑うのではなく、笑っているから幸せ-

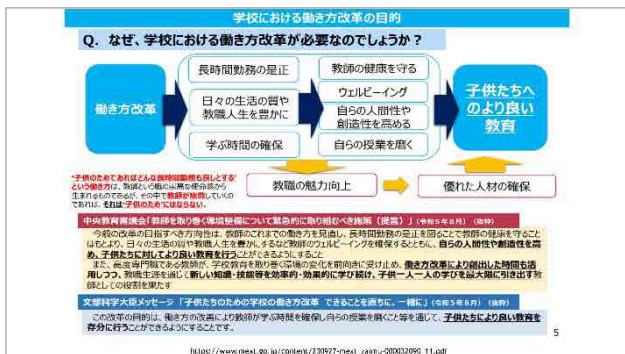
©ソニー・エドモント、著者アヌー(2013)、「幸せの科学」(2014年刊) 日本文学社刊、194頁に引用

そして、この循環をリードするキーパーソンの動きです。どうですか。皆さん方は、地域の中でウェ

ルビーイングを循環させるキーパーソンになれていますか。こういった条件、12あるんですけど、当てはまるかどうかちょっと見てみてください。

当てはまっていたら「おっ、私は循環させているな」と思ってください。当てはまっていなかったら「私、止めているな」と思ってください。上から、「感謝の気持ちを表す」、これは「ありがとう」だけはいけませんよ。いろいろな引き出しが要るわけですね。場面、状況に応じて、感謝の言葉がいろいろ言えるということですね。「楽観的になる」、計画悲観的に、アクションは楽観的にうまく行くさって、こんな希望を周りが持てるような動きをしているかです。「他人と比較しない」、人の成功を喜べる、妬まないということです。妬みの感情なんてこれはもう本人も周りもみんな不幸にしますから。妬みはダメですね。「親切に接する」、これは感謝と一緒に、親切に接した私が幸せなのです。小学校4年生の道徳の時間に習わなかったですか。バスでお年寄りに席を譲って、「あ、幸せなのは私なんだ」と気づくという話です。感謝の言葉も言われた方も幸せだけれど、「ありがとう」と言った私も幸せになれる、パワーワードですね。感謝、親切、相手も自分もです。そして「対話の時間」、おしゃべりをよくする人はやっぱり幸せですね。これは大事ですよ。「ストレスに抵抗力を持つ」、ストレスは大事です。ストレスのない人生なんて、こっちの方がつまらないわけですね。幸福の対義語は不幸じゃなくて退屈だとかいう、こんな哲学もあって、やはりストレスもやっぱり大事なんです。成長していく上では壁も大事なんです。「人を許す」行動習慣がありますか。寛大、慈愛ですね。だいぶキリスト教的な世界観がずっと並ぶんですけど、それはそうです。やっぱり欧米から来ていますのでね。ウェルビーイングの立論はキリスト教圏からこのきていますのでね。ちょっとこの辺りでもう少しこれをやはり和風にしていかないといけないと思います。それだけの力は私にはないんで、これは誰かがやっていかなければならない作業だと思います。「熱中できる活動」、没頭経験ですね。先ほど、子供のエンゲイジメントの話をしましたけれど、やっぱり何かに集中できている人、没頭することがある人は幸せですね。天職としての職業観を持っている人は幸せなんです。教員研修でよく「先生方、生まれ変わっ

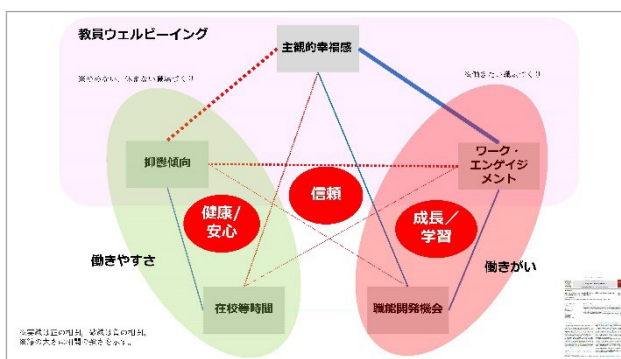




この9月に文部科学省も、働き方改革の目的の再編をしているんです。これはちょっと皆さん気をつけて見てくださいね。文部科学省からは働き方改革と言って、時短、時短、早く帰りましょうって言ってきたかも分からないですけど、少し違うんですよ。時短というのはいくつかある目的の一つで、左上ですね、「長時間勤務の是正」です。

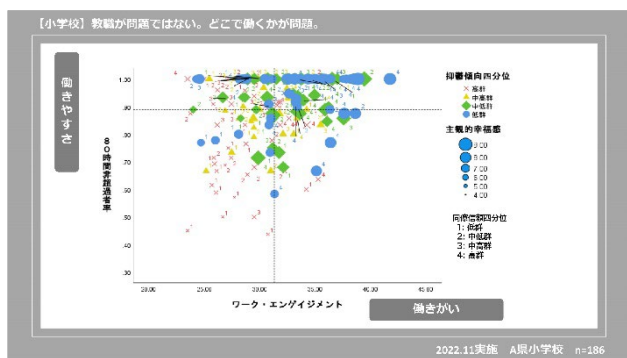
「日々の生活の質や教職人生を豊かに」とも言われています。これもやりがい、働きがいですね。もう東京都なんて、やりがいというのを前面に出してきていますからね。そして、「学ぶ時間」、これがまた大事です。高度専門職としての働き方改革なんです。一般労働者の働き方改革だったら、こんなのは出てきません。高度専門職はこの研究、研修、学びがベースなんです。それなくして教職は務まらないわけですからね。この時間をどう確保するかということですね。あと「健康」ですね。そして「ウェルビーイング」という言葉がそのまま入ってきました。平成30年にも定義みたいなものがあるんですけど、そこにはウェルビーイングという言葉は一切なかった。どう見ても、健康的に調子悪いから時短しましょう、そんな話だったんですけども、今はもうウェルビーイングとか働きがいとか、こういう言葉がどんどん入ってきています。授業を磨くとか、これも目的として入ってきております。働き方改革に逆行することって、働きがいをなくすようなものも含まれるんですよ。働き方改革の中に働きがいが入っていますからね。ウェルビーイングについても、私にとって仕事を頑張ることがウェルビーイングだという人もいますでしょうから、これ難しいんですよ。結構一律にいくのが難しい。高度専門職ですから作り込んでいくというステージに入っていくはずなんです。上に言われて「ははあ」ではなくて、働き方を自分たちで作り込んでいくんですね。キャリアによっても全然違うでしょう。

例えば結婚して、育児して、あと介護でとか、病気で調子が悪い時って、それは早く帰らせてもらわないと話にならないわけですね。しかし、一息つきました、研修もしました。もう一回子供たちのために、そんな年齢というか、キャリアの方もいるでしょう。一人一人置かれている環境が相当違うわけですからね。一律とか、皆一斉ではなくて、皆さん方にとって最善、もう個別最適ですね、教師のウェルビーイングもそこに向けて進んでいけたらよいと思います。今のストーリーは、厚生労働省の働き方改革の話です。従業員の主体性とか、これを尊重して選択できるようにという話を前に出します。



次です。左側は働きやすさ系統で在校等時間は短めに、そして抑鬱傾向を防いで幸せにですね。この働きやすさ系統というのは、辞めない、休まない職場づくりですね。キーワードは健康・安心とか、やってきましたね。結構左側が言われてきたんだけど、右側が大事です。右側は職能開発、学び、成長です。そして、ワーク・エンゲイジメント、しっかり学んで、働きがいを実感して幸せということですね。この働きがい系統も有用です。キーワードは成長とか学習ですよ。だから、もう働き方改革で学ぶ時間を削れというのはないんです。高度専門職としての働き方改革を進めていく上で、ど真ん中、信頼、これが分かりやすいと思います。ちょっと調子悪い先生の特徴は、子供と信頼関係ができていない、親と信頼関係ができていない、同僚と信頼関係ができていない、上司と信頼関係ができていない、以上です。ほぼほぼ信頼で説明できます。さっきの子供のウェルビーイングと一緒になんです。先生の場合も子供、保護者、同僚、上司、周りとの信頼関係で、調子の良い悪い、ウェルビーイングの上下というのがそのまま説明できます。俺は地獄だ、ブラックだみたいに書き込まれる方々の大半が、子供と信頼関係がまず上

手くいていない、保護者、同僚、上司のケースが多いんです。信頼関係のどこか、あるいは複数にヒビが入っているケースが多いんです。これらがうまく円滑に行っていたら、私はブラックだって書くことはまずないです。信頼関係の問題というのがわかってきています。英文の論文で、日本の教員の働き方ということでいろいろ世界に発信していつているんです。ちゃんとエビデンス付きです。

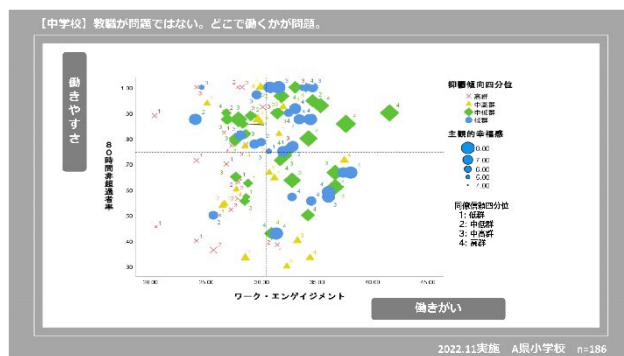


そして門外不出のデータです。こんなの学生が見ることはほとんどないです。ある自治体の小学校1校1校のデータです。横がワーク・エンゲイジメントといって、学校単位の働きがいの点数、縦が80時間非超過者率だから、上の方は80時間を超えるような先生はおりませんという学校で、下の方は長時間労働が蔓延している、ちょっと大変な学校です。見てください。80時間超えの先生がほとんどいない小学校が上に半分近くガサッといますよね。もちろん長時間の学校もありますけれどね。それで、マーカーの種類についてです。先生方の抑鬱傾向が高い学校が「×」で表現されています。青丸は抑鬱が低い学校で、4段階で25%区分です。チャートの大きさは、学校単位の幸せの点数です。これだけ学校間差があるわけです。

学校間の幸福格差、幸せ格差、ウェルビーイング格差です。同僚との信頼の程度も数字で入れています。気付くことがありますね。右上を見てください。働きやすくて、働きがいのある学校というのはもう大体青丸が多い、抑鬱が低いわけですね。そして、青丸のチャートが大きいです。幸せを実感できています。同僚の信頼関係がまあ3とか4とかですね。同僚との信頼関係がばっちりです。

左下を見てください。「×」が多いですね。長時間労働で、働きがいがあんまりないです。抑鬱度は高くて、幸せの実感があまりできていなくて、

1が多いバラバラな学校です。皆さん方も気をつけてください。バラバラな学校は先生たちが辛くなります。支えてくれる仲間、先生たちと楽しく一緒に仕事ができるというのは、だから非常に重要なわけです。管理職の研修だったら、校長先生、教頭先生に、これだけ学校間の格差あるということは何ですか、マネジメントの差ですよ、これだけ開いてくるんですから、結局は学校でのマネジメントというのは非常に大きいのですという話になります。教職の問題でしょうか。どこで働くかという問題ですよ。どこで働くかが大事ということです。第1象限の学校で働いていたら、ブラックだと言うことはまずありません。左下で働くと、ああ辛い、大変だということになります。多分どこの自治体で調査しても同じようなスコアになってくると思います。



中学校版ですね。中学校版はちょっと第4象限に、「先生たち、頑張ろうスクール」がパラパラと出てきていますが、長時間労働なんですけれど、部活動も頑張るんで幸せという学校がズラズラと出てきております。ここをどう働きがいを維持したまま上に上げていくかということで、今悩んでいるところなんです。

以上でございます。私のこれまでの主張というのは適当に言うのではなくて、いろいろなこれまでの研究に基づいて話をさせていただいているところになります。ちょっと長くなりました。質問がありましたらお願いします。ご清聴ありがとうございました。

## 一 質疑応答

【橋本】外国語学部日本語学科2年の橋本 義晴と申します。大変貴重な時間になったと思います。1点だけ質問させてください。教員のウェルビーイングというところで、働きやすさと働きがいというところの両立が大事だ、というお話だったと思うのですが、この両立の中で難しくなる点というのをちょっとお聞かせください。



【露口】ご質問ありがとうございます。やっぱり一番は、私の著書の中でも書いたんですけど、業務改善なき時短というのが一番の悪い手で、しんどくなります。両立できていない学校の多くは、まず業務改善をやっていません。旧態依然、ペーパーレスが進んでいなかったりとか、仕事の配分とか、整理統廃合というのもやっていないという、そういう業務改善ができていない状況下というのが一つです。ぜひ業務改善が進んでいる学校へ行けたらいいですね。

もう一つが先ほどやっぱり出てきました、信頼関係です。同僚同士の、先生同士の人間関係、信頼関係があると働きやすくて働きがいが出てきますけれど、バラバラな学校という、これは難しいんですよ。講演の中でも言いましたけれど、バラバラな学校って信頼が持つ効率化の力がないのです。

対立が起きるし、根回しをいろいろしないといけないとか、合意形成に時間がかかるんです。そういう学校も業務改善とか、信頼という視点で見てもらえたらと思います。これらが揃っていないと、やっぱり働きがい、働きやすさ、調子が悪くなります。そんな目で学校を見てみてください。以上です。ありがとうございました。

## 6. 学生発表（大学生による日本語指導支援）

### 日本語指導支援（東京都立飛鳥高等学校）

参加学生	全日制課程	応用言語学研究科博士後期課程 2年 高柳 奈月 博士前期課程 1年 浦野 遥風、田中 愛唯
	定時制課程	外国語学部日本語学科 4年 李 昊洋、茨田 真愛、チン ヴァン コン

#### 1. はじめに

本報告は東京都立飛鳥高等学校で日本語指導が必要な外国人生徒に対して、外国語学部日本語学科および応用言語学研究科の学生が日本語指導支援を行ったものである。

#### 2. 実施概要

##### (1) 飛鳥高等学校全日制課程（1クラス）

###### ① 年間実施日（月曜日）

5月	8日	12月	11日、18日
7月	10日	1月	22日
9月	4日、11日、 25日	2月	5日、19日
10月	2日、30日	3月	11日、28日
11月	6日、20日		

###### ② 参加者

生徒 3人、学生 2人

###### ③ 内容

上級クラス、受講した生徒はみな、大学進学志望者。「話す・書くにつながる日本語読解 中上級」を使用し、主に読解の授業をした。生徒自身で問題を解き、その後、全体で確認をするという流れで進めた。読解の他にも、自分の意見を論理的に話せる、書ける練習も取り入れ、大学でも通用するような日本語指導を意識している。

##### (2) 飛鳥高等学校定時制課程（1クラス）

###### ① 年間実施日

4月	18日、25日	11月	7日、14日、 21日、28日
5月	9日、16日、 23日、30日	12月	12日、19日
6月	27日	1月	16日、23日、 30日
7月	4日	2月	6日、13日、 20日、27日
10月	10日、17日、 24日、31日		

###### ② 参加者

生徒 7人、学生 3人

###### ③ 内容

教材はN3クラスで「みんなの日本語中級」を、N4クラスで「みんなの日本語Ⅱ」を使用している。授業では、例文を使用した会話練習を行うこと、非漢字圏の学習者もいることから、時間をとって漢字を書く練習を行うことを重要視し、毎回の支援が学習者にとって意味のある時間になるように注意している。

#### 3. 学校の感想

全日制課程 副校長 竹原 義和 先生

全日制課程では毎年、「在京外国人生徒募集枠」で20人の外国籍生徒を受け入れています。このほかにも、毎年、外国につながりをもつ多くの生徒が入学してきています。

本校では放課後に習熟度別に日本語講座を開設しています。これらの講座ではICT機器を活用したり、生徒によるプレゼンテーションを行ったりして、日本語を学習しています。また、日本での生活習慣や校則等を知る良い機会にもなっています。今後とも、御支援の程、どうぞよろしくお願いいたします。

全日制課程 主任教諭 會田 哲也 先生

全日制課程では日本語講座を習熟度別に4種類実施しており、明海大学の講座では最も習熟度の高い3人が学んでいます。今年度は90分の授業を18回実施していただきました。

授業の雰囲気は和やかで、生徒たちは楽しみに学んでおります。難易度が高めの読解を通して、語彙や文法を習得し、文脈を正確に理解するスキルを伸ばしていただきました。このスキルは様々な分野で応用が可能であり、生徒たちの進路を切り開く力となってくれることと思います。



## 日本語指導支援（東京都立南葛飾高等学校）

参加学生	応用言語学研究科博士後期課程 3年	林 苗
	博士前期課程 1年	田中 愛唯
	外国語学部日本語学科 4年	茨田 真愛、高橋 紅葉、ヴ バオ ゴック、 姜 龍健、チン ヴァン コン
	3年	竹澤 佳祐

### 1. はじめに

東京都立南葛飾高等学校で外国にルーツを持つ日本語指導が必要な生徒に対して、外国語学部日本語学科及び応用言語学研究科の学生が日本語支援を行った。

今年度は対面での日本語指導支援を実施することとなった。

### 2. 実施概要

#### (1) 年間実施日（月曜日、木曜日 計 42 日間）

4月	17日、20日、 24日、27日	10月	2日、19日、 23日、26日、 30日
5月	1日、8日、 11日、29日	11月	6日、13日、 16日、20日
6月	8日、12日、 15日、19日、 22日	12月	7日、11日
7月	10日	1月	11日、15日、 18日、22日、 29日
8月	21日、22日、 23日（夏期講習）	2月	1日、5日、 8日、15日、 19日
9月	7日、11日、 25日、28日		

#### (2) 参加者

2クラス 生徒約 16人

参加学生 上記表題に記載の 8人

#### (3) 内容

前期では文法指導を中心とし、後期からは読解指導を中心として授業を行った。目標である JLPT の合格だけでなく、教室内の環境づくりも重視した。

### 3. 学校の感想

校長 伊達崎 広 先生

本校は、入国して3年以内の生徒を対象とした在京外国人生徒対象入試を実施しています。在京生が、日本の高等学校で学習するためには、一定以上の日本語能力が必要不可欠です。そのため、明海大学との連携による日本語指導には大変に感謝しています。今後も在京生の学びが充実し、よりよい学校生活を送ることができるよう、高大連携を大切にしながら、日本語指導等の学習支援を行ってまいります。

教務部 多胡 久子 先生

本校の第1学年の在京外国人生徒を対象に、週2回、生徒の日本語レベルに応じた日本語指導をしていただいております。生徒にとって親しみやすく、そして、わかりやすく教えていただけることで、日本語を楽しく意欲的に学びました。そのため、多くの生徒が日本語能力試験に挑戦し、希望進路の実現につなげています。

### 4. 参加生徒の感想

1年 サプコタ アークリティィ さん

日本語をじょうずに話すことができました。友だちといっしょにべんきょうして楽しかったです。

前は、日本語もできない、友だちもできないと思ってすごくかなしかったけれど、今は友だちもできて、日本語もじょうずになってとてもうれしいです。先生のおかげでここまでできたので、先生にありがとうございます。これからも日本語をがんばりたいと思います。

1年 江見 雅美 さん

毎週月曜日と木曜日に日本語の授業を受けました。毎週、日本語を教えてくれる先生が違いますが、各先生とも知識をたくさん含む文章と面白いゲームなどを準備し、私たちといっしょに授業を楽しく進めてくれました。授業中から日本語の単



語と文法と日本の文化などをたくさん教えていただき、読解力もどんどん上がっています。

## 5. 見えて来た今後の課題

学習者が授業に集中できるように、質問のバリエーションを増やしたり、様々な活動を授業に取り入れたりするなどが必要である。教師は一方的に説明するのではなく、学習者間で語彙や文法について日本語で学び合うことで理解につながる。

## 6. 実施してみたの感想

日本語を教えることは簡単ではないが、授業を行い、学習者と接することで、学ぶことや気づきが多くある。指導支援を受ける学習者も、指導支援を行う学生も共に成長していると思う。日本語を学んできた経験を活かし、学習者の気持ちに寄り添った授業を行っていききたい。

(日本語学科4年 ヴ バオ ゴック)

## 7. 2月4日の発表

2月4日に開催したシンポジウムでは、外国語学部日本語学科4年 ヴ バオ ゴックが登壇し、実施報告を行った。ここでは報告内容の抜粋を記す。

語彙リストはN3・N4クラスを担当している学生が作成し、配布したものである。1つの語彙に対して、ふりがなと例文はもちろん、中国語訳と英語訳を記載するようにし、意味が分かりやすくなるよう意識している。

語彙リスト			
技術力 <small>ぎじゅつりき</small>		例文： 私たちはお互いに <b>技術力</b> を向上させる。	中国語：技术力 英語：technology
まじめ		例文： 私が <b>真面目</b> に言っても、彼は信じない。	中国語：认真 英語：true colors
輸出 対：輸入 <small>でしゅつ じゆにゅう</small>		例文： 海外にコンピューターを <b>輸出</b> する。	中国語：海外輸出 英語：export
利益 <small>りえき</small>		例文： 今年、景気が悪くて <b>利益</b> がない。	中国語：利益 英語：Benefit
資源 <small>しげん</small>		例文： 木材は <b>資源</b> の再生利用を進めます。	中国語：资源 英語：resource
マイナス 対：プラス		例文： 間違いがあって、点数が、 <b>2点マイナス</b> された。	中国語：负、消极 英語：minus
必ずしも～ない	意味： いつでも～でもない。 全部が～ではない。	例文： 安いものを買うことが <b>必ずしも悪いとは言えない</b> 。	中国語：未必、不一定 英語：not necessarily
育つ(自) 育てる(他)		例文： 私は花が <b>育</b> っている。	中国語：培养、培育 英語：growing up

## 7. 学生発表（留学生等による児童・生徒との交流）

### 明海大学あけみ英語村 2023—小学生異文化交流プロジェクト—

第1回	日時	2023年10月24日（火）12時～16時
	参加者	足立区立島根小学校 4年生 86人、本学留学生・教職課程履修生 70人、教職課程センター及び多言語コミュニケーションセンター、足立区教育委員会
第2回	日時	2023年11月6日（月） 12時～16時
	参加者	足立区立花畑第一小学校 6年生 62人、本学留学生・教職課程履修生 70人、教職課程センター及び多言語コミュニケーションセンター、足立区教育委員会

### 1. はじめに

世界のさまざまな国・地域から来ている本学の留学生及び教職課程履修生と足立区の小学生とが英語を使って異文化交流する「明海大学あけみ英語村」は、今年度で7年目の取組みとなった。

コロナ禍の影響もなくなり、対面形式で開催した。参加した小学生も本学の学生も、手指消毒などの感染症対策を徹底させて実施した。

今年度も2回実施することができた。

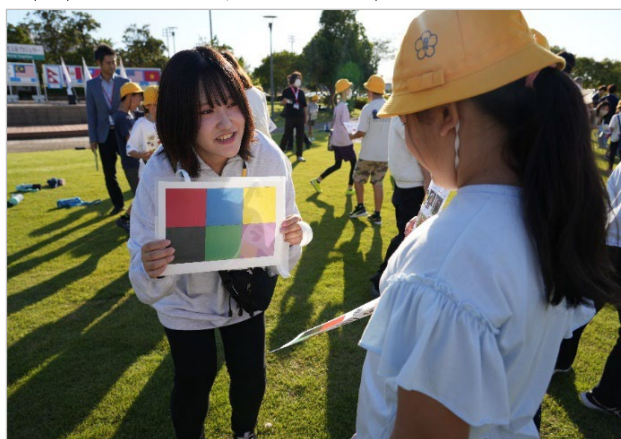


### 2. プログラム

- (1) 開村式（15分）
  - (ア) 中畷学長あいさつ
  - (イ) 小学生代表あいさつ 等
- (2) グループミーティングと各グループでのイングリッシュ・キャンパス・ツアー（50分）
- (3) パトリツィア教授とタイソン准教授によるコミュニケーション・アクティビティ（30分）
- (4) 閉村式（15分）
  - (ア) 高野副学長あいさつ
  - (イ) 小学校校長あいさつ
  - (ウ) 小学生代表あいさつ 等

### 3. 主なアクティビティの特徴

#### (1) イングリッシュ・キャンパス・ツアー



グループミーティングで全員が自己紹介をしたり、留学生による母国紹介を聞いたりしてお互いに打ち解けあった後、小学生は5、6人、留学生や教職課程履修生は3、4人が1つのグループとなり、キャンパス・ツアーをおこなった。ツアー中は全て英語でおこなわれ、学生や留学生は英語で図書館のラーニング・コモンズやイングリッシュ・ゾーン、学食、テニスコートなどを説明し、小学生とコミュニケーションを楽しんだ。

#### (2) コミュニケーション・アクティビティ

アメリカ出身のパトリツィア先生とカナダ出身のタイソン先生が英語で自己紹介をした後に、小学校6年生に対しては夏休みの思い出の英会話の見本を見せた。小学生たちはそれに倣って大きな声で自分が夏休みに食べた物や経験したことなどを答えた。

そして、ペアやグループに分かれて、留学生や教職課程の大学生と夏休みの経験について英語でやり取りをおこなった。うまく回答できると大学生からシールをもらい、多くの小学生は英語のコミュニケーションを楽しみながら、いっぱいシールを集めることができた。

#### 4. シンポジウムでの学生発表の概要

本シンポジウムでの発表者は英米語学科4年上原 二葉と吉田 未来であった。

以下に、2人の当日の発表内容の概要を記した。

##### <経験できたこと（一部抜粋）>

吉田：「私たちはあけみ英語村を通して、いろいろ経験することができました。その中から4つお話ししたいと思います。」

まず1つ目に、簡単な英語を使ったやりとりです。All English でやり取りをするために、好きな食べ物や得意なことなど児童が話しやすい話題を、学年に合わせた語彙や文法を意識しながら質問をしたり、キャンパスツアーでは学食では好きな給食のメニューや、イングリッシュゾーンでは英語で言える国の名前など、各所をまわる時に学校生活と関連させながら行うことができました。

2つ目に、児童ができたことに対するポジティブなフィードバックです。コミュニケーション活動で使われるターゲットセンテンスをいうことができたときに“good job!”と言ったり、相手の言ったことにリアクションが取れたときに“good reaction!”と言ったりして、笑顔で励ましながら多くの児童と交流することができました。」

上原：「私からは2点お話しします。1点目は、目線を合わせて対話することの大切さです。例えば、小学生と大学生の体格の差が大きいので、威圧感を与えないようにしゃがんで児童と同じ目線にしたり、物の大きさや動詞のジェスチャー、声のトーンや話すスピードに注意しながら、小学生の発達段階に応じて対話することができました。」

2点目は、異文化についてわかりやすく伝えることです。留学生の母国紹介の時に、色や食べ物の既習事項を上手く活用しながら、簡単な英語や児童にとって理解が難しい時には、効果的な日本語を取り入れました。また、ただ母国紹介を聞くだけでなく、留学生や教職履修生とのやりとりをしながら異文化の理解を促すことができました。児童の興味を引くために、写真を使用したり、クイズ形式で行ったりして分かりやすく伝えることを意識しました。」



##### <あけみ英語村の意義>

吉田：「教職課程履修生があけみ英語村を体験する意義は、3つあると考えます。」

1つ目は、実際に小学生と英語を使って交流をすることができる点です。実際に児童がどれだけ英語を話すことができるのか、どこが児童にとってつまづきやすいのかなどの実態を知ることができました。4月から東京都中高の教員へ採用が決まっているので、小学生の英語の学びの実態を垣間見ることができ、特に小中の接続を考えるときのための貴重な学びができました。」

上原：「2つ目は、英語に慣れ親しむことのできるアクティビティの知識を増やすことができる点です。大学の授業で学ぶだけでなく、それらのアクティビティを行っている児童の姿を実際に見て、教員になった時に活用できる單元ごとに効果的なアクティビティを知ることができました。また、コミュニケーション活動を円滑に進めるために、事前に ALT と日本人教師それぞれの役割を明確にして、児童がスムーズに活動できるようにすることが必須だと実感しました。」

3つ目は、児童と触れ合うことで、教職の良さを感じられる点です。実際、児童と触れ合う機会というのは少ないため、教育実習を除いて貴重な機会だと思います。4月から私は千葉県の小学校の教員になるので、児童と触れ合うことができ、小学校の教員の魅力をより強く感じることができました。」

## 足立区中学校異文化交流学習会

今年度参加校	足立区立扇中学校	実施日	2023年	6月	23日
	足立区立第十四中学校	実施日	2023年	7月	7日
	足立区立千寿桜堤中学校	実施日	2023年	11月	22日
	足立区立谷中中学校	実施日	2023年	12月	13日
	足立区立第十中学校	実施日	2024年	1月	30日

### はじめに

足立区と連携協定を締結した2016年度より、足立区教育委員会と連携して小中学校に対して本学の研究・教育資源を生かした英語教育支援をおこなってきた。

その一環として、世界のさまざまな国・地域から来ている本学留学生が足立区の小中学生と英語を使った異文化交流学習会をおこなってきた。今年度は、異文化交流学習会を5校の足立区立中学校と開催することができた。

5校全てと対面形式で開催した。以下に、足立区立扇中学校でおこなった交流学習会について簡潔に記した。

### 1. 足立区立扇中学校との異文化交流学習会

- ① 参加者：本学留学生 11人と中学2年生 75人と  
中学1年生 67人



- ② 参加留学生の出身国：韓国、中国、ドイツ、ネパール、ベトナム、ペルー、香港、マレーシアの計8か国・地域出身

- ③ 概要：留学生 11人は、2時間目と3時間目に8年生の授業に、4時間目に7年生の授業に参加した。

留学生は中学生の5人一組のグループに一人ずつ加わり、持参してきた写真を使って自分と

自国の紹介（例：ネパールのお寺やヒマラヤ山脈、ペルーのマチュピチュ遺跡や動物）をした。中学生も将来行ってみたい国（例：フランスや韓国）を各自のPCを使いながら紹介した。留学生も中学生も質問し合ったりしてお互いの発表を楽しんだ。

### 2. 足立区立第十中学校との異文化交流学習会



- ① 本学留学生 12人と中学3年生 246人

- ② 参加留学生の出身国：韓国、中国、ドイツ、ドミニカ共和国、ネパール、ベトナム、ペルー、香港、マレーシアの計9か国・地域

- ③ 概要：3時間目に体育館に集合した中学3年生全員に対して、留学生は、一人ひとり3分程度自己紹介と母国の紹介をした。

4時間目からは、留学生は3年生の英語の授業に参加した。グループになった中学生に対して、留学生は持参してきた写真を使って自分と自国の紹介（例：マレーシアの辛い食べ物やドイツのノイシュバンシュタイン城）をした。中学生は留学生の紹介を一生懸命に聞いて質問をした。

さまざまな国から来た留学生と中学生が英語を通してコミュニケーションを楽しむことができた。

### 3. 足立区立千寿桜堤中学校との

#### 異文化交流学習会



① 参加者：本学留学生 7 人が足立区立千寿桜堤中学校で 2 年生 169 人

② 参加留学生の出身国：中国、ドイツ、フィリピン、ベトナムの計 4 か国からの出身

③ 概要：2 時間目に 2 年 3 組と 5 組に留学生は 4 人と 3 人に分かれて英語の授業に参加した。

一人ひとり 3 分程度で各自用意しておいた写真を使って英語で自己紹介と母国の紹介をした。そのあと、中学生から「なぜ日本に来たのですか」や「日本の良いところは何ですか」などの質問を受けた。

その後、中学生が各自で用意しておいた興味のあること（例：趣味や将来の夢）についてタブレットを使いながら発表した。

### 4. 足立区立谷中中学校との異文化交流学習会



① 参加者：本学留学生 9 人が足立区立谷中中学校で 2 年生 148 人

② 参加留学生の出身国：韓国、中国、ドミニカ共和国、フィリピン、ベトナム、香港、マレーシアの計 7 か国・地域

③ 概要：3 時間目に体育館に集合した中学 2 年生全員に対して、留学生は、一人ひとり 2 分程度で自己紹介をした。

その後、全 4 クラスに分かれて入り、グループになった中学生に対して、留学生は持参してきた写真を使って自分と自国の紹介（例：中国の万里の長城やドミニカの盛んなスポーツ）をした。

中学生は留学生の紹介に夢中になり、たくさんの質問をした。さまざまな国から来た留学生と中学生が英語を通してコミュニケーションを楽しむことができた。

### 5. 足立区立第十学校との異文化交流学習会



① 参加者：本学留学生 11 人と 2 年生 160 人

② 参加留学生の出身国：韓国、中国、ドイツ、ドミニカ共和国、ネパール、フィリピン、ベトナム、香港の計 8 か国・地域

③ 概要：2 時間目から 5 時間目までの 2 年生の英語の授業に参加した。

最初に、2、3 人の留学生が 5 分程度で自分と自国の紹介（例：中国のカンフースターやベトナムの学校制服）をした。

その後、中学生の代表が 10 人程度留学生に紹介したい日本文化を発表した。

そして、クラス全体を 7 グループに分け、各グループに留学生 1 人または 2 人が加わり、留学生は持参してきた写真を使って自己紹介をして、中学生はいろいろな質問をした。

質問は尽きることなく、最後まで活発に英語のコミュニケーションを楽しんだ。

## 大学生と話そう会 2023、田柄高等学校訪問交流会

### 大学生と話そう会 2023

参加学生	<b>■ 第1回</b> ・参加学生 外国語学部日本語学科 3年 竹内 楓 2年 橋本 義晴 外国語学部英米語学科 3年 池内 夏美、大野 杏里、久保田 波南、小林 聖菜、 佐藤 百恵、高木 由紀、田中 星来、富樫 美智雄、 長木 愛美、布施 名菜、安田 結貴、吉田 優奈 2年 山本 陽輝 ・参加留学生 応用言語学研究科博士後期課程 3年 林 苗 1年 沈 伽迪 外国語学部日本語学科 4年 ファム ティ トウイ ティエン、姜 チョウ健 3年 董 剛、劉 叡朗 2年 馬 瑞霞 1年 陳 子妍、ワイ ラク テイ ミラクル 経済学研究科修士課程 1年 周 俊輝 経済学部経済学科 4年 グェン ティ アン、グェン ティ ヴァン アイン、黄 新興、 ホアン ヴァン ドゥク 1年 劉 優義
	<b>■ 第2回</b> ・参加学生 外国語学部日本語学科 4年 清宮 咲歩

### 田柄高等学校訪問交流会

参加学生	<b>■ 参加留学生</b> 外国語学部日本語学科 3年 董 剛、2年 石橋 聡史、付 乙豪 外国語学部英米語学科 4年 伊藤 千鶴、グェン ティ トウイ ズオン ホスピタリティ・ツーリズム学部 ホスピタリティ・ツーリズム学科 3年 コボリ エミ ホイメイ
------	--

## 1. 大学生と話そう会 2023

### (1) 第1回の概要

5月28日に、2023年度第1回「大学生と話そう会」が開催された。このイベントは、明海大学と連携高校との関係をより強固にするとともに、高校生が直接大学生と交流することで明海大学での勉強や学生生活について理解を深めることを目的として、地域学校教育センターの主催で、2018年度から実施しているものである。

今回は、都立飛鳥高校、都立南葛飾高校、都立葛西南高校、県立浦安高校の4校から、42人の高校生が参加し、そのうち22人は様々な国や地域の背景をもつ外国人生徒の参加者だった。また、8人

の引率教員の参加もあった。

高校生たちは、午前中に大学紹介やオープンキャンパスの学科魅力発見コーナーなどを見学した後、学生食堂マリーンズで学食を体験し、午後30周年記念館学生ホールでの交流会に参加した。

山本 聖志 地域学校教育副センター長と参加した連携校代表の飛鳥高校 堀江 敏彦校長先生からの挨拶の後、ボランティアスタッフとして参加した教職課程を履修している本学日本人学生15人及び外国人留学生15人は、高校生42人と一緒に15個のテーブルにグループを作って座り、交流会がスタートした。

高校生からは、大学生活などについて熱心に質問

が出され、大学生はそれぞれの知識や経験から高校生にアドバイスしたり話をしたりしていた。また、ディスカッションでは、昨年度と同様に、SDGsの目標として取り上げられている海洋資源、貧困、教育などの問題の現状、その原因や解決策について議論を深めた。参加した高校生からは、「今回の体験で、大学に進学したいという思いが一層強くなりました」「自分が将来学んでみたいことが広がってきました」などの感想が聞かれた。

石鍋 浩 教職課程副センター長からの閉会の挨拶の後、最後に全員で記念写真を撮って、会は終了した。短い時間であったが、高校生と大学生が対話を通して、楽しいひとときを過ごすことができた。

準備から誘導案内、そして交流会での進行役など、明海大学の学生たちも、高校生のためにボランティアとして一日頑張った。

## (2) 第2回の概要

8月20日、オープンキャンパス当日、都立葛西南高等学校と千葉県立浦安高等学校から3人の高校生が教職課程センター(METTS)を訪問した。

オープニングガイダンスやキャンパスツアーの合間に、日本語学科4年 清宮 咲歩が3人の高校生とMETTSで歓談した。「受験勉強はどんなことをしましたか?」「大学の授業は難しいですか?」「明海大学のよさはどんなところですか?」といった質問にこやかに答えていた。参加生徒の中には、今年2年目となる「SDGs入試プログラム」にとっても興味があるとのことで、質問もかなり具体的だった。帰り際、「来年4月に明海大学でお待ちしています」の清宮のエールに、高校生たちも笑顔で応えていた。



## 2. 田柄高校訪問交流会

### (1) 実施概要

7月12日、本学と高大連携協定を結んでいる東京都立田柄高等学校において「留学生との交流会」が行われた。これは、本学外国人留学生と高校生

との交流を通じてお互いの文化に触れ理解を深めることを目的としたものである。本学からは、中国、ベトナム、マレーシア出身の外国人留学生6人が参加した。留学生は田柄高等学校の1年生5クラスに分かれ、それぞれ自国文化について写真やスライド資料を投影しながら紹介を行った。

次に、留学生全員と国際交流委員を務める生徒たちが視聴覚教室に集まった。山崎 聡子 校長先生から歓迎のごあいさつをいただいた後、留学生と生徒たちが懇談して交流を深めた。最後に、茶道部による抹茶のおもてなしをいただき、会は和やかに終了した。日本語学科4年で中国出身の伊藤千鶴は、「高校生の皆さんにとっても明るく出迎えていただきました。活発な交流ができて自身にとっても刺激になりました」と感想を語っていた。

### (2) 高校生の感想

都立田柄高校1年 菊池 琉太 さん

交流会では明海大学から様々な国の留学生の方にお越しいただきました。高校生になり、初の委員会活動で中学校にはなかった国際交流委員という田柄高校ならではの活動を選びました。自分がしっかり役割を果たすことができるのか最初はとても不安でした。しかし、来てくださった留学生の方々はとても優しく自分の話を聞いてくださいました。また、すごく楽しいプレゼンテーションをしてくださったので、自分だけでなくクラス全体で楽しむことができました。ありがとうございました。

### 3. 2月4日当日の発表

2月4日のシンポジウムでは、外国語学部日本語学科3年 竹内 楓と2年 橋本 義晴が登壇し、「大学生と話そう会2023」の報告を行った。また、外国語学部英米語学科4年 伊藤 千鶴が、「田柄高等学校訪問交流会」の活動の内容と活動を通して学んだことなどを発表した。



## 8. 学生発表（大学生による学習支援）

### 浦安市小学校英語支援

参加学生（8人）

外国語学部英米語学科4年 上原 二葉、川元 麻衣、児島 晴香、保足 晟吾、  
吉田 未来  
3年 池内 夏美、仲田 未羽、布施 名菜

【シンポジウムでの発表者】 川元 麻衣、池内 夏美

### 1. はじめに

明海大学は2017年に浦安市教育委員会と教育に関する連携協定を締結しており、それ以来、市内の公立小学校の英語・外国語活動に学生がボランティアとして参加し、授業の補助を行っている。将来、英語教員を志す学生にとって、在学中に学校現場での英語指導の実践に携わることができることも貴重な機会となっている。また、学生は大学での授業と合わせて、この機会を利用して、一定の時間数、小学校英語の指導の経験を積むことで小学校英語指導者資格を取得することもできる。

今年度は、明海小学校、高洲小学校、高洲北小学校の3校に外国語学部英米語学科の4年生5人と3年生3人が参加した。



遣を要請いただいた学校には、大学から改めて連絡をし、希望される支援の内容や時期、人数などを確認し、調整をした上で、学生を派遣した。

しかし、夏休み前は、派遣の中心となるべき4年生が教育実習や教員採用試験の対応のため、参加することができず、また3年生は授業の空きが少ないためになかなか希望者が出ず、結局9月からの派遣開始となった。

#### (1) 実施期間

2023年9月～2024年3月（予定を含む）

#### (2) 実施校と主な活動日時及び参加学生

明海小学校	金曜日 1～4時間目 児島 晴香 池内 夏美
高洲小学校	水曜日 1～4時間目 仲田 未羽 布施 名菜
	木曜日 1～4時間目 吉田 未来
	金曜日 1～4時間目 池内 夏美
高洲北小学校	水曜日 1～4時間目 上原 二葉 川元 麻衣 保足 晟吾

### 2. 実施の概要

参加する学生は、英米語学科の学生のうち教職課程を履修し、将来、何らかの形で英語指導に携わりたいと希望している学生である。

ここ数年は新型コロナウイルスの影響もあり、計画的な配置が難しい面もあったが、感染が収束していく中、2023年度については浦安市教育委員会との連携の下、4月末から5月にかけて市内の公立小学校に事業概要について周知をしていただいた。市教育委員会を通じてボランティア学生の派



### (3) 主な取組

授業では、学級担任や英語専科の教員、ALTの求めに応じて対話の相手役をしたり、発音のモデルをしたり、ペアワークで児童の相手をしたり、児童への指示を手伝ったり、英語のゲームに参加したり、個別の支援を必要とする児童への援助を行ったりした。また、教材準備の補助をしたり、必要に応じて配布物の整理などの校務の補助を行ったりした。

## 3. 参加した学生の声

(1) 小学校英語支援で、初めて小学生と触れ合い、初めて小学校英語に触れました。小学3年生から6年生までさまざまな学年と関わりましたが、どの学年も英語に対して積極的だったのが印象的です。

授業は、全てALTの先生がAll Englishで進めていました。意味を理解できない生徒たちでも、英語が楽しいという気持ちの方が強く出ていて、積極的に発言したり、会話をする時やゲームを行う時には私にも積極的に声をかけてくれたりと、とても貴重な体験ができました。

(川元 麻衣)

(2) 小学校英語支援ボランティアに参加して、今後に活かすことができる経験を積むことができましたと思います。中高英語の免許の取得を目指す私にとっては、小学生との時間はとても貴重なものでした。

主に教科指導、ALTの補助として授業に入らせてもらっています。その中で、先生方が考える、児童たちの興味を惹くようなアクティビティが毎回斬新で、私自身も楽しみながら勉強させてもらっています。今回のボランティアで得た経験を、今後にぜひ活かしていきたいと思っています。

(池内 夏美)

## 4. 派遣校からの声

(1) ALTとのコミュニケーションも英語できちんととることができ、とても感心している。

(2) 休み時間も子どもたちと積極的に接してくれて大変な人気者でした。

(3) 本当に助かっている。大学と小学校がウィンウィンの関係で連携できる素晴らしい事業である。是非継続していきたい。

(4) 若い学生が参加することで児童が親しみを感じ、英語の授業への取組も積極的になっている。

## 5. おわりに

毎年、小学校からは多くの派遣要請が寄せられているが、前述したような事情から年間を通じての派遣や週当たりの派遣日数の増加を実現するのは大変難しい状況にある。

まず、学生への声掛けをより一層積極的に行い、ボランティア体験の重要性を十分に理解させるなどして、参加学生を増やす必要がある。

また、要請をしていただきながら実際に派遣するに至らなかった小学校に対しても、どうせ要請しても実際にはなかなか学生が派遣されないのだから、要請してもしかたがないなどと思われぬように、夏休み前の派遣開始や大学から離れた学校への派遣が困難である事情について丁寧に説明をしていかなければならない。

派遣校からの声にもあるように大学と小学校がウィンウィンの関係で連携できる素晴らしい事業であることは間違いないので、今後とも積極的に一人でも多くの学生を派遣していけるように努めていきたい。



## 2023年度 浦安市青少年自立支援「未来塾」

参加学生 (8人)	外国語学部日本語学科 3年 吉野 青空 外国語学部英米語学科 4年 渡辺 渚稀 3年 池内 夏美、喜多 巧祐、坂内 隆斗、佐藤 百恵、 布施 名菜、渡辺 もも
	【シンポジウムでの発表者】 吉野 青空、布施 名菜

### 1. 浦安市青少年自立支援未来塾

浦安市青少年自立支援未来塾では、地域住民や教職経験者、大学生等に支援員として協力してもらい、浦安市立中学校9校の生徒を対象に、子どもたちの基礎的・基本的な学力向上や学習習慣の定着を図ることを目的として、数学や英語の補充学習の個別支援を行っている。各中学校近隣の6か所の公民館を会場として、6月から2月までの間に英語と数学の2科目について、それぞれ全17回の学習支援を行った。

### 2. 実施概要

2023年度の本学学生が参加した未来塾の概要は、次のとおりである。時間はいずれも18:30～20:00である。

#### 【英語教室】

##### (1) 堀江中未来塾

- ・会場：堀江公民館
- ・期間：2023年5月30日～2024年2月9日  
原則として火曜日
- ・参加学生：佐藤 百恵、渡辺 もも

##### (2) 見明川中・富岡中未来塾

- ・会場：富岡公民館
- ・期間：2023年5月29日～2024年2月7日  
原則として水曜日
- ・参加学生：渡辺 渚稀

##### (3) 入船中・美浜中未来塾

- ・会場：美浜公民館
- ・期間：2023年6月1日～2024年2月8日  
原則として木曜日
- ・参加学生：喜多 巧祐

##### (4) 高洲中未来塾

- ・会場：高洲公民館
- ・期間：2023年5月29日～2024年2月7日  
原則として水曜日
- ・参加学生：布施 名菜

#### 【数学教室】

##### (1) 堀江中未来塾

- ・会場：堀江公民館
- ・期間：2023年6月6日～2024年2月13日  
原則として火曜日
- ・参加学生：佐藤 百恵、坂内 隆斗

##### (2) 日の出中・明海中未来塾

- ・会場：日の出公民館
- ・期間：2023年6月8日～2024年2月15日  
原則として木曜日
- ・参加学生：吉野 青空

##### (3) 高洲中未来塾

- ・会場：高洲公民館
- ・期間：2023年6月7日～2024年2月14日  
原則として水曜日
- ・参加学生：吉野 青空、池内 夏美、  
布施 名菜



### 3. 学習支援の内容

子どもたちの課題や困り感に寄り添えるよう一斉指導ではなく個別支援を原則とし、生徒が学校で配布された教科書やテキスト等を準備し、分からないところを自主的に質問して、支援員はそれに答えるということを基本的に行っている。

生徒の実態によっては支援員からも積極的にアプローチをするといったことも行う。例えば3年

生に対しては入試対策の指導を行ったり、生徒の希望があれば勉強の仕方やノートの取り方、暗記の方法を自分の経験を活かしてアドバイスをしたりする。

生徒同士が教え合うことで学びが深められる場合もあるので、必要であればそうしたことができるような環境づくりをすることにも努めた。

また、学習前後の時間や休憩の時間では、学校生活の様子や日常的な生活の話をする中で生徒との関係を深めて質問しやすい相手となれるよう努め、ときには生徒の相談役にもなっている。



#### 4. 学習支援を通じて得られた成果

未来塾での学習支援を通して得られた主な成果としては次の4点が挙げられる。

- (1) 中学生と交流する貴重な機会が得られた。
- (2) 苦手なポイントを知ることができた。
- (3) 勉強を自主的にしたいと思える環境づくりができた。
- (4) 他の支援員の方から様々な教え方を学ぶことができた。

2つ目の「苦手なポイントを知ることができた」というのは、生徒が分からない問題について質問をし、私たち支援員が教えることを通じて、まず私たち自身が中学生の苦手とする分野を知ることができたということ、そして、もう1つは、生徒が自分自身の苦手なポイントに自分で気づくことができるようになったということである。

普段大学に通っているだけでは実際の中学生と関わる機会はほとんどないため、未来塾に参加することで中学生の現在の学習状況や課題を知ることができた。

未来塾の生徒には、勉強が好きで自分から進んで

取り組む子もいれば、勉強が苦手で集中することが難しい子もいる。その生徒たちが、自主的に勉強したいと思える環境づくりを目標に取り組んだ。

実際、中学3年生のある生徒は、学習塾にも通って受験勉強に取り組んでおり、未来塾では学習塾で学んだことを復習したり、分からなかったことを支援員に質問したりなどして、未来塾を有効に活用してくれている。

生徒が、未来塾に来て、自主的に勉強に取り組んだり、友達同士で教え合ったりして成長していくことが未来塾での大きな目標となっている。そのため、生徒と支援員とのコミュニケーションはもちろんのこと、生徒同士でのコミュニケーションも進んで取ってもらえるよう、発言や相談のしやすい環境づくりを行っている。

さらに、一緒に指導して下さる支援員の方には、元々教師だった方や、学習塾の先生だった方がいるので、実践的な指導方法を直接見ることもできた。

未来塾での学習支援を通じて、中学生の現状や課題について知ったこと、具体的で実践的な指導方法を身に付けたことは、教員を目指す私たちにとって非常に貴重な経験であり、私たち自身も大きく成長することができた。

この未来塾でのボランティア活動で得た経験を、今後の大学生活や教職課程での活動に活かしていきたいと思っている。

#### 5. 参加学生の感想

- (1) 実際に中学生と触れ合う機会はなかなかないので、教育実習や実際に教師になった時のための貴重な経験となっています。

(吉野 青空)

- (2) 中学生同士が自分たちで教え合っているのを補助しています。教え方にもいろいろな形があることを知りました。

(池内 夏美)

- (3) 中学3年生は部活動や受験勉強で大変なので、未来塾で少しでも楽な気持ちで明るい雰囲気の中で学んでほしいと思います。

(布施 名菜)

## 明海小学校児童育成クラブ支援補助

参加学生 (7人)	外国語学部日本語学科 4年 辛嶋 和泰 2年 梅崎 愛葉、瓜田 謙心、早乙女 愛菜、比嘉 彩夏、 三島 茉姫、森川 結衣
	【シンポジウムでの発表者】 瓜田 謙心、早乙女 愛菜

### 1. はじめに

浦安市の児童育成クラブは、いわゆる学童保育で、就労等により保護者が昼間家庭にいない小学生児童を対象に、放課後や土曜日、長期休業期間等に、家庭に代わる生活の場を提供する事業である。

市内の全ての小学校区ごとに17か所に置かれている。その1つ「明海小学校地区児童育成クラブ」は、浦安市立明海小学校に隣接し、市の委託を受けて労働者協同組合ワーカーズコープセンター事業団が運営をしている。毎日160人近い児童が通っており、明海大学生7人がボランティアとして支援をしている。

### 2. 明海小学校地区児童育成クラブの大切にしている3つのこと



(1) やりたいことをできることに変える。

子どもたちをルールで管理するのではなく、子どもたちは自由に自発的に行動する中で様々な経験をしてこそ「本当の主体性が身につく」という考えから大事にしている。

(2) 子どもだけの世界を守る。

昔は子どもだけで遊ぶ空間がいくらでもあったが、今はどこにでも大人の目がある。一人遊びしている子なども、適切に見守りつつも、無理に介入せずその子どもたちの世界観を崩さないように

している。子どもが自由に遊べると年齢に関係なく遊び、その交流の中で社会性なども身に着けていく。

(3) 見守られながら、自分で考えて、

自分で決める。

子どもたちは、させられたことはあまり身に付かないが、自分でやりたいと思ったことはなかなか忘れない。地域の人たちに理解と協力を得て外遊びに行くようになったが、行き先は子どもたちが主体で考えており、本当に危ないこと以外は好きに遊んでよいことになっている。

### 3. 明海小学校地区児童育成クラブの日常

今年度は、明海大学の教職課程履修者を中心する日本語学科の学生7人が学生ボランティアとして支援を行っている。

自分の都合のつく曜日に週に1～3日のペースで、午後1時30分から午後7時30分までの間で3～6時間、支援に入っている。

児童は支援クラブの庭でドッジボールをしたり、小学校の校庭を走り回ったり、砂場や鉄棒等で遊んだりして楽しんでいる。また、屋内で地域の造形作家のボランティアとともに工作をしたりしてすごしている。静かに勉強をしている児童もいる。ボランティア学生は、児童が安全に安心して過ごせるように、時には児童に寄り添い、時には少し離れて見守り、あるいは児童たちの輪の中に入り、様々な形で児童支援クラブでの児童の生活を支えている。

### 4. 学生の声（活動を通じて学んだこと）

(1) 学童ボランティアでの体験は私の価値観を一変させた。今まで先生方が教師という仕事の良さを語る時に、必ず「やりがいがある、子どもたちの笑顔が力になる」と言っているのを聞

いて、本当にそうなのか、目に見える範囲だけでもとても大変だとわかる仕事なのに、見えてないところなんて考えもつかないくらい大変なのだろうと思っていた。子どもたちの笑顔や成長にそれだけの価値はあるのか、あるとして私はそう思えるのかと考えていた。

結論から言うと、あった。学童での生活は正直言って大変だ。最初のころは続けていくのは厳しいと思っていた。しかし時間がたつにつれ、子どもたちが私のことを覚え始めてくれ、今では笑顔で一緒に遊ぼうと誘ってくれるようになった。そして遊んでいるときにスポーツのコツなどを教えると翌週にはできるようになったよと言ってくれる。この時の喜びのことを先生方は言っていたのだと思った。

学童での時間は僕の価値観を一変させた。そんな体験ができたことを感謝している。



教師の良さを語るときに出てくるやりがいや子どもたちの笑顔は実感が持ちにくい。それを聞いただけで教師になろうと一歩を踏み出せないでいる人はたくさんいると思う。そんな人たちにそれらを実際に体験できる学童でのボランティアに是非参加してほしい。

(瓜田 謙心)

(2) 私はこの学童支援クラブのお手伝いを始めてから、日常生活においてどのように子どもたちと接するかを学ぶことができた。

活動していく中で、子どもたちが自分たちでアイデアを出し、経験を積むことで成長する姿を見た。ただ、そこで子どもたちのアイデアを

こちらが全て肯定しながら進めていくとそれは秩序のないものになってしまう。

だから、それは自分勝手すぎる考えではないか、危険な行為ではないかと確認をとって、秩序を保ちつつ、子どもたちの自由な発想を壊さないでアプローチをすることが大切であると気付くことができた。

ただ、私は気づけた段階でまだ行動に移せてはいないため、これからも子どもたちの自由な発想力を伸ばすために、子どもたちの話を真摯になって聞き、力になれるよう行動していきたいと思う。

(早乙女 愛菜)



## 5. おわりに

元気いっぱいな児童とともに活動するのは肉体的にも精神的にもとても大変なことと思われるが、教師を目指す者にとっては、大変貴重な経験となっている。

また、「明海小学校地区児童育成クラブの大切にしている3つのこと」など、学校とは全く違った枠組みの中で児童と接した経験は実際に教師となった時に多様性という一つの宝として、様々なものの見方、考え方を可能にしてくれるはずである。

## 東京都立葛西南高等学校「校内寺子屋学習支援」

参加学生 外国語学部英米語学科 2年 齋藤 亜怜、霜方 柚奈、知念 咲花、花澤 真彩、  
福山 杏吏

### 1. はじめに

東京都教育委員会では、2016年度から都立高校生の基礎学力の定着を図るために、放課後の補習教室「校内寺子屋」事業を実施している。

東京都立葛西南高等学校では事業開始当初からこの事業に数学と英語で参加し、8年目を終えようとしている。

英語に関しては本学の学生が一貫して講師を務めている。昨年度に続き、今年度も生徒を火曜日クラスと木曜日クラスに各10人程度ずつに分け、各1時間の補習授業を実施した。

### 2. 実施概要

#### (1) 実施期間

第1学年火曜日クラス (計6回)

2023年5月16日～6月23日

第1学年木曜日クラス (計11回)

2023年10月5日～2024年3月29日

#### (2) 実施場所

東京都立葛西南高等学校5階教室

#### (3) 対象生徒

1年生約20人

#### (4) 講師担当者 (計5人)

上記表題に記載の学生で、いずれも教職課程履修者

#### (5) 教材

「高校英語入門 基礎から英文法の総復習フレッシュノート」(増進堂)他

### 3. 実施の様子

昨年度までは講師の学生が教壇に立って授業を行う形式であったが、今年度は生徒が自習をしている傍に講師が順番に付いて、自習内容へのサポートを行う形式に変更した。

生徒への指導では、まず、今その生徒が何を勉強

しているのかを確認した。次に、そこで使われている英語を学ぶときのポイントを話したり、その英語を活用して簡単な英語の文が言えるように指導したりした。また、英語で簡単な質問をして英語又は日本語で答えてもらったりした。さらに、英語を書く練習も行った。そして、分からないことはどんどん質問するよう促した。

英語に苦手意識をもちながらも、校内寺子屋での授業を機に学び直しに意欲を示す生徒など、さまざまな生徒と向き合う中で、講師の学生は、教職が単なる知識の伝達ではなく人を育てる仕事であることを実感する貴重な機会となった。

### 4. 工夫したこと、学んだこと、感想

#### (1) 指導上の工夫

指導上の工夫の一つ目は、生徒と視線を合わせたことである。しゃがんで視線を合わせることによって、生徒が安心していろいろなことを質問するようになった。

二つ目は、生徒一人一人が、どこまで分かっているのかを、探るようにしたことである。これは生徒に問題を出して、その答の内容から探るようにした。

三つ目は、初めから答を教えるのではなく、ヒントを出しながら生徒自身が考えながら正解にたどり着けるように支援したことである。

四つ目は、アウトプットの時間を確保するようにしたことである。

ある生徒に課題を出し、その生徒が課題に取り組んでいる間に、別の生徒を指導する。そして、元の生徒に「どう考えたか教えてね。」と言って、自分の言葉で考えたことを説明してもらうようにした。

このようにすることによって生徒が能動的に考える時間を確保し、定着を図った。

これは、学んだことを人に教えたり説明したりすることが学習事項の定着に効果をもたらす可能性があるとする仮説を参考にしたものである。

## (2) 学んだこと

一つ目は、初めて高校生に教える立場で生徒と関わる経験から、生徒との信頼関係の築き方や、教師として相応しい接し方について考えることができたことである。

二つ目は、生徒に寄り添ったコミュニケーションを行うことで、生徒一人一人異なる苦手ポイントを探ることがしやすくなることや、そのことに基づいて、生徒によって教え方を変えなければならない難しさを学んだ。

## (3) 感想

質問されたことに対して、やさしい例文などを即座に提示するなどして分かりやすく答えられるようになりたい。

一人一人の違いに応じた指導のバリエーションを広げられるよう、工夫と改善を続けたい。

その場限りの指導に終わるのではなく、見通しをもった指導ができるようになりたい。

## 5. 生徒の声

自分が自習していることを基に、大学生がアドバイスをしてくれたり問題を出してくれたりしたので、自分が今一番知りたい疑問を解消することができた。

定期テストの前ではテスト対策も行うことができて良かった。

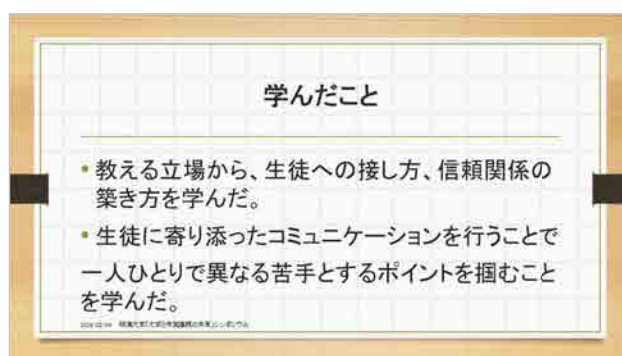
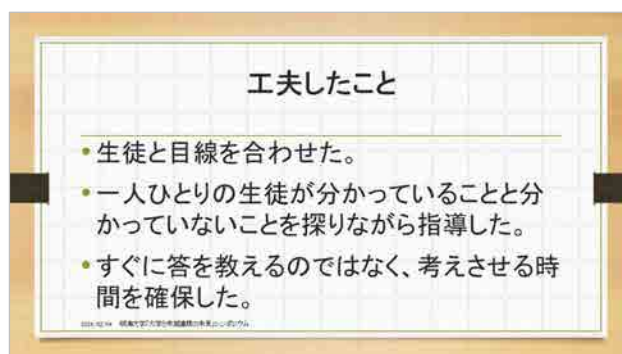
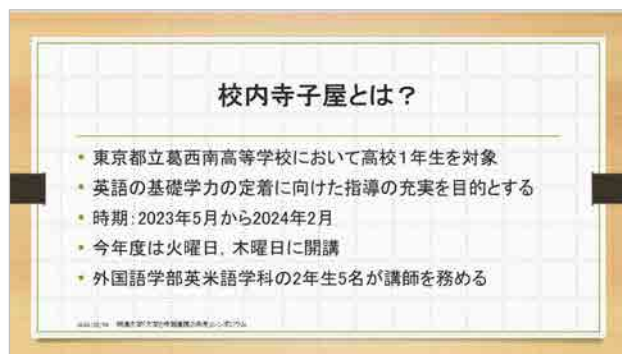
教わったことを自分の言葉で説明することで、教わったことが印象に残った。うまく説明できてほめてもらったときにはうれしかった。

少人数のため自分のペースで学べて良かった。  
あきらめないで学び続けることの大切さが分かった。

## 6. 2月4日当日の発表

2月4日のシンポジウムでは、外国語学部英米語学科2年 齋藤 亜怜及び花澤 真彩が登壇して報告を行った。

報告では、スライドを用いて、授業の準備や授業中で工夫したこと、指導者として学んだことなどが話された。



## 2023 年度足立区民対象生涯学習講座（英語）

参加学生	外国語学部英米語学科 4年 上原 二葉、小林 優汰
	3年 小川 翔太郎、折笠 渉、小林 聖菜、田中 啓夢、 富樫 美智雄、安田 結貴、吉澤 阿門
	2年 香取 ゆま、芳野 友介、大場 伊織、霜方 柚奈

### 1. はじめに

足立区民対象の英語講座は、2020 年開催予定であった東京オリンピック・パラリンピックに向けて 2017 年に足立区が独自で「おもてなし語学ボランティアブラッシュアップ講座」を開始するにあたり、併せて「初級英語講座」も開設することとなり、以降毎年5月から7月の第1クール、9月から11月の第2クールに各5回ずつの講座を行ってきた。

2020 年度はコロナ禍の中で、講座開催は中止となったが、2021 年度は第1クールには初級講座を、第2クールには中級講座をどちらも Zoom を利用したオンラインで行った。

講師は第1回目から継続して明海大学教職課程センター・地域学校教育センター百瀬美帆教授と多言語コミュニケーションセンター教授パトリツィア・ハヤシ教授、タイソン・ロード准教授が務めてきた。

また、すべての講座に明海大学外国語学部英米語学科教職履修学生数人が指導補助にあたってきた。

### 2. 実施概要

2023 年度は第1、第2クールとも対面形式で各5回、講座参加人数は第1クール32人、第2クール30人で初級講座のみを行った。

両クール共通のタイトルは「海外で役立つ初級英会話講座」で、内容は両講座同一とした。各実施日とレッスントイトルは右表のとおり。



実施日とレッスントイトル

回	実施日	レッスントイトル
	第1クール 第2クール	
1	5月21日(日) 10月1日(日)	At the Airport
2	6月11日(日) 10月8日(日)	Getting Around
3	6月25日(日) 10月15日(日)	Leisure Activities
4	7月16日(日) 10月29日(木)	Shopping for Souvenirs
5	7月30日(日) 11月5日(日)	Let's Travel Around the World!

補助学生名簿 姓のみ(学年)

回	第1クール (3年のみ)	第2クール
1	田中、富樫、安田	上原(4)、小川(3)、安田(3)、 香取(2)、芳野(2)
2	小川、折笠、小林、 富樫、安田	上原(4)、小林(4)、田中(3)、 富樫(3)、芳野(2)
3	小川、折笠、小林、 富樫、安田	小川(3)、安田(3)、吉澤(3)、 大場(2)、霜方(2)
4	小川、折笠、小林、 富樫、安田	小川(3)、安田(3)、吉澤(3)、 霜方(2)、芳野(2)
5	小川、小林、田中、 富樫、安田	上原(4)、小川(3)、安田(3)、 霜方(2)、芳野(2)



### 3. 学生の役割

大きく2つの役割があった。1つ目は、年齢、英語習得レベルに大きなばらつきがある受講者に対して、個別のサポートを行うことで、教職履修学生が大学において学修している知識や技能を活用することができた。例えば、目の高さを合わせることで、学習者の学習への不安感を軽減するように努めたことなどである。2つ目はコミュニケーション活動において、講師の補助を行うことであった。例えば、ペアやグループ活動において、欠席者の補充となったり、設定された場面の中で特定の役割を担ってグループメンバーとのコミュニケーションを練習したりした。



### 4. 参加学生が得る成果

まず第1に、「生涯学習」の意義を体験から学ぶことである。例えば第2クールの受講者の年齢構成は下表の通りであった。

第2クールの受講者の年齢構成	
年代	人数
10代	1人
20代	2人
30代	4人
40代	4人
50代	8人
60代	9人
70代	3人

受講者の中でも特に活発に活動していた60、70代の方々の英語学習に傾ける熱意を学生が実感することができた。

次に、教職履修者にとっては、講師の指導のもと、全体指導と個別への配慮を実践できたことである。

最後に、受講者からの多岐にわたる質問等に対応するための英語力、異文化についての知識、理解を求められ、学生自身の学習への動機づけの機会となったことがあげられる。

### 5. サポート学生の感想

- 私は年齢による英語表現の違いに興味を持ちました。年齢が高くなるにつれて丁寧な英語表現を知りたがる傾向にありました。この学びを将来の仕事に活用したいと思います。



(3年 小川 翔太郎)

- 私がこの講座を通して学ぶ機会を得ることの大切を学びました。幅広い年齢層の方々が、活きた英語を学び、学習したことをノートにびっしり書いている姿を見て、この講座は受講者の方々にとってとても貴重な体験だったのだと思いました。



(2年 芳野 友介)

### 6. シンポジウム当日の発表

1. 初級学習者に対する支援

3. 生涯学習

第2クール 年齢層	
年代	人数
10	1
20	2
30	4
40	4
50	8
60	9
70	3

シンポジウム当日は3年生の小川 翔太郎と、2年生の芳野 友介が登壇し、上記内容を報告した。

### 7. 今後の展望

一般人を対象とした学習支援の機会は学生にとって大変貴重であるので、今後の事業の継続が望まれる。

## 2023 年度足立区英語マスター講座修了者によるスピーチ・プレゼンテーションコンテスト

参加学生	外国語学部英米語学科 4年 磯野 奨、上原 二葉、内山 瑞貴、桑原 百蘭、 児島 晴香、小林 優汰、佐久間 陸人
	3年 小川 翔太郎、折川 渉、高木 由紀、田中 啓夢、 藤木 貴生、安田 結貴
	2年 大場 伊織、香取 ゆま、霜方 柚奈、知念 咲花、 花澤 真彩、福山 杏吏、芳野 友介

### 1. はじめに

明海大学・足立区連携事業における「英語マスター講座修了者によるスピーチ・プレゼンテーションコンテスト」足立区英語マスター講座を修了した者がその成果を発表とする機会を提供し、足立区の中学生在が継続的に自分自身の英語運用能力を磨き、さらにその力を高める機会とすることを目的として 2019 年より開催されている。運営をサポートする英米語学科教職履修学生にとっては「英語を話すことの指導」について学ぶ機会となっている。



・足立区の発表者 9 人と足立区大山教育長

### 2. 実施概要

(1) 実施日時 2023 年 11 月 3 日 (金)

午前 9 時から午後 3 時まで

(2) 会場 明海大学浦安キャンパス

成果発表会 2204 講義室

特別講座 2203 講義室

(3) 参加人数 (発表者・補助学生・教職員)

- ・足立区発表生徒 9 人、参加生徒保護者 13 人、  
足立区教育長 学力定着推進課職員 5 人
- ・明海大学補助学生 20 人 (うち 3 人は発表者)
- ・審査員 2 人、METTS 教員 8 人

(4) 実施方法

本学英米語学科教職課程 4 年生が司会進行と会場での誘導等を、審査員補助や会場整備、記録写真撮影、オーディオ操作等を 3 年生と 2 年生が担当した。

開会式に続いて足立区から 9 人が発表と、審査員との質疑応答を行い、続いて本学英米語学科教職課程 2 年生 3 人がモデルプレゼンテーションを行った。



・明海大学からの発表者 (左から霜方・香取・芳野)

・司会担当 4 年生 (左から児島・佐久間)



午後には審査員を務めた MLACC(本学多言語コミュニケーションセンター) のパトリツィア・ハヤシ教授とタイソン・ロード准教授が、コンテスト参加者を対象として Critical Thinking 力を育むための特別講義を行った。

足立区中高生のコミュニケーションをサポートする役割として、本学4年生5人も参加した。

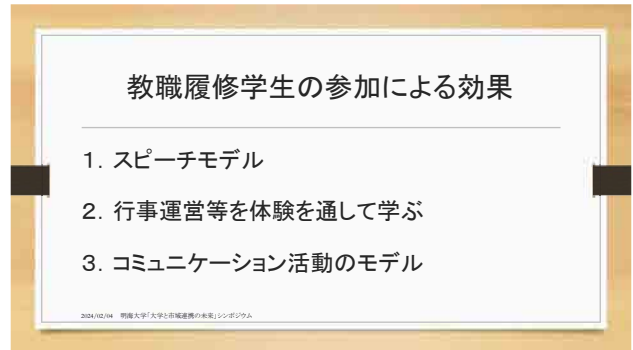


発表会プログラムは次の通り。

	発表タイトル 発表者氏名・所属学年
1	Important Experience SAITO Rio 区立第四中 2年
2	My recommendation! The Novel World NAKAMURA Mizuho 区立第十四中 2年
3	Virtual World GOTO Yuma 区立新田中 2年
4	Changing the World GOTO Tamae 区立第十四中 2年
5	My Dream -Through My School Life- SATO Mateka 区立東島根中 2年
6	World Diva, Hatsune Miku OHARI Kohane 区立江南中 3年
7	Why Japanese Animes Are Popular in the World KAMEMURA Yui 区立千寿桜堤中 3年
8	Connect! TAJIMA Rino 区立西新井中 3年
9	History of Hip Hop MACHIDA Urara 私立関東国際高校 3年
10	Never Give Up What You Want to Try SHIMOKATA Yuna 明海大 2年
11	My Goal and the Reasons KATORI Yuma 明海大 2年

### 3. シンポジウムでの発表

当日は司会を担当した英米語学科4年 児島 晴香と、モデルスピーチを発表した同学科2年 霜方 柚奈が、運営をサポートした立場と、中高生に英語学習者としてのモデルを示した立場から、個々の感想も交えながら発表した。当日使用したスライドのうち1枚を示す。



### 4. 学生の感想

サポート学生として本事業に関わった感想を発表学生は次のように述べた。

- ・英語が得意な中高生の前での発表ということで、緊張感もあったが、スピーチの内容と発表の際の目線や話し方などを意識し発表を行った。  
(スピーチ担当 霜方 柚奈)
- ・毎年4年生がオールイングリッシュで臨機応変な指示を出す姿に憧れていて、今回自分が実際にその役を務めることができたことを誇りに思った。  
(司会担当 児島 晴香)
- ・出場者ごとにマイクの音量を調整したりするには集中力が必要だったが、役を任されて嬉しかった。  
(AV担当 藤木 貴生)
- ・午後のコミュニケーション活動では、教職の授業で学んだスキルを活かすことができた。中高生から考えを引き出したりして、とても楽しかった。  
(特別授業担当 桑原 百蘭)

## 9. パネルディスカッション

### ◆大学と地域の連携によるウェルビーイング推進の可能性

#### パネリスト

露口 健司 (愛媛大学大学院教育学研究科 教授)

三輪 政継 (東京都足立区教育委員会 統括指導主事)

堀江 敏彦 (東京都立飛鳥高等学校 校長)

高木 由紀 (明海大学外国語学部英米語学科 3年)

宿 愛敏 (明海大学経済学部経済学科 3年)

#### コーディネーター

山本 聖志 (明海大学地域学校教育センター 教授)



【山本】 会場の皆様、それからオンラインでご参加の皆様、どうぞよろしくお願いたします。ただいまから 2024 明海大学「大学と地域連携の未来」シンポジウム後半のパネルディスカッションを行います。今年のテーマは「大学と地域の連携によるウェルビーイング推進の可能性」です。私は本日のパネルディスカッションのコーディネーターを務めます、地域学校教育センターの山本聖志と申します。1時間という短い時間ですが、どうぞよろしくお願いたします。

本日の学生によるグループ発表にもありました通り、明海大学では足立区教育委員会、浦安市教育委員会、東京都立高等学校、千葉県立高等学校等と連携し、学生がボランティアとして関わる様々な事業を実施しています。

コロナ禍にあっては、活動そのものを自粛せざるを得なかったり、オンラインで交流会を行ったりするなど制約がありましたが、今年度からは対面での交流や、連携事業の活動が全面的に実施できるようになりました。本パネルディスカッションでは、そうした最近の状況を踏まえて、教育行政や学校、学生のそれぞれの視点から掘り下げることにより、ウェルビーイングの推進を視野に入れ

た今後の地域連携のあり方を探ってまいりたいと思います。

それではまず初めに、本日登壇してくださるパネリストの皆様から、自己紹介をしていただきます。併せて、学生による発表でも紹介がありましたけれども、明海大学との連携で実施している内容、その取組の成果についてお話をいただきたいと思います。本日は基調講演者である露口健司先生にもパネリストとして参加していただいております。露口先生には連携事業に関わる他のパネリストの方からのご発言について、随時コメントをいただければと思います。それでは改めまして露口先生から自己紹介をお願いいたします。

【露口】 皆さん、あらためましてこんにちは。先ほどのご発表をありがとうございます。本当に素晴らしい、ウェルビーイングが循環するような実践が揃っていたと思います。子どもたちは幸せですよ、皆さん方が行ったことでね。そして皆さん方も幸せを実感できて。あとは、教員としての学びがいっぱいできてね。学校の先生方もきっとたくさん助かってるはずですよ。先生方も喜ばれているでしょうし、大学の先生方も、学生の皆さん方が立派な教員になって、採用試験受かってくれたりしたら、また幸せですので、非常にウェルビーイングを循環させるような仕組みですよ。こういった仕組みをどのように拡張していくのかとか、維持していくのかとか、その辺りの運営面、マネジメント面に私はすごく関心を持ちました。素晴らしいご報告をありがとうございました。以上です。

【山本】 露口先生、ありがとうございます。続きまして三輪先生よろしくお願いたします。



【三輪】 皆さんこんにちは。足立区教育委員会の学力定着推進課というところで、統括指導主事をしています、三輪と申します。

学力定着推進課というのは少し馴染みがない自治体の方もいらっしゃると思いますので、少々ご説明させていただきます。足立区ですが、解決すべきボトルネック的な課題というものが4つありまして、その中の1つが教育、学力についてでございます。

平成19年の全国学力学習状況調査では、小学校、中学校とも（全国平均から）大幅なマイナスだったんですね。ところが、それから、平成25年に学力対策の専管組織として、学力定着推進課が生まれました。そこでは様々な取組を学校とともに取り組んでまいりまして、今年度、令和5年度は、小学校ですでに（学力学習状況調査結果が）全国平均を超えています。中学校もあと一步のところまで来ております。また、英語については、「話すこと」の調査も別に行ったんですが、4技能とも全国値を超えることができました。

11年間にわたり、足立区の教育施策を支えていただいた学校関係者の皆様、教育委員会の皆様、地域の皆様、連携をしている大学の方々にも、この場を借りて厚く御礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。

明海大学との連携は、今年7年目になります。様々な活動を行ってまいりましたが、随時、ブラッシュアップしながら進めてきているところです。先ほどの学生さんの発表にもありました、BグループとCグループの発表中心ですが、そここのところはなるべく簡単にお話しさせていただきたいと思っております。

まず、留学生交流会等の交流ですね。まず、あけみ英語村から申し上げますと、小学校2校がこちらの大学に来させていただきました。そこで、子どもたちが頑張って英語を話す活動をやっていただいて、英語が伝えられたという実感の肯定的回答も93%、93%の児童が自分の思いを伝えられたと申しております。

これは先ほどもあった通り、留学生の方や教職学生の方々が、子どもの実態に合わせてお話いただいたからだと思っております。そして、留学生が

中学校に来ていただいた交流も5校ございました。こちらの方では、英語が必要だと子どもたちが回答しているのは97%。やはり必要だと思っています。しかしながら、コミュニケーションが取れたという項目に対して、肯定的な回答をした生徒の割合は78%。少し下がってしまったんですね。

やはりこれは自分の思いを、さらに正確に、適切に伝えることの難しさ、もどかしさがあったのかなと思っております、それを、話したい、うまくなりたい、できた、というような意欲につなげたいなと思っております。

先ほど（の発表で）なかったことで言いますと、外国人等の児童生徒を支援する教員向けの日本語研修会というものも行っていただいております。日本語の指導が他の学校の現場で苦勞されている方向けに行っているもので、年間2回で合計通して4回の研修になっていて、とても満足度の高い研修となっております。

区民講座も同様です。リーフレットのページにもございますが、明海大学が主催で行っています、文科省の委託事業、いわゆるMEIKAI-JOEプラス2023というものもございます。こちらも、最初の第1回のところから参加させていただいて、小学校英語の充実に向けて非常に良い取組となっておりますので、ご紹介させていただきます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

【山本】 三輪先生、ありがとうございました。それでは続きまして、東京都立飛鳥高等学校長 堀江校長先生、よろしくお願い致します。

【堀江】 皆さんこんにちは。東京都立飛鳥高等学校の堀江敏彦と申します。どうぞよろしくお願い致します。今日は、露口先生のウェルビーイングについてのお話を伺うことができ、非常に私も勉強になったと思っております。皆さんもそうだと思いますが、なかなか言葉は知っていても、その内容って実は何なんだろう、ということ、このお話をいただいてからずっと考えていたのですが、その答えの一つを今日の基調講演で見つけることができました。と同時に、学校現場での課題、そういったものもまだまだ山ほどあるんだなということを感じました。

早速ですが、明海大学との連携についてお話をし



ます。

先ほど、学生さんの発表Aグループのところでもありました。本校は明海大学と連携協定を締結している高校6校のうちの一つです。飛鳥高校には外国につながる生徒が多く在籍しているため、日本語の指導に関わる取組を中心に、明海大学様からご支援をいただいているところです。

まず一つは、生徒向けの取組として、日本語指導外部人材活用事業です。先ほど発表にありました通り、上級レベルの生徒に対して補習講座を年間16回程度開講していただいています。明海大学の大学院生の講師に担当していただいています。この講座はJLPT(日本語能力試験)受験希望の生徒が検定に向けて自分のスキルをアップするというのを目的に開講されたものです。今年度は人数が3名とあまり多くないのですが、ご支援をいただきながら生徒たちが頑張っているところです。

もう一つは教員向けです。教員向けで、日本語指導の講座というものを年に1回開講させていただいて、学校では校内研修として位置づけて先生方に参加してもらっています。

今年度は令和5年10月18日水曜日に、外国語学部日本語学科の志賀玲子先生に講演をいただき「ライフコースの視点から外国ルーツ生徒への支援」という題で、日本語指導や、通常の授業で教員が外国につながる生徒に対して、どのような心持ちで対応すべきなのかといったところを、非常にわかりやすく説明していただきました。

全日制、定時制の先生、合わせて約40名が参加して、次年度以降の自分たちの取組についても、もう一度考え直さなくてはならないという、先生方も考える充実した研修になったと思います。これらの取組については、次年度以降も継続して進めていきたいと考えております。以上です。

【山本】 堀江校長先生、ありがとうございます。このパネルディスカッションには本学の学生2人も参加しています。自己紹介と、それからご自身がどのような地域連携事業に関わったのか、それらの取組の成果も含めてお話してください。では、最初に高木さんお願いします。

【高木】 外国語学部英米語学科3年の高木由紀



です。私は今年度1年間、明海大学と浦安市との連携による学習支援ボランティア活動を行いました。この活動はトライ行政事業部による運営で、小中高生の学校の課題や勉強のサポートを行うものです。学習支援に加えて、学校と家庭以外にも一つの居場所づくり、という狙いもあるため、子どもたちとコミュニケーションを取り、子どもたちにとって居心地の良い環境をつくるのがテーマとなっています。

そこで私は生徒一人一人の性格や個性を尊重し、教室全体の楽しい空間づくりと勉強のモチベーションを向上させることや、子どもたちが新たに交友関係を広げることに支援にも力を入れています。また、日頃から生徒の意見やフィードバックに耳を傾け、それに基づいてプログラムや指導方法を柔軟に調整するよう努力しました。

私はこのボランティア活動を通して、子どもたちにとってより良い学習環境や居場所をつくるためには、コミュニケーションが最も重要で、日頃のコミュニケーションを通じて、信頼と共感を育むことが鍵になるということを知ることができたと思います。

そして、子どもたちにとって新たな居場所、コミュニティがあることは強い支えになるとあらためて感じました。そして、生徒とのコミュニケーション回数が増えて、生徒同士でも新たな交友関係が広がることによって、生徒全体の参加率も上がりました。

また、個人で勉強を黙々と進めたい人、先生の手助けを多く求めている生徒、周囲と協力して勉強をする生徒と様々いるため、個人のニーズに合った接し方をすることも大事であることを学びました。以上となります。

【山本】 高木さん、ありがとうございました。続きまして、宿さん。宿さんには先ほど学生発表のところでも、とても貴重な発表をしていただきました。それでは宿さん、お願いいたします。

【宿】 皆さん、こんにちは。あらためて自己紹介させていただきたいと思います。中国から参りまして、現在は明海大学経済学部経済学科3年の宿愛敏です。留学生団体の代表として、国際交流に関するイベントや企画に取り組みました。



そして、学校のボランティア活動にも参加しました。その結果、地元の学生と留学生のコミュニティが形成されて、文化の交流が盛んに行われるようになりました。特に小中学校との連携では、留学生が授業やイベントを通じて地元の子どもたちに異文化を紹介する機会が増加し、お互いの理解が深まりました。

また、学校のボランティア活動にも積極的に参加し、地域社会に貢献することを目指しました。具体的には、英語ボランティア活動や、地域清掃イベントに協力し、学生として地域社会との結びつきを強化しました。これらの取組により、学生と地域との協力が深まり、多様な文化を尊重し合いながら、地域社会との結びつきが一層強化されました。

【山本】 どうもありがとうございました。明海大学には多くの外国から留学生たちがたくさん学びに来ています。宿さんはその留学生の代表もされているという話を伺いました。どんな活動をしているか、少しご紹介していただけますか。



【宿】 私たちは異文化交流についてのイベントを実施させていただきました。今年、学校の中央委員会として（メンバーと）一緒に交流の活動を実施させていただきました。

具体的には、食べ物の趣味とか、習慣として異なる文化について、お互いを理解するためにやらせていただきました。ほかには学園祭で多国籍のグループを形成して、いろいろ皆さんと協力して盛り上がるようなイベントを実施させていただきました。以上となっております。

【山本】 どうもありがとうございました。それでは続きましてウェルビーイングの推進について、様々な現状と課題があるかと思うのですが、このウェルビーイング推進の現状と課題について話を進めてまいりたいと思います。

地域連携事業に関わらず、教育委員会または学校でどのような取組が、学校や生徒、教職員のウェルビーイングにつながっていると思われるか、それぞれご所属やその構成員のウェルビーイングを推進するために現状での課題は何だとお考えにな

るか、などについてお話しさせていただきたいと思います。では三輪先生からよろしいですか。

【三輪】 ありがとうございます。私は今、教育委員会にいるんですけども、中学校の教員もしておりましたので、学校の先生と子どもたちという観点からお話しさせていただければと思います。

足立区では、教育大綱の基本理念に「夢や希望を信じて生き抜く人づくり」というものを掲げております。

その施策の1つめとして、児童生徒の心身の健全な発達の支援、2つめとして、確かな学力の定着に向けた就学前から義務教育期までの取組ということを掲げているところです。

この2つが主に実現できれば、子どもも教員もウェルビーイングに近づくことができるのかなと思っています。

まず子どもの実態の方から述べさせていただきますが、先ほどの全国の調査の他に、足立区でも学力調査を行っています。その中に意識調査というものがございます。その項目に、学校に行くのが楽しいというのがあります。先ほどもちょっとありましたが、なかなかウェルビーイングでは厳しい数値が出ていたところかもしれないのですが、足立区の子どもの実態としては、学校に行くのが楽しい、について肯定的な回答をした児童生徒の割合は、小中学校とも86%以上です。86%以上ということは、子どもたちは学校には楽しんで行ってくれているのかなと思っています。

しかしながら、勉強が好き、ということになると小学校では66.1%、そして昨年度から-1.1ポイント、中学校だと34.1%に下がります。昨年度比でも-2.6。コロナの影響等もあったと思うのですが、ここはやはり真摯に私たちも受け止めていかなくてはいけないかなと思っています。先ほどのお話にあった、いわゆる享楽性は高いけれども、学習への没頭、エンゲイジメントについては課題があると考えています。同様に授業がわかる、という数値についても、小学校は87.9%、中学校は66.5%ということになっていますので、ぜひこの辺のところから学力定着推進課としては迫ってみたいと思っています。



ですので、課題としては、教員については、授業を中心とした児童生徒指導に集中できる環境の確保というもの、いわゆる本務ですよね。

学校の中でやっぱり大部分の時間であるのは授業なので、ここにどうやって集中いただけるか。

もう一点が、授業を中心とした指導力の向上。やはり、うまく、効率よく、いい授業を提供することによって、子どもたちがやはり確かな学力を身に付ける。できた、分かった、楽しい、授業でこんなことができるようになった。

そういうことが身に付くことができれば、やはりウェルビーイングに子どもも大人も教員も向かっていくのかなと思っています。ですが、子どもサイドから見たときには、いろいろな子どもたちがいるので、いわゆる個別最適な学びというものと、協働的な学びの両立が図られるような取組をしていくことが大切かなと思っています。

ですので、対策としまして、教育指導課という一緒に取り組んでいるところに聞いたところ、先生方にはこういう取組をしています。先生方がご自身の修養やリフレッシュのために充てる時間、「あだちからの日」と言っていますが、毎月1回なのですが、最後の水曜日の午後は、いわゆる研修とか会議とかを入れない。教育委員会もそのところには同様に研修を設定しないと、電話もかけない。先生方が自分の時間を自分で考えて自由に使えるというものを設定しています。このことによって、先ほどの学びへの没頭じゃないですが、ご自身で、今これがやりたいから、これをやる。私も病院に行ったりするんですが、休暇を取って病院に行かれたりとか、やはり自分で考えて行動できる先生方が増えたと、管理職の方からも伺っています。

私たち学力定着推進課としては、やはり教員の年次やニーズに応じた、専門性等に応じた学習指導力の向上。やはり先ほどもありましたが、高度専門職でございますので、先生方がより授業力を高めることによって、子どもたちに良い授業ができて、子どもたちに成果として共有できる。そんなことができれば、ありがたいかなと思っています。

最後に説明しました MEIKAI-JOE という中でも、全国 10 の自治体と一緒にやっているのですが、授業映像を撮影して一緒に研究共有をするんですね。

その中で、教授の方々からも「足立の子どもたちは、生き生きと楽しそうに自分の考えや気持ちを英語で伝え合う姿、ここについてはすごいですね」というお褒めの言葉をいただいています。明海大学と連携して行うことが一つのきっかけとなって、子どもたちに成果として還元できた一つかなと思っています。このような取組、子どもたちの個に応じた学習機会の充実等も併せて進めていければ、

一つの解決策になるのかなと思っています。様々なご意見をお待ちしております。どうぞよろしくお願い致します。

【山本】 三輪先生、ありがとうございました。教員が修養やリフレッシュのために充てる時間「あだちからの日」ですか。どういう願いを込めて、こういうネーミングだったんでしょうか。

【三輪】 ネーミングについてはいろいろな意見がありました。学校と先生方と相談して決めたところと聞いています。やはりキャッチーなのが一番馴染むのかなとも思っています。

この日は一応、月1回と決めているのですが、来年度の管理職の方にヒアリングしたところ、そのように先生方が自由に使える日というものを柔軟に設定していこうかというお話を伺ったりもしています。

【山本】 先ほど、管理職の先生の反応を伺いましたが、現場の先生方の声というのは聞こえてきますか。

【三輪】 そうですね。やはり私も英語科の教員やいろいろな委員会等の方とお話をするんですが、正直なところ、最初はなかなかその日があっても、結局自分の仕事が増えたり、言葉が悪いですが、持ち帰る仕事は持ち帰って行くとかじゃないのか、という声もありました。

そうではなくて、先生方が主体的にその時間を見つめ直して、ここでしかできないこと、他ではできないことを自分で考えて選択して行うことによって、総合的にタイムマネジメントができるようになってきたという声を、一部ですけれども聞いています。本当にありがたいことだなと思っています。

【山本】 ありがとうございます。それでは続きまして堀江校長先生、お願いいたします。

【堀江】 先ほどもお話ししましたが、ウェルビーイングという視点で、これまで学校を見ていなかったというのが本当のところなんです。

ですから、本来の考え方から少し外れてしまうのかもしれませんが、現在、学校で進めている教育活動の中から、先ほど少しお話しした、外国につ





ながる生徒に対する日本語指導の取組についてを中心に説明させていただきたいと思います。

本校は在京外国人生徒枠を持っている8つの都立の学校のうちの一つです。先日の1月26日金曜日に実施されました、在京外国人入試では、20名の募集枠に42名の生徒が応募し、受験しました。

また、一般入試でも外国につながる生徒が受験します。ということで、現在、トータルで1年生から3年生まで、外国籍を有する生徒は89名。内訳は中国、フィリピン、ネパール、韓国、ミャンマー、モンゴルといった国々が中心です。

最近では、ヨーロッパ、アフリカ、あるいはアジアの諸国からも受験生が多く見受けられています。この89名の生徒のうち、日本語の講座を選択している生徒が38名です。講座は4つに分かれています。初歩クラス、初級、中級、それから上級です。初歩から中級までの3つは、学校設定科目として単位認定することができます。

上級クラスにつきましては、明海大学の大学院生に協力をいただいていますけれども、補習の講座ということになります。レベル別に分けて、丁寧に指導はしているのですが、生徒の質も毎年毎年変わっていきます。日本語の習得が難しい、困難であるという場合も増えているのが現状です。

その中で課題として言えるのが、やはり人材の確保です。レベルに合わせて日本語を習得させるためには、本当にきめ細やかに対応する必要があって、初歩では1年生の6名が講座を取っていますが、時間講師1名、外部人材4名で対応しています。2番目の初級は1、2年生が10名。

こちらは特別専任講師と本校の正教員1名が対応しています。中級は1年生から3年生まで22名。こちらも特別専門講師と本校の教員1名で対応していますけれども、なんとといっても外部の人材が頼りになります。初歩レベルでは、ほぼマンツーマンといった授業を進める必要があって、多くの人材をどのように集めるかといったところが大きな課題となっています。

もう一つの課題は、日本語講座に限らず通常の授業でも、普通の先生方が行っている授業でも、この生徒たちがいるということになります。日本語でなかなか意思の疎通もままならないような状態がある中で、他の生徒と同様の授業を進めるということは非常に難しいということになるかと思えます。

ですから、対象の生徒に対しては、できるだけわかりやすい日本語を使って授業を進めるといったことも必要ですけれども、そういった認識ですとか、それに関わるスキル、そういったものを身に付ける必要があるのではないかと思います。

また、本校は国際理解教育を推進している学校で、

海外の高校生との交流事業なども進めています。

校内でもESSなど英語のスキルアップを目指した部活動も盛んですし、英検についても多くの生徒が受験し、今年度は準2級以上が76名以上、1級が1名、準1級が6名など、多くの生徒が難関をクリアしているところです。また、現役の大学進学率も70%になるかといったところです。

課題は先ほども言いましたが、外国につながる生徒のこれからについて、進路指導をどういうふうに進めていったらいいのか、ということが一つ挙げられるかと思えます。

中には日本の大学に進学する生徒もいますし、海外の大学に進学する生徒もいますが、そこに至るまで、例えば、保護者の方が日本語を全く理解できないといったようなご家庭と、担任の先生がいかにコミュニケーションを図るかといったところが一つの課題です。今年度、担任の先生方全員にPOCKETALK(ポケットーク)を買って、とにかくこれを使って、保護者の皆さんでなかなかコミュニケーションが取れない場合には対応してもらえないか、ということで、先生方をお願いしたところです。

また、急速に進んでいる生成AI、そういったものを活用すると、またさらに深く生徒あるいは保護者と話をすることができるのではないかなと思っているところで、これは学校だけではなくて国全体を含めて、これから活用についてのルール等を決めていかなければならないのかなと思っているところです。

何はともあれ、外国につながる生徒が多い学校です。そういった生徒が幸せになれるように、どのように指導していったらいいのかというところで、今後もいろいろなところで応援をいただいて、その中の一つ、明海大学さんからのご協力を得ながら進めていければと思っています。以上です。

【山本】 校長先生、ありがとうございます。本校の生徒の実態を捉えて、外国につながる生徒が多いということで、その生徒たちのウェルビーイング、すなわち幸福の追求ということで、様々な活動を工夫して行っているということで、大変よくわかりました。

少し話がずれてしまうかもしれませんが、そうやって熱心に取り組まれている学校の校内の先生方の働き方を校長先生から見たときに、ウェルビーイングの推進状況はいかがでしょうか。

【堀江】 痛いところを質問されたかな。先ほどの露口先生のお話にもあった信頼というところがあると思うんですけど、ああいうふうになかなかいかず、今難しい状況になっているのかなと。

先生同士、あるいは保護者との関係、それから生徒との関係を含めて、うまくいっているのかな、と考えると、うまくいっている先生もいらっしゃいますけれども、そうじゃない先生も現実にはいる、というところですね。先ほど言いましたが、それを管理職である私が中心になって改善していかないといけないのかなと思っています。

本当にこの信頼関係というのを築いて、それがあつたらみんな幸せなはずだ、と考えたところです。以上です。

【山本】 実情を踏まえてお話しいただきまして、ありがとうございます。それでは、続いて学生2人から。どうでしょうか、ウェルビーイングというのは身近な言葉だったのでしょうか。今、ウェルビーイングという言葉は身近なのでしょうか。今日はぜひぶん理解が進んだと思うのですが、率直なところも含めて、ご自身がウェルビーイングを推進していると考えられる事例があれば、ぜひ紹介してもらいたいと思います。

またウェルビーイングを推進するために、なんだかここは少し課題だなと考えることがありましたら、それを含んでお話ししていただけますでしょうか。高木さん、宿さんの順番でお願いします。



【高木】 私がウェルビーイングを感じた事例は、ボランティア活動です。ボランティア活動では活動する学生、参加する子どもたち、そして関係機関を含むコミュニティの三者がウェルビーイングを高めることができると考えています。

はじめに、学生にとってのウェルビーイングについては、私自身、学校現場の教職ボランティア活動で、子どもたちとの触れ合いから幸福感と自己肯定感を日々得ています。学校教育のボランティア活動では、生徒の成長をサポートし、新しい知識やスキルを教えることから、自己充実感を得ることができています。生徒が理解を深め自信を持つ瞬間や、難題に取り組む姿勢が変容していく瞬間は、指導、支援する私にとって大きな喜びとなっています。

次にボランティアの対象である子どもたちの視点からでは、新しいことを学ぶ楽しさや、できな

かったことができるようになる面白さが次の取組への積極性につながると考えています。子どもたちが努力していく中で、困難を克服したり、成長する過程で成功を体験したりする、理解が深まるなどの喜びがあると思います。子どもたちが自ら成長を実感し、学びの過程を楽しむことで、学習へのモチベーションや自己肯定感が向上します。つまりウェルビーイングを実感することができると思っています。

最後に、関係機関などのコミュニティレベルでは、生徒の成長のために指導者や支援者たちが協力したり連携したりすることが大事なことで考えています。生徒と先生、生徒同士が教え合う環境では、誰かのためになっているということが自己肯定感につながり、地域社会の一員である自覚を高めていくと思います。ボランティア活動をきっかけに、個人の善意が集まることで、コミュニティ全体のウェルビーイングが向上し、相互の支え合いが生まれると思います。このことは、持続可能な社会の実現と、健全な人間関係の構築につながっていくと考えます。

そして、ウェルビーイングを考える上で私が課題だと思う点は、ボランティアに関わったり、参加したりする人たちにとってのウェルビーイングのバランスを取ることでと思います。自分のウェルビーイングを高めるには、健康なライフスタイルを維持し、十分な休息と運動を取り入れることが重要です。また、趣味や興味を追求し、ストレス解消や楽しみを見つけることも効果的だと考えています。その中でも良好な人間関係を築き、コミュニケーションを大切にすることが、自己満足感や幸福感を高める手段だと考えています。

活動する私たちのウェルビーイングが確保され、参加する子どもたちのウェルビーイングを高め、そして結果的に関係するコミュニティ全体のウェルビーイングが高まると思います。つまり、自己の幸福の追求と、社会との連携とのバランスが重要な点になると思います。以上です。

【山本】 ありがとうございます。子どもたちと関わる中で、できなかったことができるようになる、その姿を見る自分もまた喜びを感じる、ということで実際に活動を通して実感されたということですね。それからバランスというお話がありましたけれども、非常に重要な点を指摘されているような気がします。それでは宿さん、よろしくお願いします。

【宿】 私の方は、国際交流に関するイベントを企画した経験が、私のウェルビーイングに多くの影響を与えました。

先ほど山本先生から質問をいただきましたが、学園祭のとき、異なる文化や背景をもつ学生たちが



協力してイベントを成功させる過程で、幸福感や地域でのつながりを実感しました。共に働くことで生まれる協働性や利他性が、満足感や充実感につながりました。

自身のウェルビーイングを高めるために直面している課題は、異文化環境での自己肯定感や自己実現に関するものです。新しい環境や言語の壁に直面している中で、自分のアイデンティティを確立し、自分自身を肯定することが課題です。これに対処するために、異なるバックグラウンドをもつ人々とコミュニケーションを深め、相互理解を促進する機会を積極的に求めるよう心がけています。以上です。

【山本】 宿さん、ありがとうございました。もしかしたら、外国から果敢に明海大学に学びに来る、それはとても前向きなことだけでも、大変な面もきっとあって、その克服もウェルビーイングにつながっているのかもしれないですね。どうもありがとうございました。

それでは次に、露口先生、ここまでお話を聞いていただいて、コメントをいただけたらと思います。

【露口】 ありがとうございます。簡単に、一点だけにしたいと思います。皆様方のこのウェルビーイングの循環実践、拝聴させていただきました。

先ほどの私の話のちょっと追加になるのですが、循環させていくためには、幸せになってほしい人が誰か、ですね。皆さん方の生活の中で、例えば先ほどのご発表で、三輪先生でしたら先生方だったりとか、子どもたちだったりとかですね。ターゲットが明確なわけですね。

幸福哲学の中にこんな考え方がありまして、自分が幸せになってほしいと思う人が幸せな状態が、我が幸せ。これは非常に日本的なのですけれどね。自分が幸せになってほしいと思う人をちょっとイメージしてみてください。その人が幸せであることが、我が幸せみたいですね。なかなか欧米的にはもちにくい価値観なのですよね。自分の幸せで山に登っていきますからね。そういう、ちょっと欧米とは違う幸福感をもってみるとどうでしょうかね。自分が幸せになってほしい人って、市内の先生方である場合は、その先生方って幸せだろう

かとか、先生方が幸せになるためにはどうしたらいいのだろうか、という、いろんな思案が出てきますよね。

また、市内の子どもたちとか、あと学校の中の子どもたちとか、皆さん方がボランティアで関わっている生徒さんたち、そして外国にルーツをもつ生徒さんたちが幸せになるには、どうしたらいいのだろうか。その幸せな状態が我が幸せと思えるようになると、これは本当に教師冥利というか、教職って結構、今私が申し上げました独特な幸福哲学を持っている職業集団かなと、そんなところを感じた次第でございます。ちょっと長くなりましたが、以上でございます。



【山本】 いかがでしょうか。露口先生から今コメントをいただきましたけれど、登壇者の皆様から、もう少しこのところを聞いてみたい、という質問がありますか。

【山本】 大丈夫ですか。では、そういう機会を後で設けますので、果敢にチャレンジしてみてください。ここまで、課題であるとか、問題であるとか、対策であるとか、そうした点について、それぞれのお立場からご発言をいただきまして、またそれに対して露口先生からコメントをいただいたところでございます。

続きましてこのウェルビーイングの推進の取組、さらなる可能性のところちょっと話題を踏み込んでいきたいと思えます。もしかしたら「より良く」というのが、一つの方針、キーワードになってくるのかなと思うのですけれども。これまで、皆さんからお話しいただいたことを踏まえて、地域連携というところがキーワードのもう一つ重要な部分になっていますので、この地域連携におけるウェルビーイング推進の取組について伺いたいと思えます。

明海大学との連携事業において、今後、どのようにこれを推進するか、何をすべきか、どのようなことがまたできるか、というところを含めて、お話をいただきたいと思います。いかがでしょうか。では三輪先生、お願いします。

【三輪】 ありがとうございます。今の露口先生



のお話で、本当に共感だなと思って、自分の幸せになってほしい人が幸せであることが、私たちの幸せ。本当に学校の先生たちを通して、子どもたちが生き生きと楽しそうに、できた、わかった、もっとやりたい、という表情を見せてくれるとき、私たち教員委員会としても本当にうれしいのですよね。そういう形で学校と一緒に取り組んでいきたいなと決意を新たにしましたところでした。

今いただいたお話のところですが、明海大学さんとは様々な連携をしているところで、ご承知の通り、ターゲットである児童生徒が、直接大学の留学生とか、教職の専門の方々と学生と交流することによって、実体験として自己肯定感が高まっていくんだなということは、やはりその通りだと思っていて、進めていきたいと思っています。

ただしかしながら、例えば留学生交流会では、今年度は5校で行ったのですが、生徒数で言うと865名です。しかしながら、足立区の中学生の数で言うと、1万3000人前後いるわけで、すべての子どもたちにこの機会を与えることはできないわけです。

そこで、ではどういう手が考えられるのか、ということになってくるのかなと思っています。私たちもこの施策がとてもいいものだというので、校長会を通して周知してきた中で、今年は希望制にしたのです。やりたい学校は手を挙げてください、プレゼンしてください、と言ったら、本当に5校がすぐ集まった。やはり学校現場としても、子どもたちが直接、こういう体験ができる場面が求められていて重要だと思っていることの表れだなと思っています。

その中で、やはり7年間にわたる連携事業を精査しながら、方法を工夫して、先ほどおっしゃっていたように、質をどう高めていくのか、ここに尽きるのかなと思っています。

留学生交流会に限れば、一番初めはバスで足立区のある学校まで来ていただいて、朝からお出迎えをして、学校によっては、その時1月だったか、12月だったか、書き初めとか福笑いとかと一緒に留学生と体験するなどということもやっていました。

段々と時が流れていく中で、コロナ禍でオンラインでやらせていただいたことも。私たちのやり方としてはやはりすごい財産になったと思っています。

す。今のところでは、もっと子どもが直接、個で対応できるように、そういう時間を重視しようと思ってきていて、今年は本当に原稿とかを準備しないで直接喋ってもらいたいという学校が出てきました。

やはり子どもたちがこれから先身に付けるべき英語力は、一生懸命準備して書いたもの、練習したものを正確に再生するという力じゃなくて、相手の言っていることをその場で理解した上で、自分の考えとか思いを自分の言葉でどう伝えていけるのか、ネゴシエーション。

これから先いろいろな社会に出ていく中で、子どもたちが身に付けるべき資質、能力は、英語に限らずそういうものだと思うのですよね。それなので、質を高めていく中で、やはり目標とすべき資質、能力を定めつつ、精査することが大事なのかなと。今、おぼろげながら話していて思いました。新しい考え方を見させていただきまして、ありがとうございます。

【山本】 どうもありがとうございます。実はなかなか時間設定が難しいところもあるのですけれども、先日、参加した学生からは、お昼にかかって給食をいただいて、とても喜んで帰ってきたという感想が聞かれました。この感想を聞いて、いかがお考えでしょうか。

【三輪】 本当にその通りで、私たちの側だけにメリットがあっては、やはり連携事業はうまくいかないと思うので、先ほども子どもたちと触れて、教職の良さを実感したとか、相手目線に立つことの重要さがわかったという、ありがたい言葉をいただいていたのですが、それだけではなくて、やはりせっかく留学生の方々日本の文化に馴染むチャンスがあるならば、積極的に公開したいです。

やはり連携が進んでくると、今度は一度連携、交流会を行った後、児童生徒が感謝の思いを手紙に託したりとか、映像で送ったりとか、そういう取組ですかね。持続可能な中でやっているところもございましたので、付け加えさせていただきます。

【山本】 どうもありがとうございました。給食の言葉を前向きにお答えいただきまして、ありがとうございます。また希望者が増えるかもしれません。

【三輪】 美味しい給食ということで売っておりますので、ぜひいらしてください。

【山本】 はい、失礼いたしました。それでは続きまして、堀江校長先生、お願いいたします。

【堀江】 先ほどからお話させていただいている日本語指導の充実といったところで、やはり連携を強めていければなと考えています。予想をはる



かに超える速さで増えていく外国につながる生徒、そういった生徒をきめ細やかに、少人数で、あるいは個別で指導するためには、明海大学の学部の皆さん、大学院の皆さん、それから教職員の皆さん、すべての力をお借りするぐらいの勢いでないと、なかなか間に合わなくなってきました。助けてください。よろしくお願いいたします。

それから、言語の話もさせていただきました。いろいろな国の言葉があって、例えば、最近ではウクライナとか、いろいろな報道でも出ている通り区立の学校にも来ます。

本校の教員の中にロシア語がわかる先生が一人いて、やっとその先生とコミュニケーションを図ることができました。といった状況がありますので、例えば、大学のネットワークを使っていたら、そういった言語に精通している方、そういった方々の人材について、我々とその方々を結ぶネットワークの起点になっていただければ、と思っています。

そういったものも含めて、大学が今、もっている語学に関係する教育方法について、最新の研究などをご紹介していただくとともに、ここにいらっしゃる学生の皆さんが、もっとこんな簡単なやり方があるよ、こうした方がいいよ、という、そういったアイデアがあれば、こちらもぜひ紹介していただければと思います。そういったものが本校の教員のスキルアップにもつながっていくと思いますので、ご協力をいただければと思います。

高校の生徒、教員、それから大学の学生の皆さん、教職員の皆さん、それから先ほどお話した地域に眠っている、あるいは今まで表面に出てこなかった地域の方々の人材、そういったものを、皆さんのもっている力を結集して、協力していい方に、前の方に進んでいければ、今回のお題であるウェルビーイング、自分の心と体の健康を維持しながら、そして自分と他者との良好な信頼関係、そういったものを継続させることで、ウェルビーイングということが完成していくのかなと少し考えているところです。以上です。

【山本】 校長先生、ありがとうございました。今、伺っているのは、取組の今後の推進の可能性、あるいはより良くといったことで、キーワードで

伺っているところでございます。本当にありがとうございます。では、学生の皆さん、今の観点でいかがでしょうか。順番は高木さん、宿さんでお願いします。

【高木】 大学と地域の連携によるウェルビーイングの促進のためには、私はボランティア活動が重要な役割を果たすと考えています。私からは3点、ボランティア活動のメリット、地域のニーズに応じたボランティア活動の充実、ボランティア活動に参加する学生の拡大、の3点についてお話しします。

初めに、ボランティア活動には様々なメリットがあると思います。例えば、大学生が参加しているボランティア活動では、大学という一つの場所、コミュニティではなく、大学以外の自分のコミュニティを増やすことによって、社会性や、社会人としての自覚、自信をつけることができると思います。

私は教職を目指しており、小中高生を対象とした様々なボランティアや、海外ではベトナムでの日本語学校でのボランティア、オーストラリアでの環境保護のボランティアなどに参加し、言語の習得はもちろん、新たな考えや自分の視野を広げ、将来教職に役に立つような様々な学びと経験を得ることができました。

次に、地域との連携の視点では、現在、明海大学では多くのボランティア活動を提供しています。私も、様々なボランティア活動の機会で、ウェルビーイングを感じることができました。今後もさらに、地域のニーズに応えられるような学生ボランティアのプログラムを拡大し、参加者が地域の交流や社会貢献活動を通じて幸福感を得られるような機会を提供することが大切だと思います。

また、大学のカリキュラムが地域の産業や社会ニーズに即した実践的な体験の機会を提供することができれば、学生が地域社会に貢献できるようなスキルや知識を身に付けることができるというメリットもあり、自己肯定感にもつながると考えます。

最後に、大学と地域が連携しているボランティア活動について、地域の方々にも知っていただくためには、発信することが最も重要だと考えていま



す。それは参加する学生を募集するためにも大事なことだと思います。

先ほど述べたように、ボランティア活動のメリットを発信していくとともに、同世代と共感、協働する場を提供することで、同世代とのつながりを強め、サポートすることがさらにできると思います。ボランティア活動に参加するハードルを下げることができれば、体験者の感想や成功事例を広めることにもつながり、さらに参加者が増えるのではないかと思います。これらの取組に積極的に参加すること、またそのきっかけづくりの場面を多く設けることが大切だと思います。

そのためボランティア活動で得られる幸福感、ウェルビーイングを、ワークショップやアウトリーチ活動などを通じて広げ、一回ボランティアをしてみようかな、と触れさせることが活動への促進となり、最終的にウェルビーイングへの促進へとつながると考えます。以上です。

【山本】 高木さん、ありがとうございました。続きまして、宿さん、お願いします。

【宿】 大学での英語交流ボランティア活動に参加することで、異なる言語や文化を理解し、国際的なつながりを促進できます。英語を共有する場を提供して、英語によるコミュニケーションを深め、相互理解を育むことができます。また、中学生との英語交流プログラムに参加して、言語や文化を共有する機会を提供します。言葉の違いを乗り越え、異なる文化に触れることで相互の理解が深まり、友情や協力関係が築かれます。

さらに、多国籍のグループを形成して、留学生同士が異なる国の文化を紹介し合う交流イベントを主催します。これにより、留学生が主体となりながら、自分自身の文化を紹介することで、お互いを理解し合い、国際的なつながりを促進することができます。

留学生が地域の中学校で英語の授業や文化交流のイベントを開催することで、地域社会への貢献が期待できます。これにより、留学生は自らの能力を社会に還元し、同時に地元の学生との交流が増えていくと思います。さらに、英語のスキルを向上してサポートし合うプログラムをつくり、言葉のバリアを超えつつ、助け合いながらコミュニケーション能力を高め、自己実現を促進していく



と思います。そして、みんなのウェルビーイングを高めることにつながると思います。以上です。

【山本】 どうもありがとうございました。一応、今日予定している話題につきまして、それぞれ登壇者の皆様からご発言をいただいたところです。露口先生、いかがでしょうか。まとめというか、先生からコメントをいただきたいと思います。

【露口】 ありがとうございます。私は通りすがりの者でございまして、先ほどご発表は何いましてたけれど、こちらの連携事業を深く理解しておりません。それを前提に置いておいてください。

2点ほどいきますね。連携づくり、つながりづくりという視点にしたいし、やはりウェルビーイングの根源は信頼ですよね。その辺りに少しポイントを置きながら、お話できたらと思います。

1つめですけれど、やはりつながりや信頼をつくっていく上で大事なのが、相手に関心をもつというスタート地点ですよね。学生の皆さんはどうか。足立区、先生方、子どもたちに関心をもっていますかね。何か「足立区」って新聞に出てきたら、わっと見ますか。どうですか。足立区の方々には明海大の学生さんに関心をもっていますでしょうか。明海大全体でもいいし、教職課程、個人個人、やはり関心をもたないと何も見えてこないというのがありまして。皆さん方も経験ないですか。

私は、こんな経験がありまして、50歳を過ぎてお花に目覚めましていろいろ花を植えるんですよ。ガーデニングというんですか、かっこよく言うとね。庭いじりなんですけれどね。花を植え始めて花に関心をもつようになると、世の中、花に溢れているということに50歳を過ぎて気付きました。あ、こんなに世界って花だらけなんだな、と。だから、その辺に植わっている花も、パンジー、ビオラ勢が今、頑張るとるなとか、そんな観点で見られるようになって。あとは、ピンコロ石がここはよく使われているなとか。でも、関心のないときは何も見えていないです。

これは教師、子どもで言うと結構恐怖話なんですよね。子どもに関心をもっていない先生は、何も見えてない、という話になりますのでね。教師、子どもで言うと、これはもう恐怖ストーリーです。それで、この連携で言うと、相手に関心をもてないと、スタートなんてしないわけなんですよね。

では、どうやって関心をもつかということですよ。それは、今日、皆さん方に何回も言及してもらいましたけれど、やはり対話からですよ。学生の皆さん方からも、コミュニケーションが大事という話をいただきましたけれど、話すというところがスタートですよ。お話しして初めて、あ、足立区の子もたち、あ、こういう子もいるんだな、こういう子もいるんだな、あ、背景こうだな、とか。

保護者の方とかも、チャンスがあったらお話とかしてみたいですね。いろいろな方と対話することで交流することが、まず起点になりますよね。いきなり関心をもてと言っても無理ですからね。早めの対話交流。

その先は、協働活動を通してのお互い様の規範づくりですね。対話だけでは先に進めません。信頼まではいかないんですよ。同じ目標に向けて協働活動、一緒に汗を流す活動をする。

それは子どもたちでもいいんですよ。足立の先生らでもいいんですよ。高校の先生らでもいいんですよ。一緒に汗を流す活動をする、これは1回ではダメで繰り返しです、協働活動を繰り返すと、いつの日か「お互い様じゃない」という言葉が口をついてくるんですよ。

「これ、お互い様じゃないですか」という言葉が出たときが、信頼関係ができたときです。「お互い様じゃない」と言っていますかね。言われていますか。先生方に、ボランティアに行って「お互い様じゃない、山田君」みたいな。この言葉を引き出してみてください。これは皆さん方もそうですし、足立区の方からも「お互い様」という言葉がどれだけ出てきているか。

高校はなかなか問題が難しく、皆さん方が払う自己犠牲のレベルも高いですね。お金が出ないという仮定で行くと、その支援して、言語活動の支援をしたところで、どれだけのお互い様レベルになるかですね。皆さん方、すごい時間をかけて、能力も労力も要るわけですからね。それに対する東京都からの、あるいは学校からの何かがないとお互い様にはならないですね。例えば、採用試験を優先的にか、そういうのもいいと思います。何でもいいですよ。今のは一例なんですけれども。

お互い様ができると、信頼関係ということで、逆に考えていきましょうか。やはり幸せを実感するためには、信頼。信頼のためには、協働活動を通してのお互い様ですね。お互い様の言葉づくり。

その前に行くとやはり対話。そしてその辺りから生まれる相手への関心とかですね。ちょっと逆に追っかけていくとウェルビーイングとつながり、連携事業が今回例なんですけれど、ウェルビーイングからつながりみたいなのが見えてくるかなと思ったりした次第です。皆様方のご発言からたくさんのお話を学ばせていただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

【山本】 ありがとうございます。相手に関心をもつこと、それから「お互い様」、とっても大事なマジックキーワードと言ってもいいようなお話を伺った気がします。先ほど申し上げたように、登壇者の皆様も、もっともっと話を聞きたいと思

うのですけれども、ちょっと時間がだいぶ迫ってきています。何かここは先生どうですか、というのがあったらお願いします。高木さん。

【高木】 お願いします。先ほどの、ウェルビーイングを得るためには、まず相手に関心をもつことが必要である、ということ、その関心をもつことから、信頼関係、ウェルビーイングにつながっていくこと、そのためには対話が必要で、協働活動で、それがつながっていくことがウェルビーイングにつながっていくことにすごく感心しました。

そこで質問ですが、話の中で留学生との言葉の壁だったり、留学生との先生、生徒同士などの言葉の壁など、いろいろな問題点が今まで挙がってきたと思うのですが、ここでそのウェルビーイングを留学生とも同じように達成することにおいて、何か難しい点や、その達成するためのポイントなどがもしあればお伺いしたいです。

【露口】 ありがとうございます。言語の壁等がありますよね。そこは、先ほど堀江先生のおっしゃってくれた AI 活用ですね。これはインクルーシブ教育にもつながると思います。やはりちょっとつながりにくさをもっている子どもたちとか、つながりにくさをもった集団にこそ AI の活躍の場があると思いますので、また、堀江先生に相談してみてもえたらいいかもわからない。

【高木】 わかりました。

【露口】 ありがとうございます。

【高木】 ありがとうございます。

【山本】 ありがとうございます。それでは、会場の参加者の皆様からご意見、あるいはご質問等ございましたら、お受けしたいと思います。どなたかいかがでしょうか。では、お手が挙がっていますので、マイクを今、お持ちしますので、ちょっとお待ちください。マイクが届きましたら、所属とお名前とご発言をお願いします。

【吉野】 外国語学部日本語学科3年の吉野青空です。今日は貴重なお話を本当にありがとうございました。ウェルビーイングの推進の現状と課題で、三輪さんがお話しされていた「あだちからの日」のお話を聞いて、「わ、そんなものあるんだ」とすごい驚きがあったんですね。

でもその後露口さんのお話で、ウェルビーイングは、日本の場合は、本人の幸せよりも相手の幸せを、というのを聞いて、「えっ、確かに私、人の（ウェルビーイングの）方が嬉しいかもしれない、頑張れるかもしれない」という思いもあったんですね。



それは何か少し対立しているなどと思って。

三輪さんの場合だと、教師の方を優先して、どんどん幸せにしていこうぜ、という取組が行われているけれども、先生という観点で見ると、生徒の幸せこそが先生が一番の幸せになったりもするのかなって思って。基調講演のスライドを見せてお話いただいた中でも、9ページにやりがい搾取の辺りの人で、とても幸せそうな人たちはいっぱいいるじゃないですか。

そういうのを見たら、やはり先生って、生徒の幸せがあればウェルビーイングできるのかなと思って。でもそれだと、今で言うやりがい搾取だから、そのバランスがすごく難しいなと思ったのですが、どんなものがいいですかね。お願いします。

【露口】 ありがとうございます。「あだちからの日」は私、こう解釈したのですけれどね。

先生方が学ぶ機会だと。楽する機会じゃなくて、先生方が主体的に学ぶ機会ですよ。自分が幸せにしてあげたい人、仮に子どもとしましょう。幸せにしようと思ったら、学んで、授業力をつけないと無理ですからね。指導力の低い先生は幸せにできないから、私は全然対立しているとは思ってなくて。どうですか、三輪先生。

【三輪】 ちょっと説明がうまくなかったみたいでごめんなさい。今、露口先生がおっしゃっていた通りのことで、基本的に子どものために、やっぱり元気に学校に教員も来なくちゃいけない。やはり笑顔で迎えてあげたい。

そのために一時期、例えばフレッシュのために少し休暇を取って、自分の時間を取るというのもありますし、自分自身で計画を立てて研修とか修養に励んでいる先生もいらっしゃるという形でお話したつもりでいました。



合わせて、やはり、子どもの可能性を教員が信じることがまず第一で、きっとやればできるはずだ、で、授業改善を進めていく。そういう先生を見てくれたら、子どもたちから見ても、先生への信頼感が高まる。こういう相乗効果というのですかね。循環というのですかね。そういうことにつながるというのかなって、お話を伺っていて思いました。ありがとうございます。

【吉野】 ありがとうございます。

【露口】 教師をするなら足立区です。はい。

【吉野】 ありがとうございます。

【山本】 オンラインでご覧いただいている皆様からの質問は特にないようでございますので、それではここで、代表して学生の2人から、今日のこの会議に参加した感想を伺って終わりにしたいと思います。では高木さん、宿さん、それぞれいかがでしたでしょうか。



【高木】 本日は貴重なお時間をいただきありがとうございます。

今日のこのウェルビーイングのお話を通して、自分のボランティア活動や、今まで小、中、高、大学まで、自分がしてきた活動を振り返り、自分の気持ち、相手の気持ち、そして将来自分が教員になる上でウェルビーイングで何が重要なのか、どうやったらウェルビーイング、自分のウェルビーイングを高め、自分の周りを巻き込み、全体的にウェルビーイングをどうやったら高めていけるのかというのを、あらためて深く考えることができました。

これから自分のウェルビーイングを高めていき、周りにも良い影響が与えられるような人になっていきたいなというふうに思いました。以上です。

【宿】 本日は貴重なお時間をいただきましてありがとうございます。

私の方は、今回は絶対にもって帰りたい言葉がいくつかあります。信頼関係と幸福感や自己肯定感の言葉をもって帰りたいと思います。そして、自分だけが幸せではなくて、お互いに幸福感を感じることが大切だと思います。





これからはボランティア活動で自分の力を入れつつ、団体への声かけも必要だと思います。  
以上です。よろしくお願いいたします。

【山本】 高木さん、宿さん、ありがとうございました。本日はご多用の中、5人のパネリストの皆様にお越しいただきまして、これからの地域連携におけるウェルビーイング推進の可能性について、さまざまな立場でお話を伺いました。ありがとうございました。

以上をもちまして、パネルディスカッションを終了いたします。登壇者の皆様に盛大な拍手をお願いいたします。

## 10. 閉会式

### 閉会挨拶：明海大学 副学長 高野 敬三



本日、このシンポジウムにご参加いただきまして、ありがとうございます。基調講演から学生発表、そしてパネルディスカッションを通じまして、ウェルビーイングのことについて理解が深まったかなというふうに考えております。長時間の間、特に学生にはそれぞれ緊張しながらも発表してもらい、露口様からはウェルビーイングを極めてわかりやすくご説明をいただきました。

「子供を取り巻くつながりが生み出す」ここがやっぱりキーポイントなのかなという感じがしております。個人の幸せ、幸福度の追求だけではなく、「子供を取り巻くつながり」の中にはさまざまなエージェンシー、キーパーソンがいるわけですが、そういう方々はみんな、やはり、ある一定の成就感を持っていないとウェルビーイングという一つの概念には到達しないなというようなことを学生は学んだかと思えます。

実は、明海大学では、2016年から教職課程センターと合わせて、地域学校教育センターというものを設立いたしました。その趣旨は何かというと、大学で学んでいる教職課程の学生が、そこで学んだことを基に、地域に出て、地域の方々と一緒に協働することにより深めていく、この循環というものを目的に考えて設立したわけです。

そういう意味で、このウェルビーイングという一つの概念を追求する上で役立つ組織なのかなと、自画自賛しているわけですが、学生は皆、いろいろな形でボランティアに参加し、このウェルビーイングというものの概念に近づいているのかなと考えます。

今日の露口様の基調講演、そして学生の発表、このパネルディスカッションを通して、さまざまな形でそういったことの意味づけ、価値づけというものがあるのかなというふうに思っております。

学生にとってはとってもいい機会だったと思います。そしてまた、大学関係者にとっても、とてもいいパネルディスカッションになったな、そしてシンポジウムになったな、というふうに感じております。

いずれにいたしましても、本日、長時間にわたりZoomで参加していただいている皆様方、そして、来場していただいた皆様方、関係者の皆様方、そして特に株式会社トライの皆様方、本当にありがとうございました。これをもちまして、私の閉会の挨拶とさせていただきます。

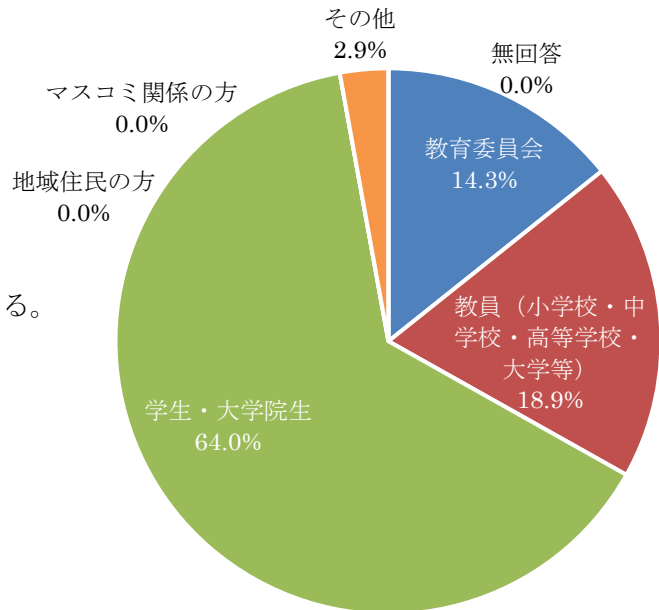
どうもありがとうございました。

## 11. アンケート

### ◆所属を教えてください。

教育委員会	25人
教員（小学校・中学校・高等学校・大学等）	33人
学生・大学院生	112人
マスコミ関係の方	0人
地域住民の方	0人
その他	5人
無回答	0人
計	175人

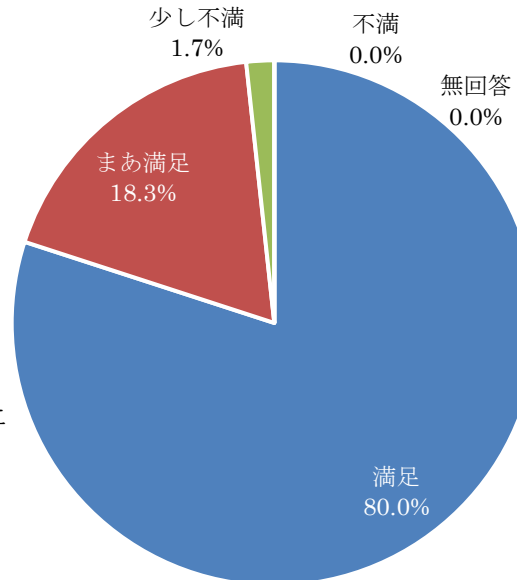
- 回答者数は昨年対比 168%と大幅に増加。学生・大学院生の増加が著しい反面、それ以外の聴講が減少した点は非常に残念である。特に取り扱ったテーマが広く



### ◆基調講演はいかがでしたか。

満足	140人
まあ満足	32人
少し不満	3人
不満	0人
無回答	0人
計	175人

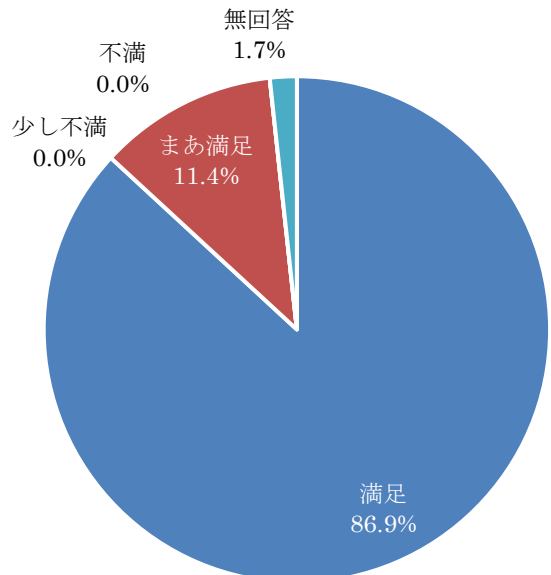
- ウェルビーイングという言葉は初めて聞いたが知見が深まった、重要性に気付くことができたといった意見に加え、講演者の話が勉強になった、面白かったなどの講演者のプレゼンテーションスキルについて評価が高く、本基調講演は参加者に響いた内容であったと考えられる。



### ◆学生発表はいかがでしたか。

満足	152人
まあ満足	20人
少し不満	0人
不満	0人
無回答	3人

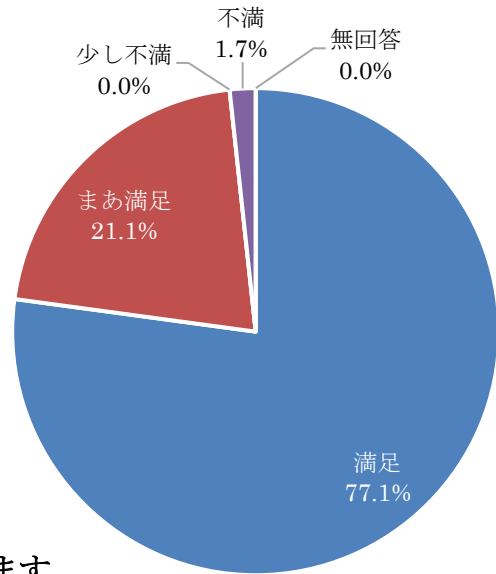
- 自由回答からも、ボランティア活動の具体的な内容がよく伝わった発表であったと評価できる。



◆パネルディスカッションはいかがでしたか。

満足	135人
まあ満足	37人
少し不満	0人
不満	3人
無回答	0人
計	175人

- ・ 参考になった等のポジティブな反応が多数ではあるが、パネルディスカッションとしては物足りなさを感じる参加者も存在するため、以降のパネルディスカッションのスタイルや構成は再考する必要があると考える。



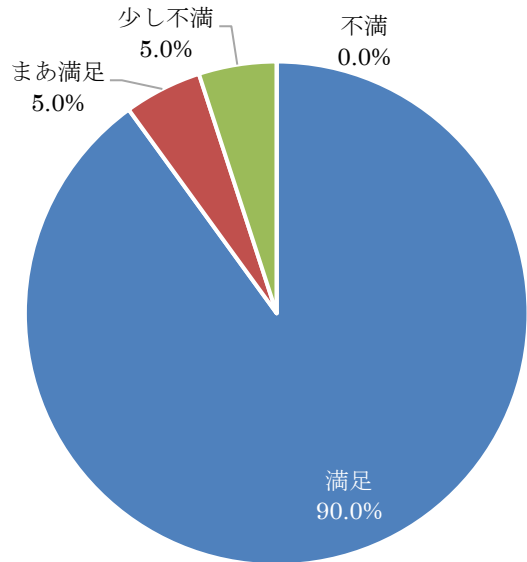
◆Zoom によるオンラインで参加した方にお聞きします。

映像や音声などの配信はいかがでしたか。

(※グラフは無回答除く有効回答 60 件を母数として集計)

満足	54人
まあ満足	3人
少し不満	3人
不満	0人
無回答	115人
計	175人

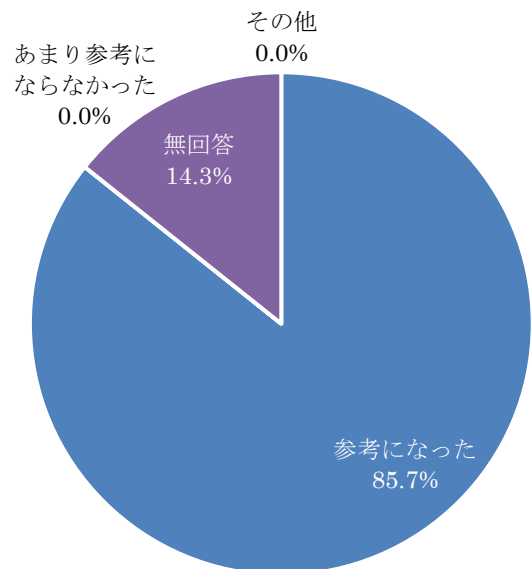
- ・ 自由回答には致命的な不満点、改善点は現れておらず概ね好意的に受け取られていると評価できる。



◆配布資料（リーフレット）は参考になりましたでしょうか。

参考になった	150
あまり参考にならなかった	0
その他	0
無回答	25
計	175人

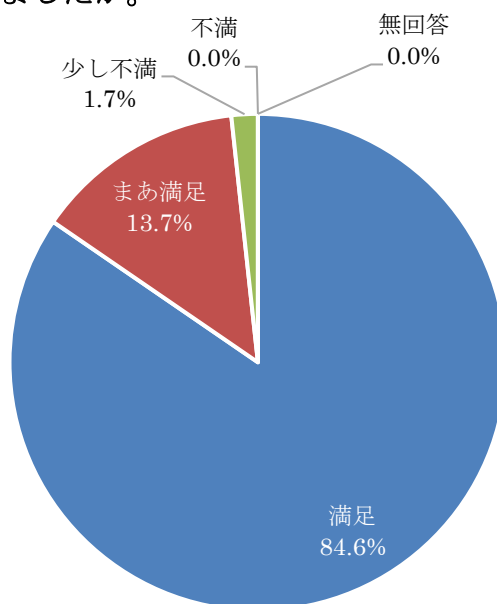
- ・ 学生発表の補助資料として分かりやすくまとめられていた、見やすかったなどポジティブな意見が多く、好評である。



◆総合的に見て、本シンポジウムにご満足いただけましたか。

満足	148人
まあ満足	24人
少し不満	3人
不満	0人
無回答	0人
計	175人

- ・ テーマ、基調講演者のプレゼンテーションスキル、学生発表の内容の充実により、本シンポジウムは非常に高い評価を得ることができたと考えられる。
- ・ ネガティブな意見が見受けられたパネルディスカッションの進行、構成について改善できれば、より高い完成度、満足度のシンポジウムとなるため、この点が来年度以降の課題であるとする。



## 【基調講演 自由回答（一部抜粋）】

---

- ・ ウェルビーイングの重要性に気付くことができた。
- ・ ウェルビーイングについて深く理解できた。
- ・ 知らないことを知ることができたから。
- ・ ウェルビーイングについて初めて知ることが出来たし、学生のボランティアなどの活動について知ることが出来た。
- ・ 露口先生のお話がとても勉強になった。
- ・ 話がとても面白かった。ウェルビーイングについて知識が深まった。
- ・ 露口先生のお話が面白かったです。
- ・ 子ども達のウェルビーイングについて知ることができたから。
- ・ 教師を目指すものとして今周りで起きていることや、自分のことに対して深く学べる点がありました。
- ・ 教師になるための心構えを学べた。
- ・ 受付業務で外から聞いていたのですが、とても熱心にお話頂いているように感じたからです。
- ・ ウェルビーイングについて学ぶことができた。学生の発表で、他の活動のことについて知り、興味を持つことができた。
- ・ ウェルビーイングについて、詳しく知ることが出来た。
- ・ ウェルビーイングに関してとても分かりやすい説明をして下さったから。自身が今後授業計画を立てていく上で考える視点が見えた。
- ・ ウェルビーイングについて充実したくさんの貴重な意見も聞くことができた。
- ・ 自分の暮らしかた改革に繋がっていくと期待しているからです。
- ・ 自分のためになるお話を聞けました。
- ・ ウェルビーイングという言葉正直なところ初めて聞いたため、興味深く感じた。
- ・ ウェルビーイングに関する内容を分かりやすくお話し頂き、良い経験になったと感じているから。
- ・ 聞き慣れない、でも聞いたことあるウェルビーイングについて子どもたちとどう関わりがあるのかなど詳しく知ることができた。
- ・ ウェルビーイングについての理解を深めることが出来たから。
- ・ ウェルビーイングにおけるこれからの活用の仕方やどのようにして推進していくのかを知ることができたから。
- ・ 内容が難しく理解が容易ではなかった。
- ・ ウェルビーイングについて基本的な考え方から実践までを知ることが出来たから。
- ・ ウェルビーイングの真意、重要性と現状について知ることが出来たため。児童生徒の幸せを追求するためにも、教師のウェルビーイングを向上させていく必要性はかなりあり、改めて働き方と働きがいの両面について考えていく必要があると感じた。
- ・ ウェルビーイングがこのシンポジウム内においての内容理解にとっても役に立つ考え方だったから。
- ・ 概要を教育現場の例に合わせてご説明いただき、考えやすかったです。
- ・ ウェルビーイングを考えるととても良い機会になったと思います。
- ・ 子どもを中心としたつながりの中で、それぞれのウェルビーイングとは何かを考える機会となりました。ここで学ばせていただいたことから、区教委として何が出来るかを考えていきたいです。
- ・ well-being について、新たな知見を得ることができました。

- ・概要を教育現場の例に合わせてご説明いただき、考えやすかったです。
- ・子どもを中心としたつながりの中で、それぞれのウェルビーイングとは何かを考える機会となりました。ここで学ばせていただいたことから、区教委として何ができるかを考えていきたいです。
- ・ウェルビーイングに対する認識を深めることができた。
- ・ウェルビーイングとかエージェンシーとかに関心があり、本日の基調講演はグラフを用いてわかりやすく感じた。

### 【学生発表 自由回答（一部抜粋）】

- ・分かりやすく活動内容を報告していて良かった。
- ・さまざまなボランティアがどのようなものか知らなかったため良い機会でした。
- ・色々な活動をやってるんだなと思った。
- ・みんな頑張ってた。
- ・実際の体験があるからこそわかることを色々理解できた。
- ・みなさんの活動、成果、課題がよくわかった。
- ・皆さんが経験したこと感じたことを知れて充実した時間を過ごすことが出来たから。
- ・それぞれのボランティア活動に対して、活動内容や成果が深く書かれており、参加意欲が高まったからです。
- ・知見が増えた。
- ・声のトーン・ボリュームやスライド作成など、こだわりが強く素晴らしいかった
- ・一人一人が詳しく話していて良かった。
- ・いろいろな活動の報告が聞けました。
- ・自分が経験したことがない活動について知ることができ、興味を持つことができました。
- ・ボランティアなどの取り組みについて知ることが出来た。
- ・実際に発表をした立場であるため、緊張しました。
- ・また他の同級生たちもいろいろなボランティアに参加していることに気がつきました。
- ・ボランティア活動で行っている事を詳しく聞くことができ、自分も行っている身として親身に話を聞くことが出来ました。
- ・様々な取り組みについて詳しく知ることができたから。
- ・自分が発表したもの以外にも、様々な活動報告があり、興味深かったです。
- ・様々な活動を行っているということを再確認出来たから。
- ・学生が行ってきたことを通して学んだことを知り、自身も興味を持ったから。
- ・内容が充実だ。
- ・それぞれの活動の成果を十分に知ることができたから。
- ・資料や発表内容などよく考えられていた。
- ・この明海大学で、どのような教育ボランティアが行われているかについて改めて知ることが出来たから。私自身、地域連携という言葉に関心はあったが、それをボランティアという形で行動に移すことが出来ていなかった。そのため今回の学生発表を聴き、良い刺激となった。これからは教育ボランティアのみならず、他者との交流を意識し、ウェルビーイングを向上させるためにも、積極的に活動に参加していきたい。

- ・学習指導における地域連携に協力度合を知ることができたから。
- ・日々の連携事業が、学生にとってどのような学びとなっているのかを知ることができました。
- ・それぞれの連携事業に学生の皆さんがどのようなお気持ちで臨まれているのかよくわかりました!!
- ・それぞれの取組について、丁寧に発表いただきました。

- ・みんなよく頑張った!
- ・学生の取り組みに対する熱心さが伝わってきました。
- ・若い方々の経験は貴重で、その考えを知ることはこの機会でないといけないから。

### 【パネルディスカッション 自由回答】

- ・参考になった。
- ・多くの意見を聞くことができました。
- ・もうちょっと話し合いをして欲しかった。
- ・時間が少し押していたのが残念
- ・和やかに話していて、それぞれの所属の話が聞けてよかった。
- ・wellbeing について考えを深めることが出来た。
- ・内容的には少し難しいものと考えていましたが、学生にわかりやすいような言葉遣いだったので、聞いていてとても楽しかったです。ありがとうございました。
- ・ためになった。
- ・非常に自分自身のためになることを1時間の間で多く得ることが出来た。
- ・よかった。
- ・ウェルビーイングについてよくわかっていない部分も多かったんだけど、パネルディスカッションでとても理解することができました。
- ・ウェルビーイング、幸福感、自己肯定感について、深く知ることができた。共感することや、もっと知りたいと思うことが知れてよかった。
- ・様々な現場の様々な意見を聞くことができ、参考になる部分が多くあった。

- ・ウェルビーイングに関してたくさんの意見を聞いた。
- ・非常に参考になりました。
- ・様々な方の意見を聞くことが出来ました。
- ・それぞれの観点からの意見を聞くことができたから。
- ・それぞれの方たちが、ウェルビーイングとどう関係していたかそれぞれの考えを理解できた。
- ・教育現場などの現状や課題を聞くことが出来たから。
- ・自分が幸せになってほしい相手の幸せは自分の幸せだという話が、教員としてだけでなく、一社会人の立場として最も重要だと感じた。
- ・登壇者のそれぞれの視点から意見を聞くことができた点。
- ・ウェルビーイングの理解が深まりました。
- ・ほぼパネリストによるものでオーディエンス側からすると必要性を感じられなかった。
- ・パネラーどうしでの意見交流があり、議論に広がりがあったから。
- ・ウェルビーイングについて様々な観点からお話を聞くこと出来たから。学校における関係の重要性、ボランティア活動におけるウェルビーイング



グの発生について知ることが出来た。これから活かしていきたい。

- ・ 基調講演では聞けなかった露口先生の意見を多く聞くことができたから
- ・ 「相手に関心をもつ」「お互いさま」の相乗効果という、考える視点を明確にさせていただけたように思います。
- ・ 露口先生から最後に頂いたウェルビーイングはまず相手に「関心」を持つことから、本当に腑

### 【Zoom 開催 配信 自由回答】

---

- ・ オンラインによって、場所を選ばず学ぶことができました。
- ・ クリアに聞けました。移動の時に、こちらの都合で切断されてしまう場面もありましたが、配信状況は良好でした。
- ・ 通信の乱れ等も一部でしかなく高いクオリティ

### 【配布資料について 自由回答】

---

- ・ 内容が分かりやすく、メモ欄もあった為自分なりにまとめることができたから。
- ・ 必要な情報が全て記載されていた。
- ・ 見やすい。
- ・ 資料がみやすかった。
- ・ わかりやすい。まとめられていた。
- ・ 見やすかったと感じました。
- ・ 資料を合わせて聴くことでより理解が深まったから。

### 【次年度以降 シンポジウムテーマ 自由回答】

---

- ・ なんでも参加してみたいです。
- ・ 引き続きウェルビーイングについて。
- ・ 「多様性」「インクルージョン」の社会と「個別最適な学びと協働的な学び」の学校。
- ・ できれば地域連携もう少しお聞きしたくも感じ

に落ちました。ありがとうございました。

- ・ 教授、区教委、校長、学生と様々な視点からの意見が聞けたのでよかったです。
- ・ ウェルビーイングに対するパネリストそれぞれの考えを知ることができた。
- ・ 教師の学ぶ時間を保障することで、全員のウェルビーイングにつながることに共感したから。

でした。

- ・ スムーズでした。

- ・ リーフレットがあることにより、内容がより分かりやすくなったと考えているから。

- ・ 発表の骨子がよくわかりました。
- ・ 学生の発表の補助資料となっており、大変読みやすかったです。
- ・ 認識を深めるために文字資料はありがたいです。
- ・ メールに添付されていて、大変役に立つから

ましたが、個人的には不登校対策についても関心があります、なかなか難しいでしょうか？

- ・ 生成 AI、カリキュラム・オーバーロード、VUCA。
- ・ AI について、エージェンシーについて

## 【全体を通して 自由回答】

---

- ・ 結構長かったです。
- ・ ウェルビーイングについてとても理解が深まる機会となりました。これからは幸福を追求するために信頼を意識の下行動していきたいと思いません。本日はありがとうございました。
- ・ 様々なお話を聞くことが出来ましたありがとうございます。
- ・ 新たな知識を得ることができる良い機会になったと考えています。
- ・ 完璧です。
- ・ 次はシンポジウムのより中心に近いところで参加したいと思った。
- ・ 平素よりお世話になっております。学ぶ機会をいただき、ありがとうございました。
- ・ いつも足立区の子どもたちのためにご尽力ありがとうございます!今日は本当に勉強になりました。ありがとうございました😊
- ・ 本年度もシンポジウムに参加でき、教育に携わる者として考えていくべき視点に気付けることができました。ありがとうございました。
- ・ また参加したいと思った。ありがとうございました。素晴らしい学生さんだったと思いました。

その他の事業報告

---

## 12. 日本語指導教員研修（足立区／都立飛鳥高校／都立田柄高校／都立南葛飾高校）

報告：外国語学部日本語学科教授 木山 三佳、同講師 志賀 玲子、田川 麻央

### 1. 概要

日本の学校に在籍する外国人児童生徒等の指導にあたる先生方が専門的な知識を身につけられるよう、日本語が十分ではない児童生徒の学習支援、日本語指導についての研究成果や教育方法についての教員研修会をおこなっている。2021年度日本語指導が必要な児童生徒数は5.8万人を超えた。多様な背景を持つ外国人児童生徒等に対する日本語・生活・学習等の指導は広範囲にわたる専門的知識を必要とする。

明海大学外国語学部日本語学科では、日本語指導が必要な児童生徒に対する日本語教育を行うことができる教員や指導者の養成を行っており、その教育にあたる教員が、地域の学校現場で外国人児童生徒等の指導にあたる先生方に向けた教員研修を行っている。

### 2. 研修の日時及び参加者数

#### (1) 足立区日本語指導研修会

- ・2023年 6月 2日 15時～16時30分  
11月 24日 15時～16時30分
- ・足立区梅田地域学習センター
- ・参加者 10人

#### (2) 都立飛鳥高等学校日本語指導研修会

- ・2023年 10月 18日 13時30分～15時30分
- ・参加者 36人

#### (3) 都立田柄高校日本語指導研修会

- ・2023年 12月 7日 13時30分～14時30分
- ・参加者 15人

### 3. 研修内容及び受講者の感想

#### (1) 足立区日本語指導研修会

- 「外国人等生徒が参加しやすい授業活動」  
担当：木山 三佳

通常の教案を以下の点で見直すと良い。

- ① 達成可能な単元目標に修正する。
- ② 目標に言語面の到達目標を加える。
- ③ 目標に見合った評価（今日のまとめ）に修正する。

- ④ 板書や資料（ワークシート）に認知的・言語的補助をつける。

- 「母語と日本語の両方を育てる教育」  
担当：木山 三佳

第二言語の発達には、母語が確立していることが重要である。認知的発達の面だけでなく、アイデンティティを確立するという面からも、特に、日本生まれや、幼児期に来日した子どもには、保護者に家庭で母語を率先して使うように勧め、学校でも「日本語も大事、母語も大事」というメッセージを発信していくことが望まれる。

#### 受講者の感想

児童の日本語の発達段階を漠然ととらえていたが、学んだ手法を参考に児童のことをより詳しく観察することで実態をとらえ、授業に生かしていきたい。

母語の保持には学校の学習環境はもとより、行政や家庭の協力が不可欠であることが分かった。

児童・生徒の複雑な事情や困難さを多面的に知ることができた。

母語で本を音読させ、それを聞いてあげることが母語の保持に効果があると分かった。

#### (2) 都立飛鳥高等学校日本語指導研修会

- 「ライフコースの視点からの  
海外ルーツ生徒への支援」  
担当：志賀 玲子

ライフコースは定まったものではなく動的なものだと捉えることが肝要である。母語話者生徒にもつながる視点であることは言うまでもないが、JSLの生徒たちに接する際には特に留意する必要がある。それは、生徒たちの多様性・個別性・流動性といった特徴のためである。更に潜在能力を信じることも大切な姿勢である。

ライフコースの視点の重要性を抑えたいうえで、具体的な指導について3つの点からお話した。

- ① 姿勢：判断留保（表面的な評価の回避）、可能性をつぶさない支援、ライフコースの視点からのアプローチが大切である。
- ② 基本的な日本語指導：文脈で学ぶ。場面や相手を意識した生きた日本語を扱い、身近な事柄に落とし込んでいくことが効果的である。抽象概念を理解し蓄積することが将来につながる。
- ③ 教科につなぐ日本語指導：日本語を正しく理解する力がより求められる。母語で理解している概念を日本語に活かすという視点も欠かせない。

### 受講者の感想

東京都立飛鳥高等学校

定時制副校長 下西 伸枝

明海大学専任講師志賀玲子先生から、「ライフコースの視点からの海外ルーツ生徒への支援」について、36人の本校教員が、研修を受けました。

研修では、外国ルーツの生徒が、日本人になる必要はない。アイデンティティを大切に、日本語もこれまでのことも生かした生徒の育成をすることが支援だということを皮切りに、日本語指導のポイントなど例を挙げてわかりやすく御教授いただきました。講演会後は、志賀先生に質問したいと順番を待つ本校教員の列ができておりました。職員室に戻ってからも、大変素晴らしい研修会だったと、感想が漏れ聞こえる状態。このような研修の機会をくださったことに、本校職員一同心より感謝しております。



### (3) 都立田柄高校日本語指導研修会

- 「日本語指導が必要な生徒のためのライティング指導」  
担当：田川 麻央

高等学校での教育を通して社会で必要とされる学力を身に付けるためには、「書く力」が必要であ

る。ここでいう「書く力」は文字を書くという狭義の書く力だけではなく主体的に考える思考力も含んでいる。高校生の場合、母語による「書く力」が身に付いている場合がほとんどであるが、そのような中で第二言語としての日本語による書く力をどのように伸ばしていけばよいだろうか。

本研修では第二言語で求められる書く力を生活言語能力、学習言語能力の視点から整理したうえで、日本語学習と教科学習の側面からどのような指導ができるか、支援の方法を検討した。

- (1) 育成する力、目標に合わせたジャンルの設定
- (2) 他の技能と組み合わせた書く前活動
- (3) 身近で書く必要性のあるテーマを選択
- (4) モデル文の提示でイメージ作り
- (5) 細かいステップに分けて文章化

### 受講者の感想

東京都立田柄高等学校

副校長 石村 晶子

第二言語の「書く」力は、言語習得の中で、聴く・話すなど他の領域と異なる発達のしかたをすること、文章の添削においても、教師の肯定的なフィードバックが大切なことなど、生徒の言語習得のプロセスが体系的に理解でき、指導の要諦を改めて認識しました。さらにレポート作成、志望理由書作成など具体的な指導例も御教授いただきました。大変貴重な研修の機会となりましたこと、感謝申し上げます。

東京都立田柄高等学校

教諭 佐藤 龍平

研修を通して、「書くこと」が、いかに複雑なプロセスを含み、修得に時間を要する技能であるかということに気づかされました。講義では、第二言語習得論の観点から「書く力」の育成について御教授いただき、また作文指導の具体例や『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の紹介など、日本語指導の場面において実用的で役立つ情報をお教えいただきました。

校内で広く共有し、今後の指導に活用させていただきたいと思います。

## 13. 2023 年度 英語授業改革セミナー

参加学生	外国語学部英米語学科 4年 上原 二葉、川元 麻衣、桑原 百蘭、向後 志穂、 児島 晴香、小林 優汰、佐久間 陸人、佐藤 有志、 直井 乃々美、前田 花奈、八代 涼花、吉田 未来 3年 小川 翔太郎、小川 悠真、折笠 渉、喜多 功祐、 高木 由紀、安田 結貴、吉澤 阿門、吉田 優奈
------	---

### 1. はじめに

2023年8月1日に第6回「明海大学・朝日大学共催・2023 英語授業改革セミナー」を開催した。明海大学での対面式と Zoom によるオンライン形式を併用した形での実施となり、全国から小学校、中学校、高校の先生方、教育委員会の方々、大学教員、大学生、教育関係者が 220 人参加した。

### 2. 実施概要

開講式での明海大学 中畠 裕 学長と朝日大学 大友 克之 学長の挨拶に続き、第1部の基調講演では、文部科学省初等中等教育局外国語教育推進室 教科調査官、国立教育政策研究所教育課程研究センター 研究開発部教育課程調査官 入之内昌徳 先生から、「学習指導要領の趣旨を踏まえた中学校外国語科の学習指導の改善・充実 ～ コミュニケーションを図る資質・能力の育成を目指すための英語教師の指導力～」という演題で、学習指導要領の概念にそった授業について、多くの示唆に富む講義が行われた。講演後には会場とオンラインの参加者との質疑応答が活発に行われた。



・基調講演 入之内 昌徳 氏

第2部では2つの時間帯（13:00～14:15、14:30～15:45）にそれぞれ4つのワークショップが行われ、講師が授業改革や学習評価に関して、実用的な方法を提示したり、受講者同士の意見交換を促

したりした。

ワークショップ A では朝日大学経営学部・英語教育センター長 亀谷 みゆき 教授と同センター 児玉 靖明 准教授が、主に高校教員を対象として「困っていませんか？授業改善－授業づくりのエッセンスー」というテーマでティーム・ティーチングの手法をとりながら、講義や模擬授業、ディスカッションを行った。



・ワークショップ A

児玉 靖明 氏 亀谷 みゆき 氏

B では都立千早高校 中村 隆道 主幹教諭が高校教員を対象に「『発信力』を育成する 豊かな授業づくりとは ～ 論理・表現の授業から～」について具体的な指導法を示した。



・ワークショップ B

中村 隆道 氏

C では元千葉県旭市で長年外国語教育に携わり、現在は千葉大学教育学部英語科非常勤講師の加瀬政美 先生が、中学校教員を対象に「「わかったこと、できたことをどのように使うか」(思考・判断・表現力) にフォーカスした英語指導法の実践一技

能統合「リテリング」を通して、理解し伝えることのできる英語運用能力の育成を目指してー」について紹介した。



・ワークショップ C 加瀬 政美 氏

D では明海大学 METTS (教職課程センター・地域学校教育センター) 副センター長 石鍋 浩 教授と江東区立辰巳中学校の大木田 陽子 主幹教諭が「小中接続を意識した授業実践を考える」について、事例等を示しながら、参加者を巻き込んで活発な討議を行った。



・ワークショップ D

大木田 陽子 氏と石鍋 浩 氏

今年度はワークショップ B、C、D にアシスタントとして、明海大学英米語学科卒業の現職外国語科教員を配置した。B では千葉県立千葉西高校嶋田 宗晋 教諭が、C では市原市立湿津中学校錦織 由佳 教諭が、D では足立区立第五中学校池田 義友 教諭が、グループワークの補助等を行った。

3人の先生方はいずれも明海大学在学中に、サポート学生として本事業に参加した経験がある。

### 3. サポート学生の役割

基調講演を含むすべての会場で、明海大学外国語学部英米語学科の教職履修学生が、配信や記録、誘導等を担当した。配信担当学生は会場と配信上の音声に配慮しつつ、参加者がチャットに上げてくる質問等のとりまとめ等も行った。



・配信担当 4年 小林 優汰、3年 小川 悠真

### 4. サポート学生の感想

- ・開講式や基調講演の配信を担当したのでとても緊張しましたが、無事にやり終えたときには達成感がありました。(4年 児島 晴香)
- ・私自身は卒業後小学校教員になるので、配信のお手伝いをしながらも、ワークショップ C で聞いた「小中接続を意識した授業実践」の内容がとても勉強になりました。(4年 上原 二葉)
- ・ワークショップ C で学んだジグソー法にとっても興味をもちました。ぜひ模擬授業に取り入れたいです。(3年 吉澤 阿門)
- ・受付を担当しました。METTS の先生方が外部からの来場者に配慮しながら、行事を運営されている姿が印象的でした。(4年 桑原 百蘭)

### 5. 成果と課題

本セミナー自体の成果は次の受講者からのフィードバック(抜粋)に集約される。

○全国学力調査の結果に関する分析など、今一番話題となっていることについて聞くことができたので、現在の外国語教育の課題について大変よくわかった。

○最後は教師が変わるしかないという結論が大変勉強になった。

参加学生にとっての成果(○)と課題(▲)して次の3点を挙げる。

- (○) 学外にも配信されるオンライン会議の技術を担当することにより、ICTに関する知識と技能を向上させる機会となった。
- (○) 著名な講師の講義を聴講する機会に恵まれたこと。
- (▲) 配信担当学生の不安を軽減するために、機器操作について十分に研修を行う必要がある。

# 14. 2023 年度教職課程・地域学校教育センター (METTS) の歩み

報告:教職課程センター副センター長 石鍋 浩

## 1. 2023 年度の活動について

本年度、METTS では、前教職課程センター副センター長の池田公紀教授が勇退され、新たに浅田勉教授(前千葉県立印旛明誠高等学校長)を迎え、新たな組織となった。新型コロナが5類に移行し、7月の教員採用試験に向けた対策講座をはじめ、小学校・中学校におけるボランティア活動(小学校英語支援、ちば!教職たまごプロジェクト)、小学生や高校生を大学へ招いての交流活動(あけみ英語村、大学生と話そう会)、中学校・高等学校への訪問(授業参観と協議)、海外研修(豪州ウーロンゴン大学)、勉強合宿、教科法合宿など、多くの教育活動が従来の形を取り戻した1年であった。

一方、オンラインによる活動や事業運営も積極的に取り入れることができ、より充実した教育活動が展開できた。

## 2. 2023 年度教職課程履修者数

(2023年5月1日現在)

	日本語	英米語	中国語	合計 (昨年)
1年次	19	21	0	40 (51)
2年次	21	14	0	35 (63)
3年次	16	38	1	55 (45)
4年次	16	25	2	43 (34)
科目等履修	0	0	0	0 (0)
合計 (昨年)	72 (82)	98 (107)	3 (4)	173 (193)

## 3. 2023 年度

### 公立学校教員採用試験合格者

本年度は、教員採用試験受験者が延べ37人(現25卒12)、うち1次合格者が29人(現19卒10)、2次合格者が24人(現16卒8)である。

毎年10人前後の合格者を出してきたMETTSではあるが、2次試験合格者が24人(含:卒業生、東京都期限付)を数え、昨年度の12人から2倍に増えた。このことは、他の大学と比較しても非常に高い評価をいただけるものと確信する。

本年度から、限られた自治体とは言え、3年生が教員採用試験を受験できる制度ができたことも忘れてはならない。本学では、3年生4人が「通過者」となった。彼らは、来年度の1次試験が免除される。また、東京都の採用試験は、今まで行われてきた集団面接がなくなり、2次試験は面接と実技(英語)のみとなった。来年度は、受験日程を早める自治体も多くある。METTSとして、今まで以上に各地区の動向を注視しながら、学生への指導をしていかねばならない。

千葉県	中高国語4 (現3、卒1)
	中高英語5 (現2、卒3)
	小学校全科1 (現1:英米語)
東京都	中高国語4 (現3、卒1)
	※うち現2:期限付 中高英語7 (現6、卒1)
茨城県	中英1 (卒1)
新潟県	中英1 (卒1)
川崎市	中国1 (現1)

## 4. 教職課程センター事業

### 4月 第3回教員採用全国模試

「ちば!たまごプロジェクト」開始  
玉川大学連携小学校教員養成特別プログラム開始

### 5月 教員採用試験対策(教職教養・論文・面接)

開始  
教育実習開始(前期32、後期10)

### 6月 教育実習研究(精錬)授業参観集中期

### 7月 教員採用試験受験者激励会

教員採用試験(1次)受験(現25卒12)  
各都県教員採用試験2次対策面接講座開始  
教員採用2次対策実技(英語)講座開始

### 8月 各都県教員採用試験(2次)受験

(現19卒10)

### 9月・10月

教員採用試験(2次)発表(現16卒8合格)

### 10月 教職座談会(卒業生5人が登壇)

教員採用試験ガイダンス(3年2年)  
教員採用スタート模試(全3年2年希望者)

### 11月 2024年「ちば!教職たまごプロジェクト」

募集



- 12月** 2年生教職ガイダンス（教育実習校開拓）
- 1月** 玉川大学連携小学校教員免許取得説明会  
東京都教育委員会教員採用選考説明会／  
教員採用試験合格体験発表会  
千葉県・千葉市教育委員会教員採用選考  
説明会／教員採用試験合格体験発表会  
2年中学校訪問（浦安市立見明川中・富岡中）  
3年高校訪問（千葉県立磯辺高・千葉西高）  
第1回教員採用全国模試
- 2月** 教職海外研修（豪州 ウーロンゴン大学）
- 3月** 新4年生対象教職勉強合宿（勝浦）  
教員免許状交付式  
第2回教員採用全国模試  
新年度各学年ガイダンス  
2023 教職課程センター研究紀要刊行

## 5. 地域学校教育センター主な事業

- 4月** 足立区連携事業第1回連携協議会
- 5月** 連携高校（6校連）第1回連絡協議会  
日本語教育支援（都立飛鳥・南葛飾高）開始  
校内寺子屋支援（都立葛西南高）開始  
連携高校交流会「大学生と話そう会①」  
足立区民対象英語講座（前期）開始  
足立区立中学校英語教育支援開始  
浦安市教育委員会第1回連携協議会  
浦安市青少年自立支援未来塾支援開始  
横手市包括連携事業連携協議会  
文部科学省委託事業（MEIKAIO-JOE）開始
- 6月** 足立区日本語指導第1回研修会（小学校）  
足立区小学校英語教育支援開始  
足立区中学生留学生等交流会（扇中）  
浦安市学習支援事業（トライ）・あけみ学童  
支援事業（ワーカーズコープ）開始
- 7月** 都立田柄高校留学生交流会  
足立区中学生留学生等交流会（十四中）  
浦安市立小中学校支援開始
- 8月** 連携高校交流会「大学生と話そう会②」  
足立区立中学校英語教員宿泊研修（勝浦）  
明海大・朝日大「英語授業改革セミナー」
- 9月** 明海大学 SDGs 入学選抜プログラム開始
- 10月** 都立飛鳥高校日本語指導研修  
足立区民対象英語講座（後期）開始  
明海大学あけみ英語村 2023（島根小）  
足立区連携事業第2回連携協議会

- 11月** 連携高校（6校連）第2回連絡協議会  
足立区スピーチ・プレゼンテーション コンテスト  
明海大学あけみ英語村 2023（花畑一小）  
足立区中学生留学生等交流会（千寿桜堤中）  
足立区日本語指導第2回研修会（小中学校）
- 12月** 都立田柄高校日本語指導研修  
足立区中学生留学生等交流会（谷中中）
- 1月** 足立区立小学校英語教員宿泊研修（勝浦）  
足立区連携事業第3回連携協議会  
（中畷学長、長谷川副区長臨席 Zoom 開催）  
教育ボランティア活動報告会（3人が報告）  
足立区中学生留学生等交流会（十中）
- 2月** 2024 明海大学「大学と地域連携の未来」  
シンポジウム
- 3月** 浦安市教育委員会第2回連携協議会  
連携高校（6校連）第3回連絡協議会  
文部科学省委託事業（MEIKAIO-JOE）  
報告書提出

# 15. 2023年度METTS NEWSLETTER 第1号から第10号 ※表面のみ

◆第1号 (2023年4月21日)

◆第2号 (2023年5月22日)

## METTS NEWSLETTER

2023年4月21日 (第1号)

教職課程センター・地域学校教育センター

特集 2023年度 教員・講師採用実績

一層深い実践を体験し、2023年4月から教職に従事する卒業生は正規教員11人、准師6人となりました。今年度は群馬県初めの採用者が出たこと、東京府に5人の採用者が出たことが特徴です。

**正規教員**

鈴木 歩 さん	(英米語卒)	東京都江戸川区立清南第一中学校 (英語)	
岡野時佳 さん	(英米語卒)	東京都足立区立北町中学校 (英語)	
橋本ありま さん	(英米語卒)	東京都江戸川区立小松川中学校 (英語)	
小野雅春 さん	(英米語卒)	東京都墨田区立寺島中学校 (英語)	
内藤 卓 さん	(英米語卒)	東京都江戸川区立志田第三中学校 (英語)	
小林悠太 さん	(英米語卒)	千葉県市川市立特別支援学校 (特別支援)	
佐藤有由貴 さん	(英米語卒)	千葉県立高崎高等学校 (英語)	
山崎年彦 さん	(英米語卒)	千葉県立常陸高等学校 (英語)	
結城美里 さん	(英米語卒)	千葉県長生村立一小中学校 (小学校全科)	
佐藤美穂 さん	(英米語卒)	群馬県岡市立笠岡西中学校 (英語)	
飯島しん さん	(英米語卒)	千葉県浦安市立高野小学校 (小学校全科)	

**講師**


小林忠余 さん	(日本語卒)	千葉県立清英高等学校 (英語)	
矢野友一郎 さん	(日本語卒)	愛知県安城市立作野小学校 (小学校全科)	
米元拓光 さん	(英米語卒)	東京都足立区立千寿桜南中学校 (英語)	
加藤天音 さん	(英米語卒)	千葉県市川市立第四中学校 (英語)	
藤葉晴斗 さん	(英米語卒)	千葉県市川市立第三中学校 (英語)	
植田裕哉 さん	(英米語卒)	千葉県市川市立第五中学校 (英語)	

なお、千葉県高等学校英語教員として各都道府県採用された、合格の権利を行使したまま筑波大学大学院人文社会科学研究科人文社会科学専攻修士前期課程人文社会学位プログラム英語教育でサブプログラムに進みました。卒業生の皆さまの活躍を期待しています！

**大池公紀 METTS 副センター長 最終講義**

3月24日、前年取で明海大学を卒業された外国語学部教授でMETTS副センター長の大池公紀教授の最終講義が行われました。大池教授は高野副学長とともに教職課程センター(METTS)の創設に携わり、これまで多数の教職課程履修学生の指導と教員の輩出に多大な貢献をしてくださいました。最終講義では、自身のこれまでの歩みと教員時代のことから、歴が3人で学内の小さな部屋でスタートしたMETTSにも触れながら、参加した多数の学生・卒業生に向けて、目配り感謝、人間らしさ、創造力が大事であるという心もったメッセージが聞かれました。最終講義には本学の学生・卒業生・教職員・旧職員43人が参加し、大池先生のご退任を心から惜しむ声と涙の感謝の言葉が聞かれました。

大池先生のご退任を心よりお祝い申し上げます。

 隔いのアジヤで講義を聞くMETTSメンバー

## METTS NEWSLETTER

2023年5月22日 (第2号)

教職課程センター・地域学校教育センター

特集 教員採用試験準備が本格化

METTSでは、7月に行われる教員採用試験の対策を強化しています。今年度は、教職課程を履修している45人の4年生(日本語卒14人、英米語卒25人、中国語卒2人)の内25人が、千葉県、東京都、群馬県、栃木県、茨城県、熊本県、川崎市の教員採用試験を受験する予定です。このため、以下のような対策講座により25人の教員が一丸となって教員志望の学生の夢を叶えるための準備をしています。

なお、今年度から3年生から教員採用試験を受験できる自治体があります。本学でも9人の3年生が受験予定です。

- 筆記試験対策講座**  
学習指導要領、教育用語、教育時事、教育心理、教育史、各自治体の教育施策といった分野から出題される知識教養対策と漢語、英語の専門教養対策として、教員による筆記や、ビデオ授業の取組などを通じて試験対策を進めています。学生からは、「METTSの先生方が解説する重要ポイントが、繰り返し出題されていることなどを知り、ポイントが覚えやすくなったと感じた」「自分が希望する自治体の教育施策をよく知ることが大助かりだった」との声が聞かれました。
- 論文問題対策講座**  
教員採用試験では、与えられたテーマに対して教育問題について考えを述べる小論文が課せられる傾向があります。このためMETTSでは、論文問題対策講座を行い、読み手になる側の立場で力や書き方などについて添削指導を繰り返すことで、合格発表を書く力が身に付くようにしています。学生からは「論文に慣れることで、自分が必要な教育になりたいのがを深く考える機会になる」との声が聞かれました。
- 面接試験対策講座**  
面接試験準備についての質問が多くなり、受験者同士が切磋琢磨しあえる前向きなための対策も強化しています。教員としての熱意、使命感、達成感、人間性、謙虚さ、向上心で実践できる力があるかどうかをみる面接に対応できるように、面接の準備となるDVDを視聴した後、学生が自らの経験を面接官に伝えることができるよう模擬面接を繰り返し行って実践しています。



METTSでアジヤで受験準備をする学生たち

年度	人数	増減
1年度	23	20
2年度	23	13
3年度	16	38
4年度	18	25
合計	80	98

合計 181人

日：日本語科  
英：英米語科  
中：中国語科  
(2023年5月22日現在)

◆第3号 (2023年6月26日)

◆第4号 (2023年7月27日)

## METTS NEWSLETTER

2023年6月26日 (第3号)

教職課程センター・地域学校教育センター

特集 「大学生と話そう会」大成功！

5月28日、2023年度第1回「大学生と話そう会」が開催されました。新立南高等学校、新立南高等学校、新立南高等学校、県立南高等学校の本校から、42人の高校生が参加し、そのうち22人は様々な自治体や地域の出身をもち、外国人生活の参加者でした。また、8人の引継教員も参加してくださいました。高校生たちは、午前中にオープンキャンパスの大学紹介や学科魅力発見セミナーなどを見学した後、学生食堂マリナズで夕食を摂り、午後には30周年記念館スチューデントホールでの交流会に参加しました。

ボランティアスタッフとして教職課程を履修している本学日本入学生15人及び外国人入学生15人が高校生と一緒に15台のテーブルにグループを作り、交流会がスタートしました。

高校生からは、大学生活などについて熱心に質問が寄せられ、大学生はそれぞれの知識や経験から高校生にアドバイスした話をしたりしていました。また、ディスカッションでは、昨年度と同様に、SDGsの目標として取り上げられている海洋資源、貧困、教育などの問題の現状、その原因や解決策について議論を交わしました。

参加した高校生からは、「今回の体験で大学生活を知りたいという思いが一層強くなりました。などの感想が聞かれました。







**2023年度足立区民対外「海外で役立つ初級英会話講座」第1クール始まる**

5月21日、足立区との連携協定に基づき、足立区民対外「海外で役立つ初級英会話講座」の第1クールの第1回講座が足立区の「こども支援センター」で開かれました。この区民講座は2017年から実施されているもので、2022年のコロナ禍での中止もありましたが、今年で6年目となるもので、今回も抽選で選ばれた32人の区民(10代から70代)が全5回の講座を受講します。

講師は、本学地域学校教育センターの百瀬美穂教授、多言語コミュニケーションセンターのPatricia Hayashi 教授と Tyson Rode 教授です。また、学生スタッフとして、教職課程履修の英米語学科3年の田中啓菜さん、宿舎職員さんと安田結貴さんが受講者の通訳をササゲーしました。

受講者の一人である市川和俊さん(71歳)は、1足立区の区民として初めて応募しました。これまで(NHK)ラジオ講座は聞いていたが、これは一方通行なので、今回のこの講座は外国人教師が直接教えてくれるので相互交流となり意義があると思います」と話していました。

## METTS NEWSLETTER

2023年7月27日 (第4号)

教職課程センター・地域学校教育センター

特集 2024年度採用 教員採用試験への挑戦

7月9日(日)、各自治体で教員採用試験の一次試験が行われ、本学からも教職課程を履修する学生が受験しました。今年度から一部の科目について面接が実施になり、3年生を含む34人が、千葉県、東京都、埼玉県、熊本県、川崎市の教員採用試験に挑戦しました。

教職課程センターでは、合格に向けて取り組んでいるすべての受験生の健闘を祈念するとともに、今後行われる二次試験に向けても、面接練習や模擬試験対策を行い、全力で受験生を支援していきます。

**<受験生の感想>**

- 過去問題と出題形式が少し異なっていたが、落ち着いて全問、いつも通りに解答することができたと思います。
- 面接では、声を大きくはっきりと発言することを意識しました。他の受験生と同じく良い印象を残すことができたと感じています。
- 専門科目は難しかったですが、特に理論と漢文が難しかったので、理論の読解のポイントや漢文の基礎をしっかりと定着させるべきだと思います。
- 「受験は面接」という言葉をよく聞きますが、本当にその通りだと思います。ここまで漢文で勉強できたのは、他の受験者の皆さんの助けのおかげです。仲間が頑張ったおかげで教職課程は合格ができました。
- 結果はどうなるかわかりませんが、受かっていることを願って面接などの準備をしたいと思っています。

**教員採用試験激励会を実施**

7月5日(水)、教員採用試験を受験する学生の激励会を開催し、100人を超える学生と教職員が参加しました。千葉県、東京都、埼玉県、熊本県、川崎市を受験する4年生25人と3年生9人に向け、教職課程センター長である高野副学長から「努力は必要不可欠、必ず受かる！」という力強い励ましの言葉とともに、合格祈願のお祈りとおみくじ、そして「大いに向かいメッセージカードが受験生に手渡されました。参加した教職課程センターの教職員からも激励の言葉を贈りました。

受験生を代表して、日本語学科4年の橋口和希さんと英米語学科4年の原藤百穂さんからは、激励会開催と参加者の謝辞とともに、「本学では自身を信じて夢がかなえるために全力で頑張ります」という思いも込めて激励の言葉を贈りました。教職課程を履修する2、3年生も参加し、卒業生たちの健闘を祈っていました。









2024年度 教員採用試験激励会

◆第5号 (2023年9月29日)

2023年9月29日 (第5号)

## METTS NEWSLETTER

教職課程センター・地域学校教育センター

**特集 教員採用試験一次試験を29人が突破！  
二次試験対策も入念に**

**〇令和6年度教員採用試験（令和6年度採用）一次試験合格者数速報！**

今年度の教員採用試験は、外国語学部日本語学科及び英米語学科の4年生26人と卒業生11人が受験し、29人が一次試験に合格しました。昨年度と比べて19人の増加となりました。都府市別の一次試験合格者数は下表のとおりです。今年度から実施された3年制を対象とする前倒し選考に3年制9人がチャレンジし、千葉県で2人、東京都で2人が通過者となりました。この4人は、来年度の選考において教職教養と専門教科の筆記試験を受験しなくてもよくなりました。

受験先	候補・教科等	受験者数	合格者数	卒業生合格者数	合格者総計
千葉県	中高・国語	5	4	-	4
	中高・英語	10	3	3	6
	小学校・全科	1	1	-	1
茨城県	中高・国語	4	3	1	4
	中高・英語	9	8	1	9
川崎市	中高・国語	1	1	-	1
埼玉県	中高・英語	1	0	-	0
茨城県	中高・英語	1	1	1	1
千葉県	中高・英語	1	-	1	1
新潟県	中高・英語	1	-	1	1
愛知県	中高・英語	1	-	1	1
熊本県	中高・英語	1	0	0	0
合計		36	20	9	29

二つの論文別会場 下：集団討論練習

教職課程センターでは、二次試験対策として、教職教養・一般教養の講座をはじめ、専門教科講座や論文対策講座、集団討論練習など、受験する自治体に応じた対策講座を実施してきました。

二次試験対策は、一次試験終了直後から開始し、29日、続く28日間をわたって実施しました。各地域の試験内容に応じて個人面接や模擬授業に向けて、本番さながらの練習を行いました。英語の実験試験として実験（東京理大）、英語でのスピーチやスピーチのアイスカッション（東京理大）の対策では、嵐300から Patricia Hayashi 教授・Tyson Rode 准教授の熱心な指導のおかげで、受験者一人ひとりに応じたきめ細やかな練習を心が行うことができました。

**＜二次試験後の学生の感想から＞**

〇京大言3人と併走しそうな人だったので、緊張はしたが乗り越えて合格することができたと思う。どこか不安の大きな壁を知ることができた。たくさん練習してよかった。

〇二次対策の原にそれぞれの目標を定めたため不安が解消しやすくなりました。全休を返して、対策の互いに頑張ったのがストレスがあまりありませんでした。

〇勉強時間も、個人面接も、T.Tも、上手い話だったので自信を持って話をしましたが、その場を乗り越えて帰ってきました！そして、私の新しい教育者としての出発点だと思います！

〇ついでに練習してきた成果を十分に発揮でき、後悔なくやり終えることができました。試験当日まで毎日練習に付き合ってくれた、ありがとうございました。

◆第6号 (2023年10月30日)

2023年10月30日 (第6号)

## METTS NEWSLETTER

教職課程センター・地域学校教育センター

**合格おめでとう！教員採用試験（二次合格最終）結果速報**

2023年度教員採用試験合格者が下表のとおり発表されました。今年度の合格者数はこれまでのところ24人となり、過去最高の実績となりました。合格者の皆さん、11月からの活躍を期待しています！

2023年度合格者一覧 (10月13日現在)

当選者名	現任合格者(敬称略)	退任者(敬称略)	人数
東京都中台国語	井上崇聖、二倉愛海、田島大輝	大友真介	4人
東京都中台英語	篠野真、向後志都、赤藤有志、手嶋崇之介、高岸乃々美、吉田未来	米本昭彦	7人
千葉県国語	柳井直也(中)、橋口龍也(高)、牧野美穂奈(高)	小池恵菜(高)	4人
千葉県英語	川村麻衣(高)、奥島新吾(中)	奥島紗希(中)、加藤大真(中)、植野結人(中)	5人
千葉県小学校全科	上原一哉		1人
山形県中台国語	治宮映歩		1人
新潟県中台英語		奥島紗希	1人
茨城県中台英語		中村優希	1人
合計			24人

※現任合格者は全員日本語学科または英米語学科  
※退任合格者は英米語学科  
※千葉県採用名簿発表校は中学校を(中)、高校を(高)と表記

**合格者喜びの声**

METTSの先生方の熱心なご指導を受けることが出来たこと、そして受験準備が通って人として大きく成長できたことに感謝しています。自信を持って試験に臨むことができました。嬉しく思っています。合格おめでとうという声かけのおかげで、試験当日まで頑張ることができました。合格おめでとうという声かけのおかげで、試験当日まで頑張ることができました。合格おめでとうという声かけのおかげで、試験当日まで頑張ることができました。

教員になることは、小学生の頃から憧れていた夢なので、採用試験に合格できてすごく嬉しいです。先生方が友達がサポートしてくれておかげで頑張ることができました。これがゴールではないので、これからまだまだ頑張りたいと思います。(川元麻衣さん)

教員になることは、小学生の頃から憧れていた夢なので、採用試験に合格できてすごく嬉しいです。先生方が友達がサポートしてくれておかげで頑張ることができました。これがゴールではないので、これからまだまだ頑張りたいと思います。(川元麻衣さん)

教員になることは、小学生の頃から憧れていた夢なので、採用試験に合格できてすごく嬉しいです。先生方が友達がサポートしてくれておかげで頑張ることができました。これがゴールではないので、これからまだまだ頑張りたいと思います。(川元麻衣さん)

◆第7号 (2023年11月27日)

2023年11月27日 (第7号)

## METTS NEWSLETTER

教職課程センター・地域学校教育センター

**特集1 あけみ英語村等 METTS 事業報告  
特集2 教員採用試験合格者の声**

10月24日、尾島区との教育連携事業の一環として「明海大学 あけみ英語村2023～小学生異文化交流プロジェクト～」を開催しました。今回は、尾島区立島根小学校6年生86人と本学の外国人留学生・日本人学生約70人が参加しました。

小学生と留学生・日本人学生は14のグループになり、英語で自己紹介を行いました。その後、留学生は写真を使って自国の文化の紹介を行いました。次に、大学生が好きな色や食べ物などを英語で紹介し、小学生がそれに答える活動を行ったり、大学内を巡り英語で施設の紹介を行ったりしました。

最後に、多言語コミュニケーションセンター (MLACC) の Patricia Hayashi 教授、Tyson Rode 准教授の指導のもと、小学生は会場を自由に回って留学生・日本人学生と次々とペアになり、英語の質問に答えてお楽しみゲームをもちろコミュニケーション活動を行いました。

参加した小学生は、「最初は緊張してあまり話せなかったけれど、英語で話しているうちに楽しく話せるようになっていました！大学生の人が、優しく話してくれてうれしかったです」などの感想を寄せてくれました。

また、11月6日には、今年度第2回を開催し、尾島区立花相第一小学校6年生58人と本学の外国人留学生・日本人学生約70人が参加しました。小学生と留学生・日本人学生は12のグループになり、英語で自己紹介や留学生による自国文化の紹介を行った後、小学生は「おすめのお」を英語で説明しました。次に、大学内の施設紹介を英語で行い、最後にネイティブ教員の指導のもと、夏の過ごし方をテーマにコミュニケーション活動を行いました。今回は体育館を会場とし、大学生のサポートを受けながら自発的に英語にチャレンジする小学生たちの姿が見られました。

参加した小学生からは、「1年4ヶ月の人たちと話せて楽しかったです。わからないことがあっても、親切に教えてくれました。などの感想がありました。

◆第8号 (2023年12月22日)

2023年12月22日 (第8号)

## METTS NEWSLETTER

教職課程センター・地域学校教育センター

**特集1：METTS 同窓会 記念すべき第1回総会 開催！**

2016年に教職課程センターが設立されて以来、教職課程研修者は年々増加し、昨年度までに200人以上が教員免許状を取得して木下を巣立りました。これまで60人以上の卒業生が教員採用試験(公立及び私立)に合格して教職に就いています。

「同じ志を持って大学時代を過ごした仲間たちを一堂に集めてお祝いのお祝い報告を報告したい」という要望が卒業生の中で高まり、この度の METTS 同窓会総会の運びとなりました。2023年11月25日(土)、晴れて明海大学で開催された総会には総務センター長の挨拶に始まり、今回の開催に向けて準備を進めてきたメンバーから今後の運営を行う執行役員選出の提案が行われ、以下のごとおり承認されました。

会長 松本 優太さん	千葉県津市立君津中学校	外国語科教諭 2017卒
副会長 佐々木 綾香さん	千葉県八千代高校	外国語科教諭 2017卒
副会長 佐藤 聖奈さん	千葉県立千代田高校	国語科教諭 2020卒
書記 池田 義友さん	東京都尾山台立第五中学校	外国語科教諭 2020卒
会 長 副 長 山本 由希さん	千葉県市川市海津中学校	外国語科教諭 2021卒
理事 長 副 長 堀内 崇さん	千葉県千葉市西區第四小学校	外国語科教諭 2022卒
顧問 池田 圭太さん	千葉県松戸市立松戸中学校	外国語科教諭 2007卒

総会には教職従事者ばかりでなく、他業種に就いている卒業生や現職1年生も参加し、自己紹介、今後、同窓会に期待する活動の要望等について話し合いが行われました。夕刻からはレストラン・ニューマックスで懇親会が行われ、METTS 事務局の話を参加者全員で共有したり、卒業生の近況報告を聞いたりするなど、年齢、業種が異なる卒業生と現職学生、METTS 教員が親交を深める機会となりました。

**小学校教員向け外国人等児童の日本語指導研修会**

尾島区との教育連携に基づく「小学校教員向け外国人等児童の日本語指導研修会」が開催され、区内の小学校から2人、中学校から3人の先生方、あだち日本語学習ルームから5人のスタッフの参加がありました。講師は、外国語学部日本語学科主任・木下三博教授が務めました。

テーマは、「母語と日本語の両方を育む教育」で、日本語指導を担っている外国人児童にとって、母語を保持・育むことがいかに重要であるかを、演習を交えながら理解を深める内容でした。

参加者からは、「母語の保持は学校の学習環境はもとより、行政や家庭の協力が必要不可欠であることが分かった」「児童・生徒の発達の場を多言語で知ることで、母語で本を語らせ、それを聞いてあげることが母語の保持に効果があると分かった。などの感想がありました。

2024年1月22日 (第9号)

## METTS NEWSLETTER

教職課程センター・地域学校教育センター

### 特集 教職特別講義

#### 教職実践演習における特別講義

教職課程4年生の後学期必修科目である教職実践演習では、学校現場の実態や取組、課題への対応等について学ぶために、学校管理職の先生方や学校教育の専門家を講師にお招きし、特別講義を実施しています。今年度は、3人の講師の先生方に特別講義を行っていただきましたので御紹介します。

期日	テーマ	講師
第1回 11月20日(月)	県立高等学校における教育の現状と課題	千葉県立東葛飾中学校・高等学校 校長 稲川 一男氏
第2回 12月4日(月)	学校における現状と課題について ～教員を目指す皆さんへ～	松戸市立第一中学校 校長 西川 康弘氏 明海大学
第3回 12月18日(月)	学校安全について	客員教授 戸田 秀龍氏

第1回の稲川校長からは、学校紹介が続いて、今、県立高校が対応を迫られている課題として、新学習指導要領への対応やOIGスタイル構想の実現、個別の配慮や支援が必要な生徒への対応等についての具体的な取組のお話がありました。その後、今後の課題として、ウェルビーイングや信頼される学校づくりなどについて、学生たちが具体的な取組を考えたグループ協議を行いました。参加した学生からは「教師の仕事は子供たちに教えることから、子供たちの成長を支える仕事へと変わっていること感受到了。子供たちの成長を支える仕事へと変わっていること感受到了」といった感想が聞かれました。



第2回では、西川校長が学校を紹介した後、働き方改革や業務改善、人材不足、教員の資質能力育成等の課題について、学生たちがグループで話し合う機会を設けました。最後に、教員を目指す学生へのメッセージとして、教師を目指す動機や想い、自分のやりたい教師像をしっかりとすることが大切であることなどの言葉多かったです。学生の感想には「様々な課題解決のための手立てや工夫についても知ることができ、4月から教壇に立つ者としては、とても参考になりました」とありました。



第3回は、今年度も安全教育の専門家である戸田客員教授をお招きし、学校安全について御講義いただきました。本講義では、学校での安全教育及び危機管理について、教師として必要な基礎的・基本的知識理解を促すため、近年の学校安全の動向、学校保健安全法等根拠法令等の解説、学校安全計画の作成、災害共済給付及び学校生活・教育活動等での事故防止の方法などについて、具体的な事例に基づき御講義いただきました。この講義を機に、教職課程を履修する学生が教師として必要な資質・能力を身に付けてくれることを期待します。



2024年2月26日 (第10号)

## METTS NEWSLETTER

教職課程センター・地域学校教育センター

### 特集 2024「大学と地域連携の未来」シンポジウム開催

#### 大学と地域の連携によるウェルビーイング推進の可能性

2月4日(日)、今年で6回目となる、2024 明海大学「大学と地域連携の未来」シンポジウムが、対面とオンラインのハイブリッド形式で開催されました。来賓者を含め約10人が参加しました。開会式では、本学の学生である樋口和希さんと消災協会理事、菅野敬三副会長、足立区近藤やよい区長、浦安市教育委員会給食担当教育長からご挨拶をいただきました。

基調講演では、愛媛大学学院の齋藤健司教授から、ウェルビーイングとは何か、子供のウェルビーイング、子供と地域の関係、ウェルビーイングを構築させるためのリーダーシップの在り方などについて、示唆に富むお話を伺いました。

地域連携事業についての学生発表では、都立高校や足立区、浦安市などで行われている日本語指導支援や学習支援、本学留学生との交流会などが紹介されました。

パネルディスカッションには、藤川教授、足立区教育委員会三輪政樹統括指導主事、東京都立幾野高等専門学校江部章校長、本学学生の高木由紀さんら有識者が参加し、地域学校教育センター副センター長山本和志先生のコーディネートのもと、本学地域連携におけるウェルビーイング推進の現状と課題や取組について議論が行われました。

右：基調講演 齋藤 健司 氏

#### 当日プログラム

12:30 開会式  
12:40-13:40 基調講演  
講師：樋口 健司 氏 (愛媛大学大学院教授)  
演題：「子供を取り巻くつながりが生み出すウェルビーイング」  
13:50-15:20 学生発表  
グループA 大学生による日本語指導支援  
グループB 留学生等による児童・生徒との交流  
グループC 大学生による学習支援  
15:30-16:30 パネルディスカッション  
テーマ：「大学と地域の連携によるウェルビーイング推進の可能性」  
16:40 閉会式

学生たち一人一人が、司会や発表者、パネリストの役割をしっかりと果たし、今年も有意義なシンポジウムを開催することができました。






総合司会の樋口さん、菅野さん  
グループCの学生発表  
パネルディスカッションの様子

＜参加者アンケートから＞  
【基調講演】ウェルビーイングとかエージェンシーとかに関心があり、グラフを用いるなどしてわかりやすく感じました。(教員、教師を目指すものとして今期で起きていることや、自分のことに凝じて深く学べる点がありました。(学生)、子どもを中心としたつながりの中で、それぞれのウェルビーイングとは何かを考える機会となりました。現状を振り返りつつ今後の展開を考えることができました。(教育委員会)。  
【学生発表】学生の取り組みに対する熱心さが伝わってきました。(教員)、それぞれの連携事業に学生がどのような気持ちで臨んでいるのかがよくわかりました。(教育委員会)。  
【パネルディスカッション】ウェルビーイングについてよくわかっていない部分も多かったけれど、パネルディスカッションでもとても理解することができました。(学生)、ウェルビーイングについて様々な観点から対話を聞くことができました。(学生)。

# 16. 文部科学省委託事業



## 文部科学省委託 令和5年度明海大学との連携による専門人材育成・確保事業 —MEIKAI-JOE プラス 2023 小学校外国語科等講座— (参考資料)

明海大学 教職課程センター・地域学校教育センター

### 概要

令和2年度から令和5年度までの4年間、明海大学が文部科学省の委託を受けて小学校外国語活動・外国語科に関する講座を行った。令和2年度には東京都足立区、千葉県浦安市、秋田県横手市、令和3年度には福島県いわき市、新潟県妙高市、令和4年度には東京都狛江市、令和5年度には北海道釧路市、岐阜県岐阜市、茨城県土浦市、群馬県前橋市が加わり、10の自治体の教育委員会を連携教育委員会とし講座を実施してきた。また、配信動画を視聴するだけのオブザーバー・ボランティアとして、今年度は、佐賀県伊万里市教育委員会も参加した。

なお、本講座は、小学校英語指導者認定協議会(J-SHINE)、小学校英語教育学会愛知支部理事、公益財団法人日本英語検定協会の協力を得て実施した。



### 1. 受講対象者

連携教育委員会の公立小学校等の教員等とした。特に令和3年度からは中学校の学習指導要領の全面实施となったことから小学校における外国語科等の内容を中学校の英語教育に円滑に移行していくことが大切である。

このことを踏まえて、中学校の英語科教員も参加可能としている。

### 2. 目的

小学校外国語活動・外国語科が導入された学習指導要領を円滑に実施するため、教師の負担を軽減しつつ、質の高い授業を行える指導体制を構築するため、令和2年度～令和4年度と同様に、明海大学「小学校外国語科等講座」(通称:MEIKAI-JOEプラス2023)を開発・実施した。

### 3. 主な講座内容

第1回講座では、令和4年度アーカイブ講座のうち第1回講座「新学習指導要領の原点」を視聴し、今日の外国語教育の在り方について研修した。

第2回・第3回講座までは、これまで実施してきた令和2年度から令和4年度までのアーカイブ講座の中から2つの講座を選択し、視聴する講座とした。

第4回から第13回講座は参加自治体管下の小学校の授業の様子を約15分にまとめた動画を視聴し、オンラインで10の自治体の先生方が協議をする形とした。

第14回・第15回講座は、日本英語検定協会会長の吉田研作先生による本講座全体のまとめと位置付けて実施した。



講座回	日時	テーマ	講師
1回	オンデマンド講座	新学習指導要領の原点 (令和4年度第1回講座) 【講義型】	英検協会会長 上智大学名誉教授 吉田研作
2回	オンデマンド講座	令和2～4年度講座から選択	
3回	オンデマンド講座	令和2～4年度講座から選択	
4回	7/26(水) 9:00～10:30	聞くこと・話すことの指導 【授業研究①】釧路市	J-SHINE理事 共愛学園前橋国際大学客員教授 育英短期大学非常勤講師 井熊ひとみ
5回	7/26(水) 10:40～12:10	小中接続 【授業研究②】狛江市	明海大学教授 坂本純一 明海大学教授 石鍋浩
6回	7/31(月) 9:00～10:30	聞くこと・話すことの指導 【授業研究③】横手市	J-SHINE理事 共愛学園前橋国際大学客員教授 育英短期大学非常勤講師 井熊ひとみ
7回	7/31(月) 10:40～12:10	聞くこと・話すことの指導 【授業研究④】足立区	J-SHINE理事 共愛学園前橋国際大学客員教授 育英短期大学非常勤講師 井熊ひとみ
8回	8/3(木) 9:00～10:30	聞くこと・話すことの指導 【授業研究⑤】いわき市	J-SHINE理事 共愛学園前橋国際大学客員教授 育英短期大学非常勤講師 井熊ひとみ
9回	8/3(木) 10:40～12:10	チーム・ティーチング 【授業研究⑥】妙高市	明海大学教授 百瀬美帆 明海大学教授 米村珠子 明海大学教授 Patrizia Hayashi 明海大学准教授 Tyson Rode
10回	8/17(木) 9:00～10:30	聞くこと・話すことの指導 【授業研究⑦】前橋市	J-SHINE理事 共愛学園前橋国際大学客員教授 育英短期大学非常勤講師 井熊ひとみ
11回	8/17(木) 10:40～12:10	読むこと・書くことの指導 【授業研究⑧】浦安市	小学校英語教育学会愛知支部長 愛知県立大学教授 池田周
12回	8/22(木) 9:00～10:30	学習評価 【授業研究⑨】岐阜市	明海大学教授 金子義隆
13回	8/22(木) 10:40～12:10	チーム・ティーチング 【授業研究⑩】土浦市	明海大学教授 百瀬美帆 明海大学教授 米村珠子 明海大学教授 Patrizia Hayashi 明海大学准教授 Tyson Rode
14回	9/12(火) 15:20～16:20	授業研究講座全体を通して 見えてくる課題と成果 【講義型】	英検協会会長 上智大学名誉教授 吉田研作
15回	10/19(木) 15:20～16:20	小学校英語の指導に当たって 求められる教師の力と小学校 英語担当者に期待すること 【講義型】	英検協会会長 上智大学名誉教授 吉田研作

# 17. 日本語指導（パネル発表）



## 教員研修

木山 三佳・田川 麻央・志賀 玲子

(明海大学外国語学部)

### 概要

日本の学校に在籍する外国人児童生徒等の指導にあたる先生方が専門的な知識を身につけられるよう、日本語が十分ではない児童生徒の学習支援、日本語指導についての研究成果や教育方法についての教員研修会をおこなっている。

### 1. はじめに

- 2021年度日本語指導が必要な児童生徒数は5.8万人を超えた。多様な背景を持つ外国人児童生徒等に対する日本語・生活・学習等の指導は広範囲にわたる専門的知識を必要とする。明海大学外国語学部日本語学科では、日本語指導が必要な児童生徒に対する日本語教育を行うことができる教員や指導者の養成を行っており、その教育にあたる教員が、地域の学校現場で外国人児童生徒等の指導にあたる先生方に向けた教員研修を行っている。

### 2. 研修の概要

- 2023年6月2日・11月24日 15時～16時30分  
足立区日本語指導研修会 足立区梅田地域学習センター 参加者……10名
- 2023年10月18日 13時30分～15時30分  
都立飛鳥高等学校日本語指導研修会 参加者……36名
- 2023年12月7日 13時30分～14時30分  
都立田柄高校日本語指導研修会 参加者……15名

### 3. 研修の内容・ご感想

#### 3-1. 足立区日本語指導研修会

- 「外国人等生徒が参加しやすい授業活動」 担当：木山三佳  
通常の教案を以下の点で見直すが良い。  
①達成可能な単元目標に修正する。  
②目標に言語面の到達目標を加える。  
③目標に見合った評価(今日のまとめ)に修正する。  
④板書や資料(ワークシート)に認知的・言語的補助をつける
- 「母語と日本語の両方を育てる教育」 担当：木山三佳  
第二言語の発達には、母語が確立していることが重要である。認知的発達のみだけでなく、アイデンティティを確立するという面からも、特に、日本生まれや、幼児期に来日した子供には、保護者に家庭で母語を率先して使うように勧め、学校でも「日本語も大事、母語も大事」というメッセージを発信していくことが望まれる。

#### ご感想(足立区日本語指導研修会参加者アンケートより)

第1回研修会の参加者からは、「児童の日本語の発達段階を漠然ととらえていたが、今日学んだ手法を参考に児童のことをより詳しく観察することで実態をとらえ、授業に生かしていきたい」などの感想があった。

また、第2回研修会の参加者からは、「母語の保持には学校の学習環境はもとより、行政や家庭の協力が不可欠であることが分かった」「児童・生徒の複雑な事情や困難さを多面的に知ることができた」「母語で本を音読させ、それを聞いてあげることが母語の保持に効果があると分かった」などの感想があった。

#### 3-2. 都立飛鳥高校

- 「ライフコースの視点からの海外ルーツ生徒への支援」 担当：志賀玲子  
ライフコースは定まったものではなく動的なものだと捉えることが肝要である。母語話者生徒にもつながる視点であることは言うまでもないが、JSLの生徒たちに接する際には特に留意する必要がある。それは、生徒たちの多様性・個性・流動性といった特徴のためである。更に潜在能力を信じることも大切な姿勢である。ライフコースの視点の重要性を抑えたいうえで、具体的な指導について3つの点からお話した。
- ①姿勢：  
判断留保(表面的な評価の回避)、可能性をつぶさない  
支援、ライフコースの視点からのアプローチが大切である。
- ②基本的な日本語指導：  
文脈で学ぶ。場面や相手を意識した生きた日本語を扱い、身近な事柄に落とし込んでいくことが効果的である。抽象概念を理解し蓄積することが将来につながる。
- ③教科につなぐ日本語指導：  
日本語を正しく理解する力がより求められる。母語で理解している概念を日本語に活かすという視点も欠かせない。

#### ご感想(東京都立飛鳥高等学校 定時制副校長 下西伸枝)

明海大学専任講師志賀玲子先生から、「ライフコースの視点からの海外ルーツ生徒の支援」について、36名の本校教員が、研修を受けました。研修では、外国ルーツの生徒が、日本人になる必要はない。アイデンティティを大切に、日本語もこれまでのことも生かした生徒の育成をすることが支援だということを皮切りに、日本語指導のポイントなどを挙げてわかりやすく御教授いただきました。講演会後は、志賀先生に質問したいと順番を待つ本校教員の列ができておりました。職員室に戻ってから、大変素晴らしい研修会だったと、感想が漏れ聞こえる状態。このような研修の機会をくださったことに、本校職員一同心より感謝しております。



#### 3-3. 都立田柄高校

- 「日本語指導が必要な生徒のためのライティング指導」 担当：田川麻央  
高等学校での教育を通して社会で必要とされる学力を身に付けるためには、「書く力」が必要である。ここでいう「書く力」は文字を書くという狭義の書く力だけではなく主体的に考える思考力も含んでいる。  
高校生の場合、母語による「書く力」が身に付いている場合がほとんどであるが、そのような中で第二言語としての日本語による書く力をどのように伸ばしていけばよいだろうか。  
本研修では第二言語で求められる書く力を生活言語能力、学習言語能力の視点から整理したうえで、日本語学習と教科学習の側面からどのような指導ができるか、支援の方法を検討した。
- ①育成する力、目標に合わせたジャンルの設定
- ②他の技能と組み合わせた書く前活動
- ③身近で書く必要性のあるテーマを選択
- ④モデル文の提示でイメージ作り
- ⑤細かいステップに分けて文章化



#### ご感想(東京都立田柄高等学校 副校長 石村 晶子)

第二言語の「書く」力は、言語習得の中で、聴く・話すなどの領域と異なる発達のみならず、文章の添削においても、教師の肯定的なフィードバックが大切なことなど、生徒の言語習得のプロセスが体系的に理解でき、指導の要諦を改めて認識しました。さらにレポート作成、志望理由書作成など具体的な指導例も御教授いただき日頃の教育活動にすぐに役立つ内容を御講義いただきました。大変貴重な研修の機会となりましたこと、感謝申し上げます。

#### ご感想(東京都立田柄高等学校 教諭 佐藤 龍平)

研修を通して、「書くこと」が、いかに複雑なプロセスを含み、修得に時間を要する技能であるかということに気づかされました。講義では、第二言語習得論の観点から「書く力」の育成について御教授いただき、また作文指導の具体例や「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の紹介など、日本語指導の場面において実用的で役立つ情報をお教えいただきました。校内で広く共有し、今後の指導に活用させていただきたいと思っております。

### 4. まとめと今後の課題

- 各研修とも年次重ねることに、より具体的なお質問が出たり、活発な意見交換がなされたりするようになってきた。日本語指導が必要な児童・生徒の指導にあたる現場の先生方のお役に立てるよう研修内容を充実させていきたい。



# 文部科学省認定 MGO留学生サポートプログラム

木山 三佳・大黒 章子

(明海大学 外国語学部・総合教育センター)

## 概要

MGO留学生サポートプログラムは、留学生の社会的自立、職業的自立を促すために日本語の能力に応じた日本語教育及びキャリア教育を行い、日本企業に就職できる人材を養成する。さらに、インターンシップへの参加により職業意識を高め入社後のミスマッチを防ぐ。2022年に文部科学省に認定されたものである。

## 1. 背景

- 近年、少子高齢化に伴う労働人口の減少もあり、経済産業省の「高度外国人材活躍推進事業」、厚生労働省の「外国人雇用サービスセンターの設置」等外国人留学生の日本国内就職を促進しようという施策が数多く行われている。
- 内閣官房の教育未来創造会議では、外国人留学生の就職率を、2033年までに6割にしよう、という目標を示している。
- 大学、大学院を卒業・終了した外国人留学生は2021年度6万8千人あまり。もし、6割が日本国内で就職していれば、4万人余りが労働人口として増えることになり、これは大学新卒就職者の9%弱にあたる。しかしながら、量の観点で労働者を増やすことが目的とはされておらず、「高度外国人材」の定着率の向上という点が、各施策で強調されている。

## 2. 「留学生就職促進教育プログラム認定制度」概要

- 文部科学省は2021年に留学生就職促進教育プログラム認定制度を開始した。
- この制度は、外国人留学生に対する「日本語教育」、「キャリア教育(日本企業論等)」、「インターンシップ」を一体として提供する質の高い教育プログラム(「留学生就職促進教育プログラム」)を文部科学省が認定するものである。この3つは、就職率の高い大学と低い大学の比較で、有意な差がみられたことから、国内就職を促進するために、重要であるとされたものである。(2020年の日本国際協力センターの「留学生就職促進プログラム成果報告書」)
- 当該プログラム修了者が就職活動において各大学が発行する修了証明書を提示することにより、外国人留学生の国内企業等への就職を一層促進する。認定により、企業等における信用度の向上、採用における留学生能力の把握を容易にすることができる。
- 外国人留学生受け入れ促進プログラム(文部科学省外国人留学生学習奨励費)の優先配分の対象となる。
- 高度外国人材育成課程履修支援制度(独立行政法人日本学生支援機構)の奨学金の受給対象となる。

## 4. 日本語教育

日本で仕事をするうえで必要なジェネリックスキルの一つである日本語コミュニケーション能力を育成する。

日本語能力試験N1、PJC実践日本語コミュニケーション検定A-、BJTビジネス日本語能力テスト480点などの資格取得を到達目標とし、日本で就労する際に必要とされる日本語コミュニケーション能力(会話・読解・聴解・聴読解・文章作成)の育成および、商習慣やビジネスマナー等を1~2年次に日本語能力に応じて学ぶ。

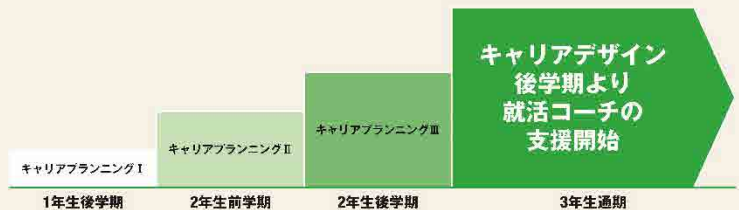
アカデミック日本語  
I・II・III・IV  
1年次

ビジネス日本語講座  
I・II・III・IV  
2年次

## 5. キャリア教育

日本における就職および就職活動を理解した上で社会で求められる力(ジェネリックスキル)の修得を目指し、進路選択の準備に取り組む。

- \*特徴1:  
3つの視点(①自分を知る②社会を知る③自分と社会の接点を考える)から作成したアクティビティにおける体験と気づきで学ぶ。
- \*特徴2:  
一般企業での就業経験がありキャリアコンサルタントの資格を有する教員が、実務経験とカウンセリングスキルを活かし主体的な学習に導く。
- \*主な授業形式:  
個人ワークグループワーク→全体共有



## 6. インターンシップ

企業での就業体験を通じて、日本で働くことへの理解を深めることを目的とする。

<インターンシップ派遣協力会社>

- \*一般社団法人国際交流支援協会との提携による企業:20社  
ホテルグランデコ(福島)、リステル猪苗代(福島)、鬼怒川グランドホテル(栃木)、赤倉セントラルホテル(新潟)、グリーンプラザ白馬(白馬)、つたや本店(木曾)、天城荘(伊豆)他

- \*在日中国企業協会との包括協定による企業:144社  
中国銀行、中商工銀行、銀聯国際、中国国際航空、中国太平保険サービス日本、ボンマーク、ロンレア 他
- \*その他日本企業(インターンシップ派遣協力会社)



# 国家資格「登録日本語教員」について

志賀 玲子

(明海大学外国語学部)

## 概要

2024年度より、国家資格「登録日本語教員」取得のための日本語教員試験が実施される。これは、増加傾向にある日本語学習者に対応するため、日本語教育の質・量を担保するための制度作りの一環として位置づけられるものである。創設の背景、それに関わる法律の成立、具体的な報告書等について紹介する。また、現職者やこれまでの「有資格者」がどのように国家資格を得るのかについて、簡単に示した。現在、私たちは、枠組みが大きく変化する真っ只中にある。

## 1. 背景

近年、日本に在留する外国人の数は増加傾向にある。コロナ禍により一時的な減少は見られたものの、令和4年末には約308万人と初めて300万人を突破し、令和5年6月末現在にはさらに増加を続け約322万人となっている。

また、令和元年度には約28万人だった国内の日本語学習者は、コロナ禍により令和3年度は約12万人に激減したものの、令和4年度には約22万人まで回復している(※2)。

さらに、日本語学習者については、その数が増えているだけではなく彼らの日本語学習のニーズの多様化が進んでおり、共生社会を実現する観点から、それぞれの人が必要な日本語を身につけられる環境の整備が必要となっている。

このような状況の下、日本語教育の機会及び必要な日本語教育を質・量の両面から充実させていくことの必要性が叫ばれ、法整備をはじめ仕組みづくりが着実に進められている(※3)(表1・表2参照)。

登録日本語教員(国家資格)もこうした一連の動きに含まれる、大きな具体的制度である。現在、まさにその制度的過渡期にあると言える。

※1 出入国在留管理庁「令和5年6月末現在における在留外国人数について」 ※2 文化庁「国内の日本語教育の概要」 ※3 文化庁「日本語教育の質の維持向上の仕組みについて(報告)」

表1. 日本語教育に関する法律

2019(令和元)年	「日本語教育の推進に関する法律」成立
2023(令和5)年	「日本語教育の適正かつ確実な実施を図るための日本語教育機関の認定等に関する法律」成立 ⇒2024年度より「日本語教員試験」実施

表2. 日本語教育/日本語教員に関する主な公的報告書

1976(昭和51)年	「日本語教員に必要な資質・能力とその向上策について(報告)」 文化庁：日本語教育推進対策調査会
1985(昭和60)年	「日本語教員の養成等について」 文部省：日本語教育施策の推進に関する調査研究会
2000(平成12)年	「日本語教育のための教員養成について」 文化庁：日本語教育の養成に関する調査研究協力者会議
2018(平成30)年	「日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告)」 文化庁：文化審議会国語分科会
2019(平成31)年	上記(改訂版)
2020(令和2)年	「日本語教師の資格の在り方について(報告)」 文化庁：文化審議会国語分科会
2021(令和3)年	「日本語教育の参照枠 報告」
2022(令和4)年	「日本語教育の参照枠の活用のための手引」 文化庁：文化審議会国語分科会
2021(令和3)年	「日本語教育の推進のための仕組みについて—日本語教師の資格及び日本語教育機関評価制度—(報告)」 文化庁：日本語教師の資格に関する調査研究協力者会議
2023(令和5)年	「日本語教育の質の維持向上の仕組みについて(報告)」 文化庁：日本語教育の質の維持向上の仕組みに関する有識者会議

## 2. 登録日本語教員とは？ その資格取得ルートは？

### 資料1. 登録日本語教員の位置づけ

Q1 日本語教育機関認定法<sup>※</sup>が制定された背景は何ですか。

A 在留外国人が増加傾向にある中で、日本語教育について、教育の質の確保のための仕組みが不十分であることや、専門性を有する日本語教師の質的・量的確保が不十分といった課題が指摘されています。

※前述表1「2023(令和5)年成立の「日本語教育の適正かつ確実な実施を図るための日本語教育機関の認定等に関する法律」」のこと

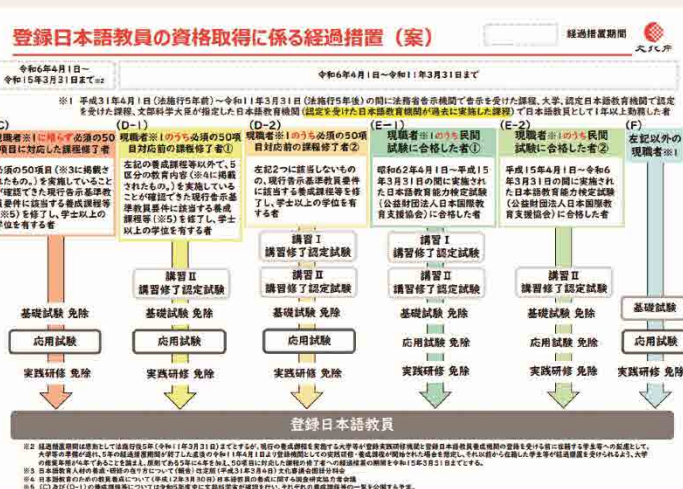
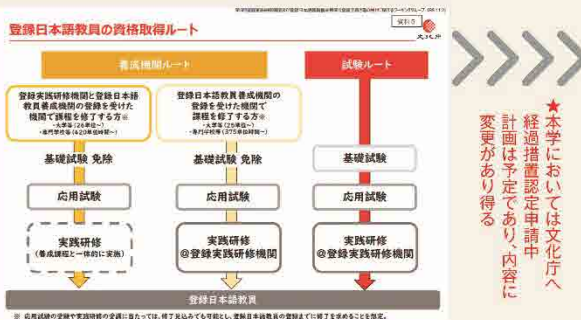
これを受けて、本法律は、日本語教育機関を認定する制度を創設し、また、認定日本語教育機関で日本語を指導することができる登録日本語教員の資格制度を設けるものです。こうした仕組みを通じて、日本語を学ぶ外国人それぞれが必要とする日本語能力が身に付けられるよう、教育の質の確保を図ることとしています。

法律の概要については以下のURLの資料を参照してください。  
[https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo\\_nihongo/kyoiku/pdf/93901401\\_01.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/pdf/93901401_01.pdf)

文化庁「日本語教育機関認定法 よくある質問集」より

[https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo\\_nihongo/kyoiku/pdf/93967502\\_01.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/pdf/93967502_01.pdf) (令和5年12月7日確認) (太文字、下線及び注意書きは本ボスター制作者による)

### 資料2. 登録日本語教員の資格取得ルート



【経過措置】  
 ① 明海大学外国語学部日本語学科の入学生(在学生)が所定の授業科目の単位を修得する(した)場合、応用試験のみ受験⇒資格取得(基礎試験：免除/実践研修：免除)  
 ② 明海大学外国語学部日本語学科で所定の授業科目の単位を修得した卒業生が資格を得ようとする場合、以下の条件により資格取得の過程が異なる。  
 (ア. 卒業年度/イ. 「日本語教育能力検定試験」に合格しているか否か/ウ. 現職者であるか否か)  
 ※適用は原則として令和11年3月31日まで。



20. 2023 年度 METTS 事業参加学生一覧

---

## 2023 年度 METTS 事業参加学生一覧

### 日本語指導支援（飛鳥高等学校）

#### <全日制課程>

応用言語学研究科博士後期課程 3 年 高柳 奈月  
 応用言語学研究科博士前期課程 1 年 浦野 遥風  
 応用言語学研究科博士前期課程 1 年 田中 愛唯

#### <定時制課程>

日本語学科 4 年 李 昊洋  
 日本語学科 4 年 茨田 真愛  
 日本語学科 4 年 チン ヴァン コン

### 日本語指導支援（都立南葛飾高等学校）

応用言語学研究科博士後期課程 3 年 林 苗  
 応用言語学研究科博士前期課程 1 年 田中 愛唯

日本語学科 4 年 茨田 真愛  
 日本語学科 4 年 高橋 紅葉  
 日本語学科 4 年 ヴ バオ ゴック  
 日本語学科 4 年 姜 寵健  
 日本語学科 4 年 チン ヴァン コン  
 日本語学科 3 年 竹澤 佳祐

### 明海大学あけみ英語村 2023（留学生）

日本語学科 1 年 ワイラク ティ ミラクル  
 日本語学科 1 年 ショウ イツレイ  
 日本語学科 1 年 リン ワン イン  
 日本語学科 1 年 チョウ ゲイセン  
 日本語学科 1 年 シン リヤ  
 英米語学科 3 年 スヨン キム  
 英米語学科 3 年 ユキ タカギ  
 英米語学科 3 年 ヘンリー マー  
 英米語学科 3 年 ナサリー ナカガワ  
 英米語学科 3 年 エミー ナガキ  
 英米語学科 3 年 コータ ナルバエス  
 英米語学科 2 年 グェン ホン ユウ  
 英米語学科 2 年 ヴォ スァン フォン  
 英米語学科 1 年 サキャ キリティカ

英米語学科 1 年 イズミ ホマウアス  
 英米語学科 1 年 サリエルミー シモマエ  
 経済学科 3 年 シュク アイビン  
 経済学科 1 年 リュウ マサヨシ  
 HT 学科 3 年 コボリ エミ ホイ メイ

### 明海大学あけみ英語村 2023

#### （教職履修生）

英米語学科 4 年 坪 凌平  
 英米語学科 4 年 磯野 奨  
 英米語学科 4 年 上原 二葉  
 英米語学科 4 年 内山 瑞貴  
 英米語学科 4 年 川元 麻衣  
 英米語学科 4 年 桑原 百蘭  
 英米語学科 4 年 向後 志穂  
 英米語学科 4 年 児島 晴香  
 英米語学科 4 年 小林 優汰  
 英米語学科 4 年 坂脇 海翔  
 英米語学科 4 年 佐久間 陸人  
 英米語学科 4 年 櫻井 栞  
 英米語学科 4 年 佐藤 有志  
 英米語学科 4 年 志垣 悠馬  
 英米語学科 4 年 高橋 昂瑛  
 英米語学科 4 年 手崎 龍之介  
 英米語学科 4 年 直井 乃々美  
 英米語学科 4 年 福岡 拓馬  
 英米語学科 4 年 福川 陽南  
 英米語学科 4 年 保足 晟吾  
 英米語学科 4 年 前田 花奈  
 英米語学科 4 年 村上 光紀  
 英米語学科 4 年 八代 涼花  
 英米語学科 4 年 吉澤 大空  
 英米語学科 4 年 吉田 未来  
 英米語学科 4 年 渡辺 渚稀  
 英米語学科 3 年 池内 夏美

英米語学科3年 小川 翔太郎  
 英米語学科3年 小川 悠真  
 英米語学科3年 折笠 涉  
 英米語学科3年 喜多 功祐  
 英米語学科3年 久保田 波南  
 英米語学科3年 黒沼 瑛心  
 英米語学科3年 高津 誠也  
 英米語学科3年 小林 聖菜  
 英米語学科3年 坂内 隆斗  
 英米語学科3年 佐藤 百恵  
 英米語学科3年 庄子 涼太  
 英米語学科3年 舘田 悠輝  
 英米語学科3年 田中 星来  
 英米語学科3年 田中 啓夢  
 英米語学科3年 田中 陸  
 英米語学科3年 豊島 隼人  
 英米語学科3年 中谷 竜生  
 英米語学科3年 仲田 未羽  
 英米語学科3年 成澤 慎  
 英米語学科3年 野島 翔英  
 英米語学科3年 原山 要佑  
 英米語学科3年 藤木 貴生  
 英米語学科3年 布施 名菜  
 英米語学科3年 古川 湖菜  
 英米語学科3年 森岡 凜  
 英米語学科3年 安田 結貴  
 英米語学科3年 吉澤 阿門  
 英米語学科3年 吉田 優奈  
 英米語学科3年 渡辺 もも  
 英米語学科3年 渡口 純加  
 英米語学科3年 塩入 太陽

#### 足立区中学校異文化交流事業 (扇中学校)

日本語学科3年 リュウ エイロウ  
 日本語学科1年 ワイラク ティ ミラクル  
 英米語学科3年 ナサリー ナカガワ  
 英米語学科3年 ヘンリー マー

英米語学科3年 スヨン キム  
 英米語学科3年 ユキ タカギ  
 英米語学科3年 エミー ナガキ  
 英米語学科2年 ヴォ スアン フォン  
 経済学科3年 シュク アイビン  
 経済学科1年 リュウ マサヨシ  
 HT学科3年 コボリ エミ ホイ メイ  
 HT学科2年 サプコタ ルペス

#### 足立区中学校異文化交流事業

##### (第十四中学校)

日本語学科3年 トウ ゴウ  
 日本語学科1年 ワイラク ティ ミラクル  
 英米語学科3年 ナサリー ナカガワ  
 英米語学科3年 ヘンリー マー  
 英米語学科3年 スヨン キム  
 英米語学科3年 ユキ タカギ  
 英米語学科3年 エミー ナガキ  
 英米語学科2年 ヴォ スアン フォン  
 経済学科3年 シュク アイビン  
 経済学科1年 リュウ マサヨシ  
 HT学科3年 コボリ エミ ホイ メイ  
 HT学科2年 サプコタ ルペス

#### 足立区中学校異文化交流事業

##### (千寿桜堤中学校)

英米語学科3年 ヘンリー マー  
 英米語学科3年 スヨン キム  
 英米語学科3年 ユキ タカギ  
 英米語学科3年 コータ ナルバエス  
 英米語学科3年 ケンカ ダイソ ニコル バレソア  
 英米語学科2年 ヴォ スアン フォン  
 英米語学科2年 グェン ホン ユウ  
 経済学科1年 リュウ マサヨシ

## 足立区中学校異文化交流事業

### (谷中中学校)

日本語学科1年 ワイラク ティ ミラクル  
英米語学科3年 ナサリー ナカガワ  
英米語学科3年 スヨン キム  
英米語学科3年 ケンカ ダイソ コル バレンシア  
英米語学科3年 コータ ナルバエス  
英米語学科2年 ヴォ スアン フォン  
英米語学科2年 グェン ホン ユウ  
経済学科1年 リュウ マサヨシ  
HT学科3年 コボリ エミ ホイ メイ

## 足立区中学校異文化交流事業

### (第十中学校)

日本語学科1年 ワイラク ティ ミラクル  
英米語学科3年 ナサリー ナカガワ  
英米語学科3年 ヘンリー マー  
英米語学科3年 スヨン キム  
英米語学科3年 ユキ タカギ  
英米語学科3年 ケンカ ダイソ コル バレンシア  
英米語学科3年 コータ ナルバエス  
英米語学科2年 グェン ホン ユウ  
英米語学科2年 ヴォ スアン フォン  
経済学科1年 リュウ マサヨシ  
HT学科2年 サプコタ ルペス

## 大学生と話そう会 2023

日本語学科4年 清宮 咲歩  
日本語学科3年 竹内 楓  
日本語学科2年 橋本 義晴  
英米語学科3年 池内 夏美  
英米語学科3年 大野 杏里  
英米語学科3年 久保田 波南  
英米語学科3年 小林 聖菜  
英米語学科3年 佐藤 百恵  
英米語学科3年 高木 由紀  
英米語学科3年 田中 星来

英米語学科3年 富樫 美智雄  
英米語学科3年 長木 愛美  
英米語学科3年 布施 名菜  
英米語学科3年 安田 結貴  
英米語学科3年 吉田 優奈  
英米語学科2年 山本 陽輝

## 大学生と話そう会 2023 (留学生)

応用言語学研究科博士後期課程3年 林 苗  
応用言語学研究科博士後期課程1年 沈 伽迪  
日本語学科4年 ファム ティ トウイ ティエン  
日本語学科4年 姜 チョウ健  
日本語学科3年 董 剛  
日本語学科3年 劉 叡朗  
日本語学科2年 馬 瑞霞  
日本語学科1年 陳 子妍  
日本語学科1年 ワイ ラク ティ ミラクル  
経済学研究科修士課程1年 周 俊輝  
経済学科4年 グェン ティ アン  
経済学科4年 グェン ティ ヴァン アイン  
経済学科4年 黄 新興  
経済学科4年 ホアン ヴァン ドウク  
経済学科1年 劉 優義

## 訪問交流会 (都立田柄高等学校)

日本語学科3年 董 剛  
日本語学科2年 石橋 聡史  
日本語学科2年 付 乙豪  
英米語学科4年 伊藤 千鶴  
英米語学科4年 グェン ティ トウイ ズオン  
HT学科3年 コボリ エミ ホイメイ

## 浦安市小学校英語支援

英米語学科4年 上原 二葉  
英米語学科4年 川元 麻衣  
英米語学科4年 児島 晴香  
英米語学科4年 保足 晟吾  
英米語学科4年 吉田 未来

英米語学科 3年 池内 夏美  
英米語学科 3年 仲田 未羽  
英米語学科 3年 布施 名菜

#### 浦安市小中学校校務支援

日本語学科 4年 牧 和摩  
日本語学科 3年 能勢 舞桜  
英米語学科 3年 渡辺 もも

#### 浦安市未来塾

日本語学科 3年 吉野 青空  
英米語学科 4年 渡辺 渚稀  
英米語学科 3年 池内 夏美  
英米語学科 3年 喜多 巧祐  
英米語学科 3年 坂内 隆斗  
英米語学科 3年 佐藤 百恵  
英米語学科 3年 布施 名菜  
英米語学科 3年 渡辺 もも

#### 浦安市明海小児童育成クラブ

日本語学科 4年 辛嶋 和泰  
日本語学科 2年 梅崎 愛葉  
日本語学科 2年 瓜田 謙心  
日本語学科 2年 早乙女 愛菜  
日本語学科 2年 比嘉 彩夏  
日本語学科 2年 三島 茉姫  
日本語学科 2年 森川 結衣

#### 浦安市学習支援（旧「ドラフトゼミ」）

英米語学科 3年 高木 由紀

#### 足立区民対象生涯学習講座（英語）

英米語学科 4年 上原 二葉  
英米語学科 4年 小林 優汰  
英米語学科 3年 小川 翔太郎  
英米語学科 3年 折笠 渉  
英米語学科 3年 小林 聖菜  
英米語学科 3年 田中 啓夢

英米語学科 3年 富樫 美智雄  
英米語学科 3年 安田 結貴  
英米語学科 3年 吉澤 阿門  
英米語学科 2年 香取 ゆま  
英米語学科 2年 芳野 友介  
英米語学科 2年 大場 伊織  
英米語学科 2年 霜方 柚奈

#### 英語マスター講座成果発表会

英米語学科 4年 磯野 奨  
英米語学科 4年 上原 二葉  
英米語学科 4年 内山 瑞貴  
英米語学科 4年 桑原 百蘭  
英米語学科 4年 児島 晴香  
英米語学科 4年 小林 優汰  
英米語学科 4年 佐久間 陸人  
英米語学科 3年 小川 翔太郎  
英米語学科 3年 折川 渉  
英米語学科 3年 高木 由紀  
英米語学科 3年 田中 啓夢  
英米語学科 3年 藤木 貴生  
英米語学科 3年 安田 結貴  
英米語学科 2年 大場 伊織  
英米語学科 2年 香取 ゆま  
英米語学科 2年 霜方 柚奈  
英米語学科 2年 知念 咲花  
英米語学科 2年 花澤 真彩  
英米語学科 2年 福山 杏吏  
英米語学科 2年 芳野 友介

#### 校内寺子屋（葛西南高校）

英米語学科 2年 齋藤 亜怜  
英米語学科 2年 霜方 柚奈  
英米語学科 2年 知念 咲花  
英米語学科 2年 花澤 真彩  
英米語学科 2年 福山 杏吏

英語授業改革セミナー

英米語学科4年	上原	二葉
英米語学科4年	川元	麻衣
英米語学科4年	桑原	百蘭
英米語学科4年	向後	志穂
英米語学科4年	児島	晴香
英米語学科4年	小林	優汰
英米語学科4年	佐久間	陸人
英米語学科4年	佐藤	有志
英米語学科4年	直井	乃々美
英米語学科4年	前田	花奈
英米語学科4年	八代	涼花
英米語学科4年	吉田	未来
英米語学科3年	小川	翔太郎
英米語学科3年	小川	悠真
英米語学科3年	折笠	渉
英米語学科3年	喜多	功祐
英米語学科3年	高木	由紀
英米語学科3年	安田	結貴
英米語学科3年	吉澤	阿門
英米語学科3年	吉田	優奈



